

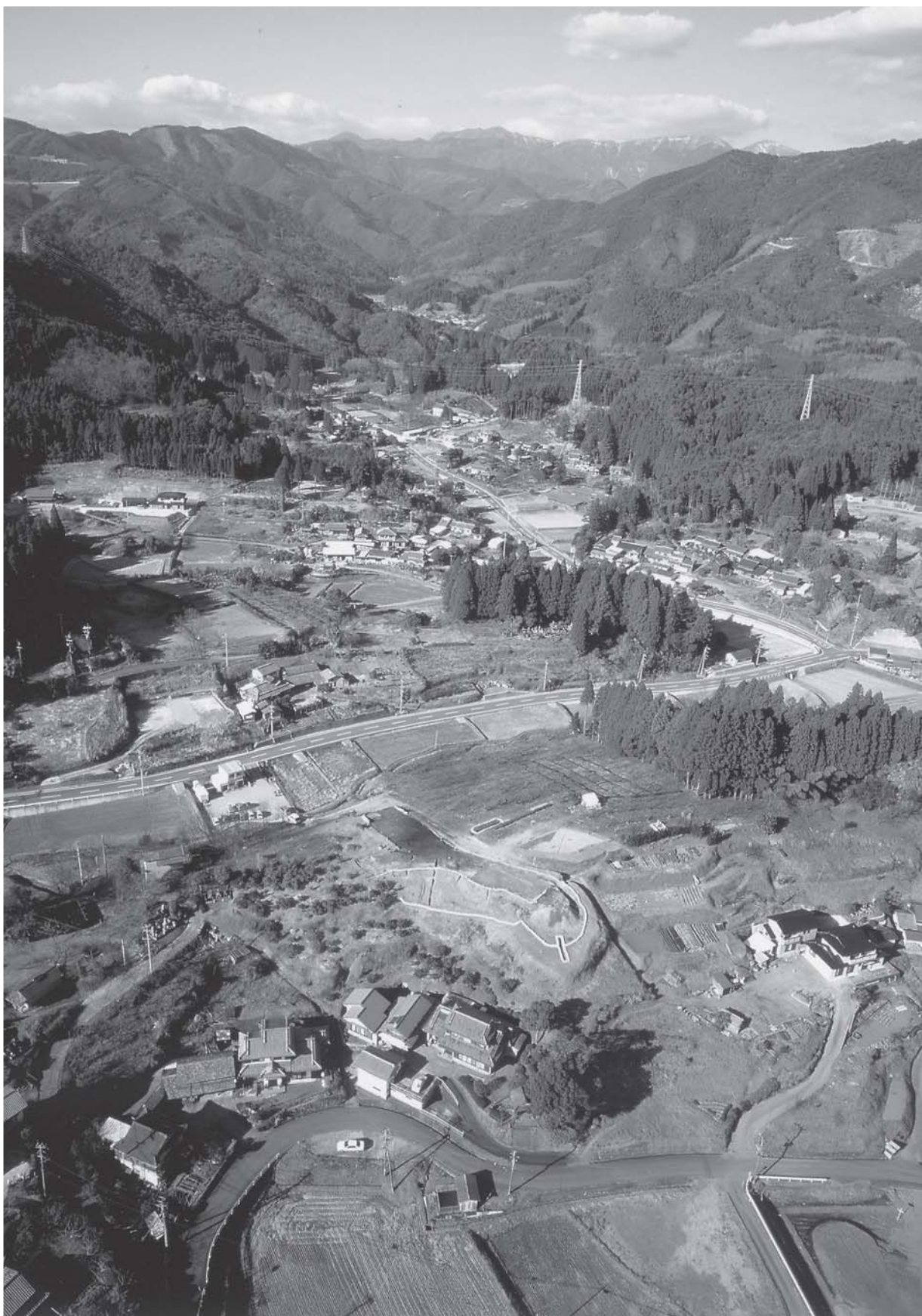
宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第218集

じゅうろうがおいせき
十郎ヶ尾遺跡

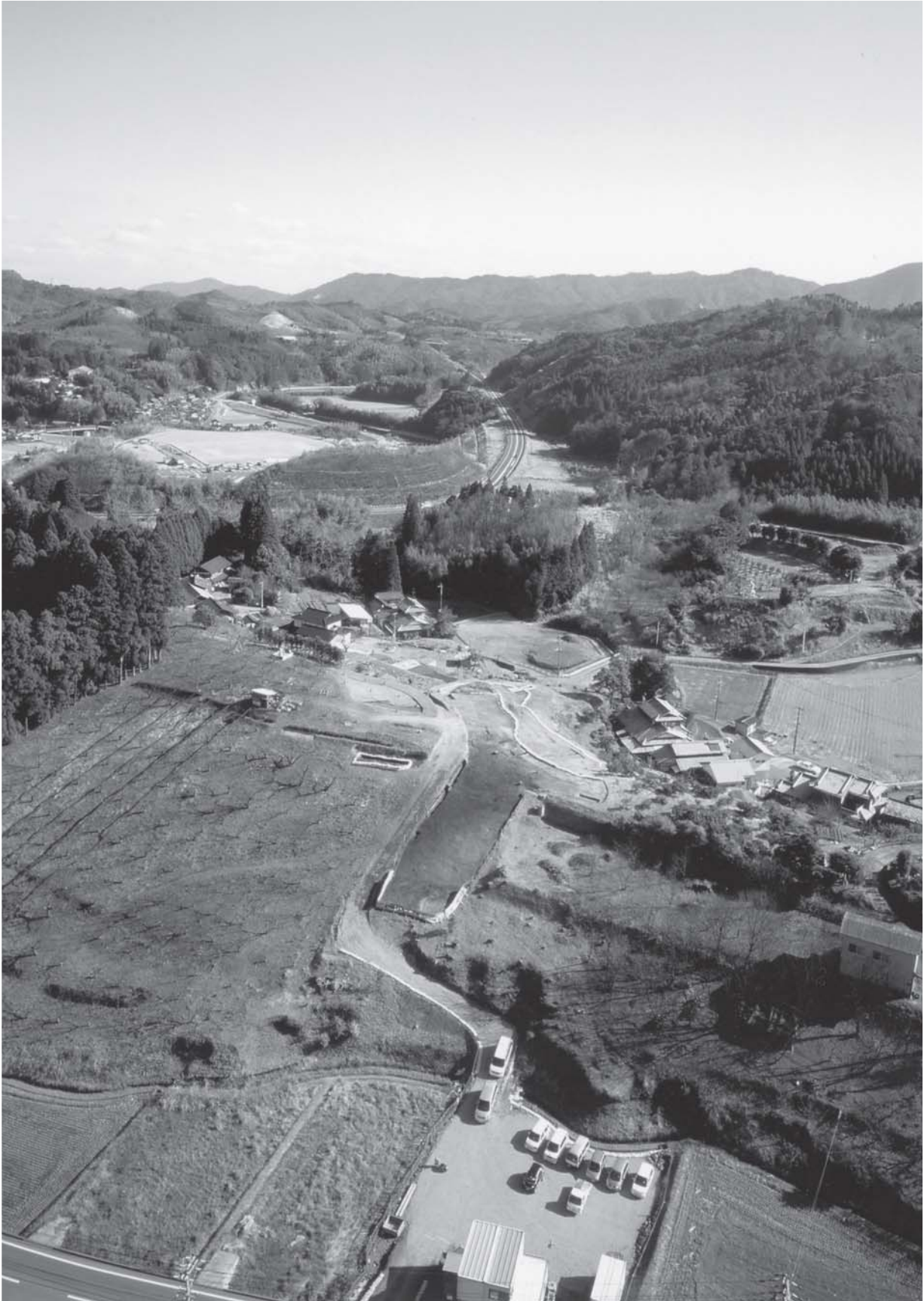
一般国道218号北方延岡道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(8)

2012

宮崎県埋蔵文化財センター



調査区（V層 縄文時代）南東より 祖母傾山方面を望む



調査区（V層 縄文時代）北西より 国道 218 号北方延岡道路の延長線上に位置する

序

宮崎県教育委員会では、平成 22 年度に一般国道 218 号北方延岡道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査を実施しました。本書はその発掘調査報告書です。

本書に掲載した十郎ヶ尾遺跡では、旧石器時代の石器、縄文時代早期の土器・石器や弥生時代後期から古墳時代にかけての住居跡と土器・石器などの遺構・遺物を確認することができました。これらの遺構や遺物は当該期の人々が確かにこの地で暮らしたことを教えてくれます。また、ここに報告する内容は、今後、当地域の歴史を解明する上で貴重な資料になるものと考えられます。

本書が学術資料となるだけでなく、学校教育や生涯学習の場などで活用され、また、埋蔵文化財保護に対する理解の一助になれば幸いです。

最後に、調査にあたってご協力いただいた関係諸機関・地元の方々に対して、厚くお礼申し上げます。

平成 24 年 3 月

宮崎県埋蔵文化財センター
所長 森 隆茂

例 言

- 1 本書は平成 22 年度一般国道 218 号北方延岡道路建設に伴い、宮崎県教育委員会が実施した宮崎県延岡市北方町の十郎ヶ尾遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は国土交通省九州地方整備局延岡河川国道事務所の依頼を受け、宮崎県教育委員会が主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 発掘調査は平成 22 年 11 月 5 日から平成 23 年 2 月 18 日まで行った。
- 4 現地での実測・写真撮影などの記録は、川越宏之、山田高大、黒木俊彦、二宮満夫、和田理啓、深江龍哉が発掘作業員の協力を得て作成した。なお、空中写真撮影は有限会社スカイサーベイ九州、基準杭設置は（株）エースコンサルタントに委託した。
- 5 整理作業は宮崎県埋蔵文化財センターで行った。図面作成・実測・トレースは川越が整理作業員の協力を得て行った。なお、石器の石材同定については当センター普及資料課松田清孝主査、調査第一課調査第二担当松本茂主任主事の協力を得た。
- 6 本書で使用した第 2 図「十郎ヶ尾遺跡の位置と周辺の主な遺跡の分布図」と第 3 図「北方延岡道路関連発掘遺跡位置図」は国土地理院発行の 5 万分の 1 地形図を、第 4 図「十郎ヶ尾遺跡周辺地形図」は国土地理院の承認助言を得て北方町役場が作成した 2500 分の 1 現況平面図を使用した。また、第 6 図「グリッド配置図」は北方町役場が作成した 2500 分の 1 現況平面図を元に川越が作成した。
- 7 本書で使用した土層断面図及び遺物の色調等は農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」による。
- 8 本書で使用した方位は座標北（座標第Ⅱ系）で、レベルの表示は海拔絶対高である。
- 9 本書で報告した遺構はそれぞれ、竪穴建物跡は調査中には S A 2、集石遺構は S I 4 としていたが、本書ではそれぞれ竪穴建物、集石遺構とした。また、S C 3 は S A 2 の突出部とし、竪穴建物跡の一部とした。
- 10 本書の執筆は第 1 章第 1 節を文化財課埋蔵文化財担当主任主事堀田孝博が、その他の執筆・編集を川越宏之が行った。
- 11 出土遺物・その他の諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。

本文目次

第I章	はじめに	
第1節	調査に至る経緯	1
第2節	調査の組織	1
第3節	調査の経過	2
第II章	遺跡の環境	
第1節	遺跡周辺の地理的環境	3
第2節	歴史的環境	4
第III章	調査の概要	
第1節	基本層序	11
第2節	旧石器時代の調査	14
第3節	縄文時代の調査	15
第4節	弥生時代・古墳時代の調査	26
第5節	その他の遺構と遺物	32
第IV章	自然科学分析	42
第V章	総括	45

挿図目次

第1図	延岡市の位置	3
第2図	十郎ヶ尾遺跡の位置と周辺の主な遺跡の分布図	5
第3図	北方延岡道路関連発掘遺跡位置図	7
第4図	十郎ヶ尾遺跡周辺地形図	10
第5図	土層断面図	11
第6図	グリッド配置図	12
第7図	遺構分布図	13
第8図	旧石器時代石器実測図	14
第9図	旧石器時代石器出土位置図	14
第10図	縄文時代礫出土位置図	15
第11図	縄文土器出土位置図	16
第12図	縄文土器実測図	17
第13図	縄文時代石器出土位置図	20
第14図	縄文時代石器実測図1	21
第15図	縄文時代石器実測図2	22
第16図	縄文時代 接合資料出土位置図	23
第17図	剥片集中部拡大図	24
第18図	竪穴建物跡実測図	26
第19図	竪穴建物跡出土土器実測図1	28
第20図	竪穴建物跡出土土器実測図2	29
第21図	竪穴建物跡出土石器実測図	31
第22図	集石遺構実測図	33
第23図	包含層出土土器実測図1	34
第24図	包含層出土土器実測図2	35
第25図	包含層出土土器実測図3	36
第26図	包含層出土遺物出土位置図	37
第27図	包含層出土石器実測図1	38
第28図	包含層出土石器実測図2	39
第29図	暦年較正結果	44
第30図	五ヶ瀬川流域の旧石器時代遺跡の分布	45

表目次

第1表	延岡市周辺遺跡一覧	6
第2表	国道218号北方延岡道路建設に伴う発掘調査	7
第3表	縄文土器観察表	18
第4表	縄文時代石器計測表	25
第5表	竪穴建物跡出土土器観察表	30
第6表	竪穴建物跡出土石器、石製品計測表	32
第7表	包含層出土土器観察表1	40
第8表	包含層出土土器観察表2	41
第9表	包含層出土石器計測表	41

図版目次

巻頭1		巻頭1
	調査区(縄文時代)南東より 祖母傾山方面を望む	
巻頭2		巻頭2
	調査区(縄文時代)北西より 国道218号北方延岡道路の延長線上に位置する	
図版1		49
	竪穴建物跡 東より、竪穴建物跡 北より	
図版2		50
	竪穴建物跡 検出状況 南西より、竪穴建物跡 遺物検出状況	
図版3		51
	竪穴建物跡土器検出状況、竪穴建物跡石器検出状況、 竪穴建物跡張り出し部遺物検出状況、竪穴建物跡焼土検出状況、竪穴建物北西柱穴	
図版4		52
	作業風景、A区IV層上面東より、A区IV層上面ピット検出状況、A区丘陵頂上部西より、 A区V層上面調査風景、A区チャート剥片密集部西より	
図版5		53
	集石遺構 検出状況 半裁状況、南東より、完掘状況	
図版6		54
	縄文土器	
図版7		55
	旧石器時代、縄文時代石器 角錐状石器、石鏃、石核・剥片(報告書掲載分)、 剥片(報告書未掲載分)、石錘・礫器	
図版8		56
	竪穴建物跡出土土器 甕、小型土器、鉢	

図版 9	57
竪穴建物跡出土石器、石製品、ガラス小玉	
図版 10	58
包含層出土土器 甕、壺	
図版 11	59
包含層出土土器、土製品 鉢、小型土器、高坏、土錘、紡錘車	
図版 12	60
包含層出土石器 打製石斧、磨製石斧、石錘、石庖丁、スクレーパー、砥石、礫器	
図版 13	61
包含層出土遺物 陶磁器、播り鉢、仏飯器、黒曜石原石、硬貨、煙管、鉛玉	

第 I 章 はじめに

第 1 節 調査に至る経緯

一般国道 218 号北方延岡道路は、現一般国道 218 号に並行して、延岡市北方町蔵田から延岡市天下町までを結ぶ延長 13.1km の高規格幹線道路であり、建設省九州地方整備局延岡工事事務所（現国土交通省九州地方整備局延岡河川国道事務所）が平成 8（1996）年度に事業化し、平成 13（2001）年度より工事着手している。

同事業は 1～3 工区に分割して延岡側から順次実施されているが、路線内における埋蔵文化財に関する協議を継続中であり、必要に応じて発掘調査等を実施してきた。このうち 3 工区（舞野～延岡、延長 2.1km）が平成 18（2006）年 2 月 18 日に、2 工区（北方～舞野、延長 6.4km）が平成 20（2008）年 4 月 26 日に供用開始となり、残る 1 工区（蔵田～北方、延長 4.6km）については同年 3 月に実施した分布調査の結果に基づき、路線内の 15 箇所を対象として協議を重ねている。

十郎ヶ尾遺跡は 3,700 m²を対象として平成 21（2009）年 7 月 15 日、10 月 28～29 日に確認調査を実施したところ、うち 1,000 m²について埋蔵文化財が影響を受けると判断された。そのため、平成 22（2010）年 9 月 8 日付けで発掘調査委託契約を締結したが、調査対象地が狭長な尾根上に位置することから具体的な調査工程・安全対策等に関する協議を重ね、調査の円滑化を図ることとなった。

発掘調査は宮崎県埋蔵文化財センターが同年 11 月 1 日から平成 23（2011）年 2 月 18 日まで実施した。

第 2 節 調査の組織

十郎ヶ尾遺跡の発掘調査及び整理作業・報告書作成は下記の組織で実施した。

調査主体 宮崎県教育委員会

調査機関 宮崎県埋蔵文化財センター

調査協力 延岡市教育委員会

平成 22 年度 発掘調査

所 長		森 隆茂
副所長		北郷 泰道
総務課長		矢野 雅紀
総務担当リーダー	副主幹	長友由美子
調査第二課長		永友 良典
調査第四担当リーダー	副主幹	大村公美恵
調査第四担当	主査	川越 宏之（調査担当）
調査第一課調査第一担当	主査	山田 高大（調査担当）
調査第四担当	主査	黒木 俊彦（調査担当）
調査第三担当	主査	和田 理啓（調査担当）
調査第四担当	主任主事	二宮 満夫（調査担当）

事業調整

宮崎県教育庁文化財課

埋蔵文化財担当 主任主事 堀田 孝博

(発掘作業員)

西末子、白田達雄、尾形カネ、原田昌代、福谷綾子、柳川ヒデ子、伊東敏明、甲斐和子、村田義人、黒木純子、藤田美保子、河野佐智江、山本八重子、藤田キヌエ、伊東かずえ、日吉道子、西田文代、長村寿子、山内成美、甲斐心太、橋本継美

平成23年度 整理作業

所長		森 隆茂
副所長		北郷 泰道
総務課長		坂上 恒俊
総務担当リーダー	副主幹	長友由美子
調査第二課長		永友 良典
調査第四担当リーダー	副主幹	大村公美恵
調査第四担当	主査	川越 宏之 (整理担当)

事業調整

宮崎県教育庁文化財課

埋蔵文化財担当 主査 堀田 孝博

(整理作業員)

長田博子、福田理恵子、根井康子、唐沢恵理子、古荘美穂

第3節 調査の経過

平成22(2010)年11月1日より、重機による表土掘削を開始し、栗林の管理のための道路を保全するため調査対象地の一部を掘削範囲から除外し、安全確保と試掘結果とを考慮し、掘削面積を700㎡とした。調査区は尾根状の丘陵の北西側斜面にあたり、平均斜度は約30度である。堆積が一様ではない、耕地削平を受けている等の理由により慎重に掘削を行い、15~20cm、深いところで40cmを除去した。

11月5日より作業員を雇用し、人力による掘削を開始した。11月8日、委託により調査の基準となる座標および10m間隔のグリッドを設定した(第6図)。Aグリッドにトレンチを数カ所設置し掘削するが削平により原地形が消失していると判断し調査対象地から除外した。11月29日、A区斜面中央部から北にかけて谷地形に堆積したIV層(アカホヤ火山灰層)上面で多数のピットを検出した。12月7日、重機によりIV層を除去した。12月14日、尾根の頂上部で弥生時代後期から古墳時代にかけてのものと思われる住居跡を検出した。12月16日より尾根の頂上部平坦面の耕作が終了したことを受け掘削を開始しB区とした。削平の影響が大きくB区からは遺構・遺物ともに検出されなかった。12月21日に三槿小学校の発掘体験を実施した。12月22日、住居跡の北西部に散礫を検出した。

平成23(2011)年1月13日よりB区西側の一部をC区として掘削を開始した。A区のIV層に対応するアカホヤ火山灰層を検出したが、耕作の影響を受け依存状態が悪かった。調査期間が残り少なかったため、C区はトレンチ状に掘削して調査した。尾根の頂上部、E4杭付近から土器片の集中区を検出、1月14日、この土器片の集中区からチャートの剥片が大量に出土した。1月20日、斜面の中腹、F3グリッドで集石遺構を検出した。2月8日、F2グリッドで剥片尖頭器様石器が出土した。2月18日に埋め戻しを行い全調査を終了した。

第Ⅱ章 遺跡の環境

第1節 遺跡周辺の地理的環境

地理的条件は人々の生活に大きな影響を与える。開発行為により地形が改変されると、もとの地形・土壌の状態を知ることは困難となる。旧地形から得られる情報は、遺跡立地など人々の昔からの土地利用を知る手がかりとなるだけでなく、土地の高低・地盤の安定性など今を生きる私たちにとっても欠かせない。ここでは本遺跡及び周辺遺跡に特に関係が深いと思われる項目について簡単に述べる。

五ヶ瀬川は水量豊富、水質清澄な河川で、流域に暮らす人々は今も昔もこの川から大きな恩恵を受けている。五ヶ瀬川の源は熊本県との県境にそびえる向坂山（標高1,684m）で、幹川流路延長106km、流域面積1,820km²の一級河川である。年間を通して水量が豊富なため、農業・工業・発電・上水道に安定的に利用されている。また、中上流域は広範囲にわたり自然公園に指定され、中下流には鮎の産卵・生息に適した瀬・淵が多く、観光客や釣り人を引き寄せる観光資源でもある。

河川は浸食・運搬・堆積作用により地形を改変する。本遺跡周辺は五ヶ瀬川の中流と下流の境界付近にあたり、地形が山地から平野へ移り変わる場所である。地形の傾斜がゆるやかになり、それともなつて河川の運搬力も弱まる。ここで

河道が大きく北に湾曲していることも運搬力を弱めている一因である。川水流付近の河川敷には河川が運搬できなくなった小石が大量に堆積している。この付近では15種類以上の石材がみられる。ここで縄文人は目的の石を採集したことだろう。

気温は五ヶ瀬川最上流部でも最寒月平均気温が氷点下になることはない温暖な気候である。

宮崎県は九州山地の東側に位置するため、温帯低気圧や台風がもたらす水分をたっぷり含んだ大気が南東から脊梁山地をかけたのぼり多量の雨を降らせる。これが五ヶ瀬川の豊かな流れを生み出す。雨水は地下にも蓄えられ、長い時間をかけて地表にしみ出す。これが本遺跡周辺の谷の上流部にみられる井戸やため池の水源となる。流域の年間降水量は約2,500mmで日本の平均の1,800mmを大きく上回る。月別では6～9月に最も多い。梅雨と台風で大量の雨が降り、それが一気に山肌を駆け下りると水害を引き起こす。

五ヶ瀬川の水系は、北は祖母・傾山系、西は九州山地、南は諸塚山系に囲まれている。これらの山系は900～1,700m以上といずれも急峻で起伏が大きい。祖母傾国定公園の大崩山系は火山活動によって地



第1図 延岡市の位置

下に形成された花崗斑岩の大岩脈が隆起した後侵食されて形成された。景観が美しいことと岩肌がロッククライミングに好適なために多くの登山客、観光客が訪れる。山地の起伏は本遺跡周辺を境に東側の中下流域ではゆるやかになり、なだらかな丘陵状の間の谷間に水田が広がる景観となる。

日本付近には複雑な地帯構造がみられ、大陸プレートの下に海洋プレートが沈み込む場所では大陸側に古い地層が、海側（太平洋側）に新しい地層が形成されていく。五ヶ瀬川上流には東北から南西へ帯状に古い岩石が分布する。チャートなどの石材は上流で生産されたものと考えられる。本遺跡周辺には諸塚層群（四十万層群）とよばれる、主として硬質な砂岩や頁岩より構成される層が分布する。また、五ヶ瀬川流域には9万年前の阿蘇山の噴火の際に流出した阿蘇火砕流が厚く堆積し、地元ではこれを灰石と呼び墓石などに利用している。灰石は地質が脆弱で治水のためのダム建設を困難にしている。

第2節 歴史的環境

遺跡の位置する延岡市には多くの遺跡が分布している。

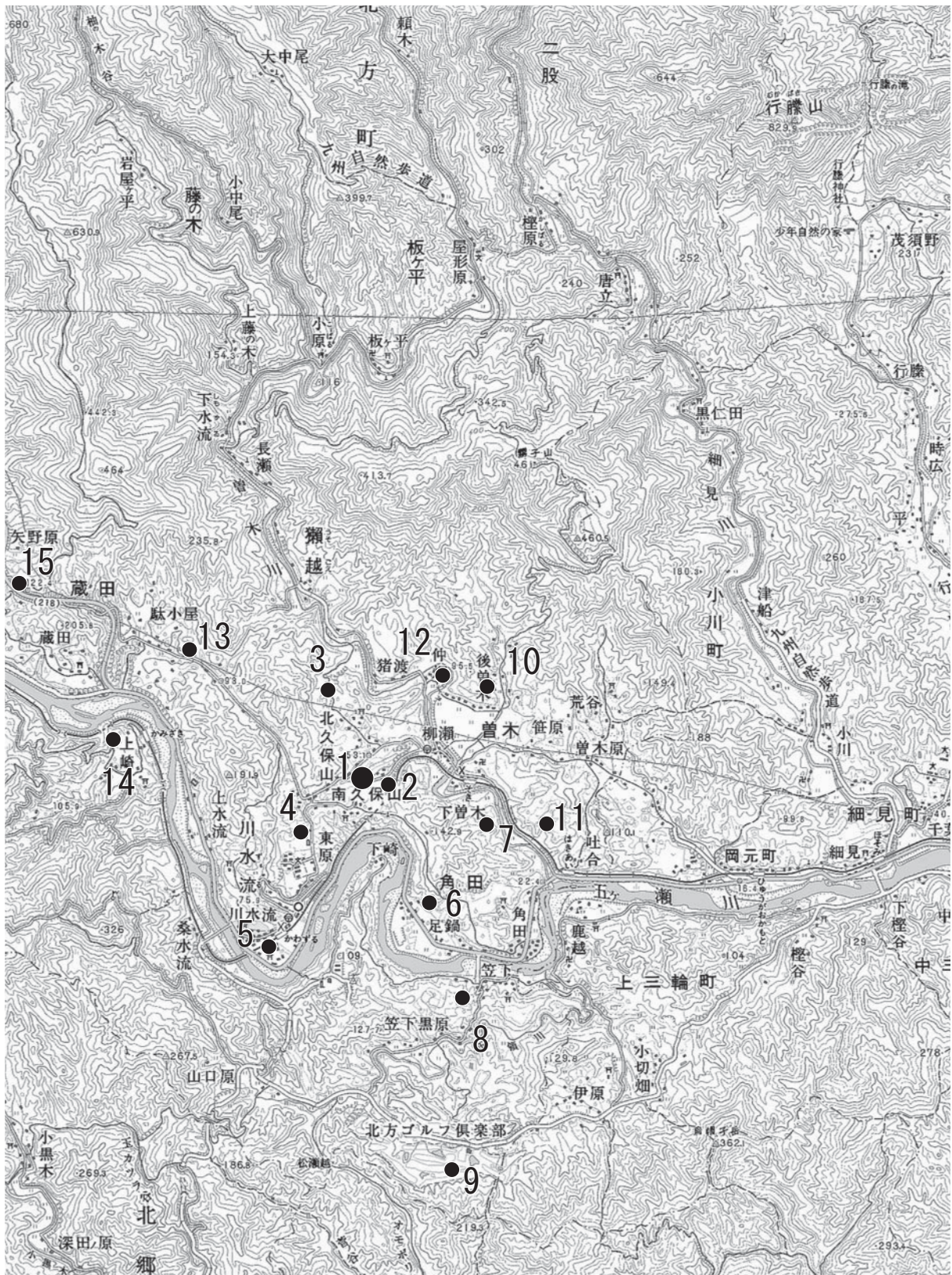
延岡市内における文化財調査の歴史は古く、江戸時代の延岡藩主内藤政韶（1776年～1802年）にはじまる。彼は居宅である西の丸（現内藤記念館）から採集した土器をきっかけに、大貫庁浄土寺山の古墳（現国指定南方古墳群第24号墳）などの調査を行い、「集古標目」「集古採覧」（戦争により焼失）として記録を残している。明治維新前後に活躍した延岡藩家老原時行は、延岡周辺の考古資料を収集し、その中には吉野町出土とされる石剣がある。その後、彼の影響を受けた有馬七蔵は、小学校の代用教員時代に天下町字今井野（延岡植物園周辺）で縄文から古墳時代にかけての遺物を多数収集し有馬コレクションとして学会に広く知られるようになったが、戦災により全て焼失している。対象から昭和初期にかけては、東京大学講師鳥居龍蔵による南方古墳群、延岡古墳群の発掘調査が実施されている。調査は大正14年10月から昭和4年7月にかけて、延べ3回にわたり浄土寺山古墳をはじめとする市内で主要な古墳が調査され、その成果は「上代の日向延岡」として出版され、現在でも重要な文献となっている。戦後の宮崎県における考古学研究は、石川恒太郎（宮崎県文化財保護審議会委員）の功績によるものが大きく、市内でも苺田窯跡、貝の畑遺跡など数多く調査され、「宮崎県の考古学」「延岡市史」などに紹介されている。

旧石器時代

矢野原遺跡、岩土原遺跡、蔵田遺跡、畑山遺跡、笠下遺跡、赤木遺跡、吉野遺跡等、始良Tn火山灰層（以下AT）下位で石器群の確認例がある。AT上位の石器群としては、切出形ナイフ形石器や剥片尖頭器を中心とする一群と細石器を中心とする一群の2つの文化層が確認されている赤木遺跡をはじめ、ナイフ形石器や剥片尖頭器、細石器などが出土している笠下遺跡等、林遺跡や黒土田遺跡、地蔵ヶ森遺跡、吉野遺跡、下曾木慈眼寺霊園遺跡、片田遺跡等がある。岩土原遺跡では、半船底型細石核と隆帯上に爪形文を施した土器が共伴して出土している。

十郎ヶ尾遺跡周辺では東原遺跡内の切り通しアカホヤ層下の黒褐色土層から流紋岩製の石核が出土しているが、平成21年度の延岡市教育委員会の調査でも剥片が出土している。同年調査の北久保山遺跡からは細石核や剥片尖頭器が出土している。

北方延岡道路関連の遺跡として平成18年度に調査された黒仁田遺跡では始良Tn火山灰層の上位から狸谷型のナイフ型石器や剥片尖頭器を含む70数点からなる石器群、更にその上層から細石刃石器群が



- | | | | | |
|------------|---------------|------------|-----------|------------|
| 1 : 十郎ヶ尾遺跡 | 2 : 南久保山小堀町遺跡 | 3 : 北久保山遺跡 | 4 : 東原遺跡 | 5 : 川水流遺跡 |
| 6 : 足鍋遺跡 | 7 : 曾木原遺跡 | 8 : 岩土原遺跡 | 9 : 笠下遺跡 | 10 : 年の神石棺 |
| 11 : 黒仁田遺跡 | 12 : 仲畑遺跡 | 13 : 駄小屋遺跡 | 14 : 上崎遺跡 | 15 : 蔵田遺跡 |

第2図 十郎ヶ尾遺跡の位置と周辺の主な遺跡の分布図 (S=1/50,000)

番号	遺跡名	所在地	種別	時代
1	十郎ヶ尾遺跡	延岡市北方町子南久保山	集落跡	旧石器～古墳
2	南久保山小堀町遺跡	延岡市北方町子南久保山	散布地	縄文～近世
3	北久保山遺跡	延岡市北方町子北久保山	散布地	縄文～近世
4	東原遺跡	延岡市北方町卯川水流	散布地	旧石器～近世
5	川水流遺跡	延岡市北方町卯川水流	集落跡	旧石器～近世
6	足鍋遺跡	延岡市北方町丑角田	散布地	縄文～近世
7	曾木原遺跡	延岡市北方町子曾木	散布地	旧石器～近世
8	岩土原遺跡	延岡市北方町寅笠下	散布地	旧石器～近世
9	笠下遺跡	延岡市北方町寅笠下	集落跡	旧石器～近世
10	年の神石棺	延岡市北方町子曾木	石棺群	古墳
11	黒仁田遺跡	延岡市北方町子曾木	散布地	縄文～近世
12	仲畑遺跡	延岡市北方町子瀬越	散布地	縄文～近世
13	駄小屋遺跡	延岡市北方町辰蔵田	散布地	縄文～近世
14	上崎遺跡	延岡市北方町辰上崎	集落跡	旧石器～近世
15	蔵田遺跡	延岡市北方町辰蔵田	集落跡	旧石器～近世

第 1 表 延岡市周辺遺跡一覧

確認された。特に細石刃石器文化層では複数の石器ブロックが確認されており石器製作作業場としての可能性が報告されている。

縄文時代

矢野原遺跡、地蔵ヶ森遺跡、山田遺跡等がある。地蔵ヶ森遺跡では、押型文土器と塞ノ神式土器の時期の集石遺構 8 基が確認されている。また、山田遺跡では、集石遺構や炉穴群、陥し穴状遺構、円形集石遺構などが確認され、集落構成の理解ができる事例の一つである。また、沖田川流域で沖田貝塚や片田貝塚、五ヶ瀬川流域に大貫貝塚が分布している。

十郎ヶ尾遺跡周辺では東原遺跡内が知られており、石鏃や押型文土器、磨製石斧等が採集されていたが、平成 21 年度の延岡市教育委員会の調査で押型文土器やチャート製の石鏃が出土している。同年調査の北久保山遺跡では晩期粗製深鉢の胴部片が確認されている。また、十郎ヶ尾遺跡では切り通しのアカホヤ層下で集石遺構が検出されている。足鍋遺跡では西平系の土器と多量の石錐が表採されている。散布地として下曾木遺跡がある。

北方延岡道路関連の遺跡として平成 18 年度に調査された黒仁田遺跡では弥生時代終末から古墳時代後期にかけての住居跡 12 軒が検出された。

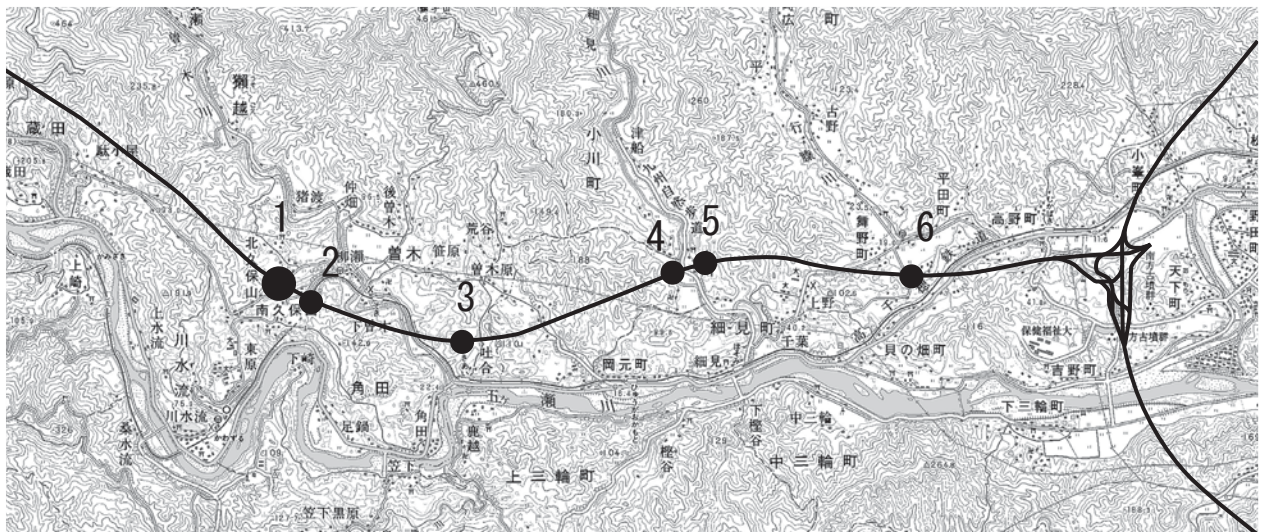
弥生時代～古墳時代

集落遺跡としては弥生時代後期末から古墳時代後期では、中尾原遺跡をはじめ、蔵田遺跡、畑山遺跡、地蔵ヶ森遺跡、山口遺跡第 2 地点、林遺跡、野田町八田遺跡等、集落の確認例が増加する。そのうち山口遺跡第 2 地点では細見川左岸の微高地上に弥生時代後期から古墳時代中後期の住居跡が約 30 軒確認

されており、64軒の竪穴建物跡や掘立柱建物跡、土坑等、大規模集落が確認されている中尾原遺跡や竪穴建物跡6軒のうち1軒から小鍛冶跡と考えられる遺構が確認されている畑山遺跡と、同流域上に展開するこれらの遺跡間の関連性が注目される。蔵田遺跡では、古墳時代の竪穴建物跡が1軒確認され、その一角から磨製石鏃の未製品が45個程確認され、工房の可能性が指摘されている。

墳墓では、多々羅遺跡で箱式石棺墓が確認されている。また、南方古墳群をはじめ北方村古墳、延岡古墳群等、数多くの古墳があり、国指定・県指定史跡になっている。

十郎ヶ尾遺跡周辺の弥生時代遺跡としては川水流遺跡や東原遺跡から石庖丁が発見されている。また、古墳時代の遺跡では後曾木古墳と年の神石棺群があり、いずれも凝灰岩製の箱式石棺が発見されている。また、東原遺跡では平成21年度の延岡市教育委員会の調査で前期の住居跡が1軒検出されている。



第3図 北方延岡道路関連発掘遺跡位置図

遺跡名	時代	調査年度											本調査の期間			
		14	15	16	17	18	19	20	21	22	23					
1 十郎ヶ尾遺跡	旧石器・縄文・弥生・古墳										本調査	報告書刊行	平22.11.1	～	平23.2.18	
2 南久保山小堀町遺跡	縄文										本調査	報告書刊行	平22.1.5	～	平22.3.19	
3 黒仁田遺跡	旧石器・縄文・弥生・古墳					本調査					報告書刊行		平18.5.8	～	平18.12.8	
4 山口遺跡第2地点	弥生・古墳	本調査				報告書刊行							平14.4.30	～	平14.8.1	
5 山田遺跡	旧石器・縄文	本調査											平14.9.25	～	平15.3.27	
		本調査											平15.5.8	～	平15.10.7	
		本調査												平15.10.28	～	平16.3.26
														平16.5.14	～	平16.7.28
6 赤木遺跡第8地点	旧石器		本調査(一次)	本調査(二次)	本調査(三次)	二次調査報告書刊行	三次調査報告書刊行	一次調査報告書刊行					平15.10.28	～	平16.3.26	
													平16.6.14	～	平16.12.15	
													平17.12.12	～	平18.3.27	

第2表 国道218号北方延岡道路建設に伴う発掘調査

古代～中世

葺田窯跡があり、9世紀から10世紀前半にかけて須恵器が生産されている。また、十数軒の掘立柱建物跡や土坑が確認されている畑山遺跡や大型掘立柱建物跡群や土こう墓、五輪塔等の確認された林遺跡等がある。十郎ヶ尾遺跡周辺では足鍋遺跡から土錘が発見されている。

近世

延岡城（延岡城内遺跡）や城下町（延岡城下町遺跡）、窯跡（小峰窯跡）等が確認されている。延岡城については、初代延岡藩主高橋元種が松尾城から中州内の丘陵地に築城したもので、この時に城下町の整備にも着手している。やがて高橋氏から有馬氏、三浦氏、牧野氏を経て、内藤氏の藩政に至り、安定期を迎えることとなる。

北方町教育委員会が平成3年度に行った農業基盤総合整備事業に伴う南久保山小堀町遺跡発掘調査では、古墳時代前期の竪穴建物跡1軒と中世の祭祀遺構4基のほか焼土集中部が検出された。住居の南側の柱穴間に土坑と焼土があり中央部に被熱した花崗岩製の巨礫が置かれていた。祭祀遺構内には円礫や円盤状の土製品、古銭や小砂利が寄せられていた。縄文時代の遺構は検出されなかったが押型文土器や突帯文土器、石鏃や縄文晩期の打製石斧が多く出土している。

北方延岡道路事業関連の発掘調査は2工区、3工区の区間について平成14年度から実施しており、山田遺跡、山口遺跡第2地点、門野遺跡、赤木遺跡第8地点の4遺跡の発掘調査を行っている。山田遺跡は主に旧石器時代や縄文時代早期の遺構や遺物が、山口遺跡第2地点は弥生時代後期から古墳時代中後期にかけての集落跡が、野門遺跡は縄文時代から古代にかけての幅広い時代の遺構・遺物が、赤木遺跡第8地点（第二次・三次調査）は始良Tn火山灰層を挟む上下位において、旧石器時代の遺構・遺物が検出された。

1工区については昨年度の南久保山小堀町遺跡が最初の発掘調査で、引き続いて北側丘陵の十郎ヶ尾遺跡の調査を行った。また、北方延岡道路と接続する国道10号延岡道路（北川町～延岡市）の全長20.6kmは平成6年度から事業に着手したが、埋蔵文化財の発掘調査は平成9年度から15年度までの7年間にわたって行われた。

延岡道路関連の遺跡については林遺跡、吉野第2遺跡、今井野第2遺跡、天下城山遺跡の4遺跡の発掘調査を行っている。林遺跡は、平成9年～12年度の4か年調査を行い、吉野第2遺跡は、平成12・13・15年度に調査を行った。ともに旧石器時代から近世にかけての幅広い時代の遺構・遺物が検出されている。天下城山遺跡は中世山城に関連する遺構・遺物が検出された。

【参考文献】

北方町史編纂委員会 1972「北方町史」北方町

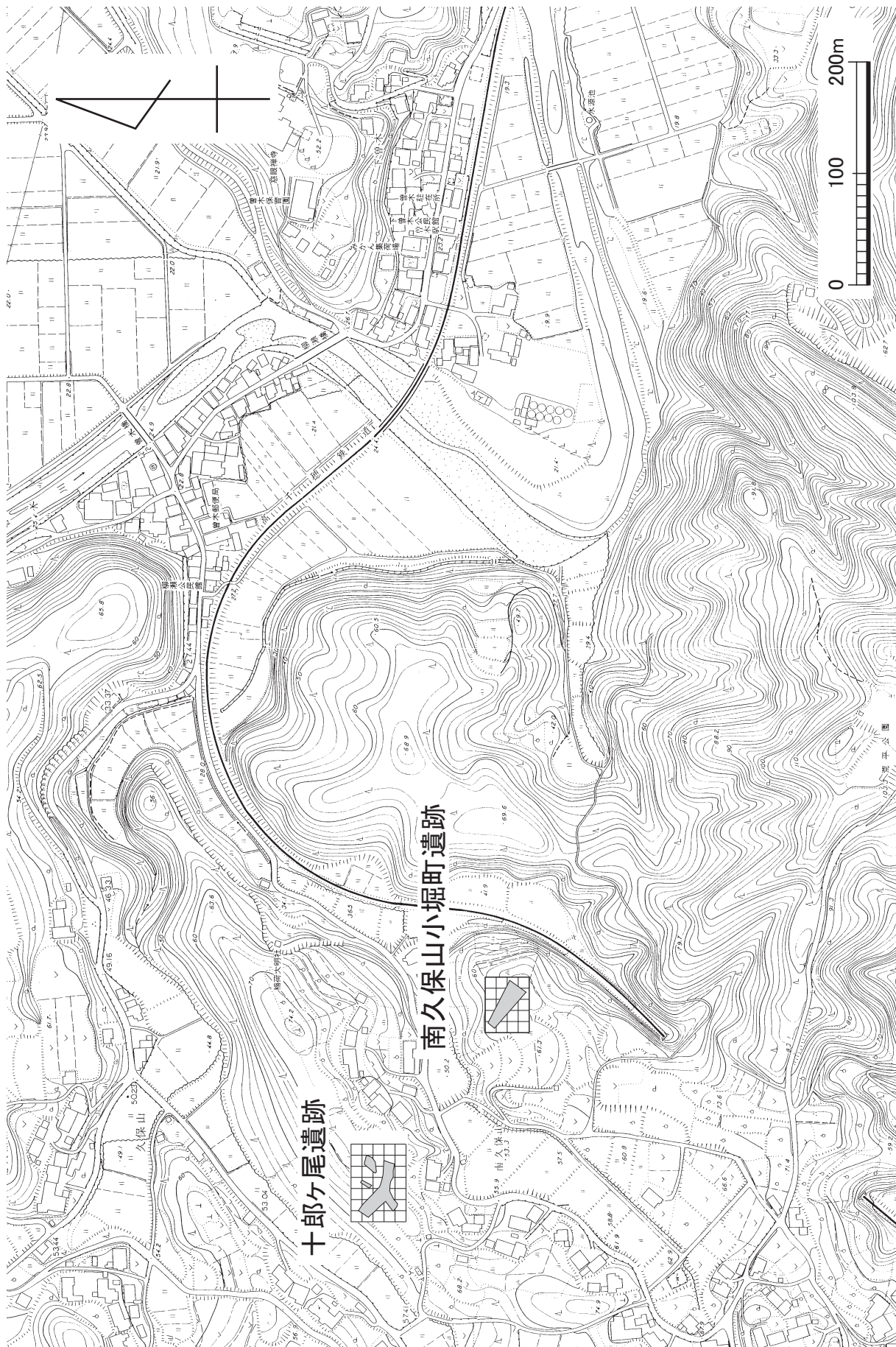
北方町教育委員会 1990「笠下遺跡」『北方町文化財報告書第1集』

北方町教育委員会 1992「南久保山小堀町遺跡」『北方町文化財報告書第5集』

北方町教育委員会 2004「町内遺跡詳細分布調査報告書」『北方町文化財報告書第23集』

北方町教育委員会 2006「北方町内遺跡6」『北方町文化財報告書第27集』

沢皇臣「東臼杵郡北方町出土の弥生土器」『宮崎考古』第1号 宮崎考古学会
 鈴木重治 1973「宮崎県岩土原遺跡の調査—土器伴出石器文化の一例—」『石器時代』第10号 石器時代文化研究会
 田中茂 1962『東臼杵郡 北方村の古墳』北方村教育委員会
 延岡市教育委員会 1978「野田八田遺跡」
 延岡市教育委員会 1987「延岡市の歴史的環境 赤木遺跡 多々良遺跡」『延岡市文化財調査報告書第3集』
 延岡市教育委員会 1991「上南方地区遺跡 中尾原遺跡 山口遺跡」『延岡市文化財調査報告書第6集』
 延岡市教育委員会 1992「差木野遺跡」『延岡市文化財調査報告書第9集』
 延岡市教育委員会 1992「上南方地区遺跡 中尾原遺跡 畑田遺跡」『延岡市文化財調査報告書第8集』
 延岡市教育委員会 1996「市内遺跡詳細分布調査報告書」『延岡市文化財調査報告書第16集』
 延岡市教育委員会 2001「吉野遺跡（第4次） 吉野遺跡（第6次） 延岡古墳群第16号墳 多々良第1遺跡 新宮遺跡 吉野遺跡（第7次）」『延岡市文化財調査報告書第24集』
 延岡市教育委員会 2002「延岡城内遺跡Ⅰ」『延岡市文化財調査報告書第26集』
 延岡市教育委員会 2007「市内遺跡 吉野遺跡（第8次）」『延岡市文化財調査報告書第34集』
 延岡市教育委員会 2008「市内遺跡 曾木原遺跡（3次・5次）」『延岡市文化財調査報告書第35集』
 延岡市教育委員会 2008「上崎地区遺跡」『延岡市文化財調査報告書第36集』
 延岡市教育委員会 2010「東原遺跡（第7次）北久保山遺跡（第2次）」『延岡市文化財調査報告書第41集』
 宮崎県 1989「宮崎県史 資料編 考古1」
 宮崎県教育委員会 「延岡市葎田窯遺跡」『宮崎県文化財調査報告書第9集』
 宮崎県教育委員会 1995「打扇遺跡 早日渡遺跡 矢野原遺跡 蔵田遺跡」『一般国道218号椎畑バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
 宮崎県教育委員会 1988「地藏ヶ森遺跡」『宮崎県文化財調査報告書第31集』
 宮崎県教育委員会 1990「林遺跡」『一般国道10号土々呂バイパス建設関係発掘調査報告書』
 宮崎県埋蔵文化財センター2005「山口遺跡2地点」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第99集』
 宮崎県埋蔵文化財センター2006「今井野第2遺跡 天下城山遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第135集』
 宮崎県埋蔵文化財センター2006「野門遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第136集』
 宮崎県埋蔵文化財センター2007「赤木遺跡第8地点（第二次調査）」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第145集』
 宮崎県埋蔵文化財センター2007「山田遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第146集』
 宮崎県埋蔵文化財センター2007「吉野第2遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第155集』
 宮崎県埋蔵文化財センター2007「赤木遺跡第8地点（第三次調査）」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第166集』
 宮崎県埋蔵文化財センター2008「林遺跡Ⅱ」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第174集』
 宮崎県埋蔵文化財センター2009「黒仁田遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第181集』
 宮崎県埋蔵文化財センター2009「赤木遺跡第8地点（第一次調査）」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第182集』
 横山邦継 1973「石庖丁出土地名表（宮崎県）」『速見考古』第4号 九州先史研究会
 九州近世陶磁学会 2000 「九州陶磁の編年 九州近世陶磁学会10周年記念」



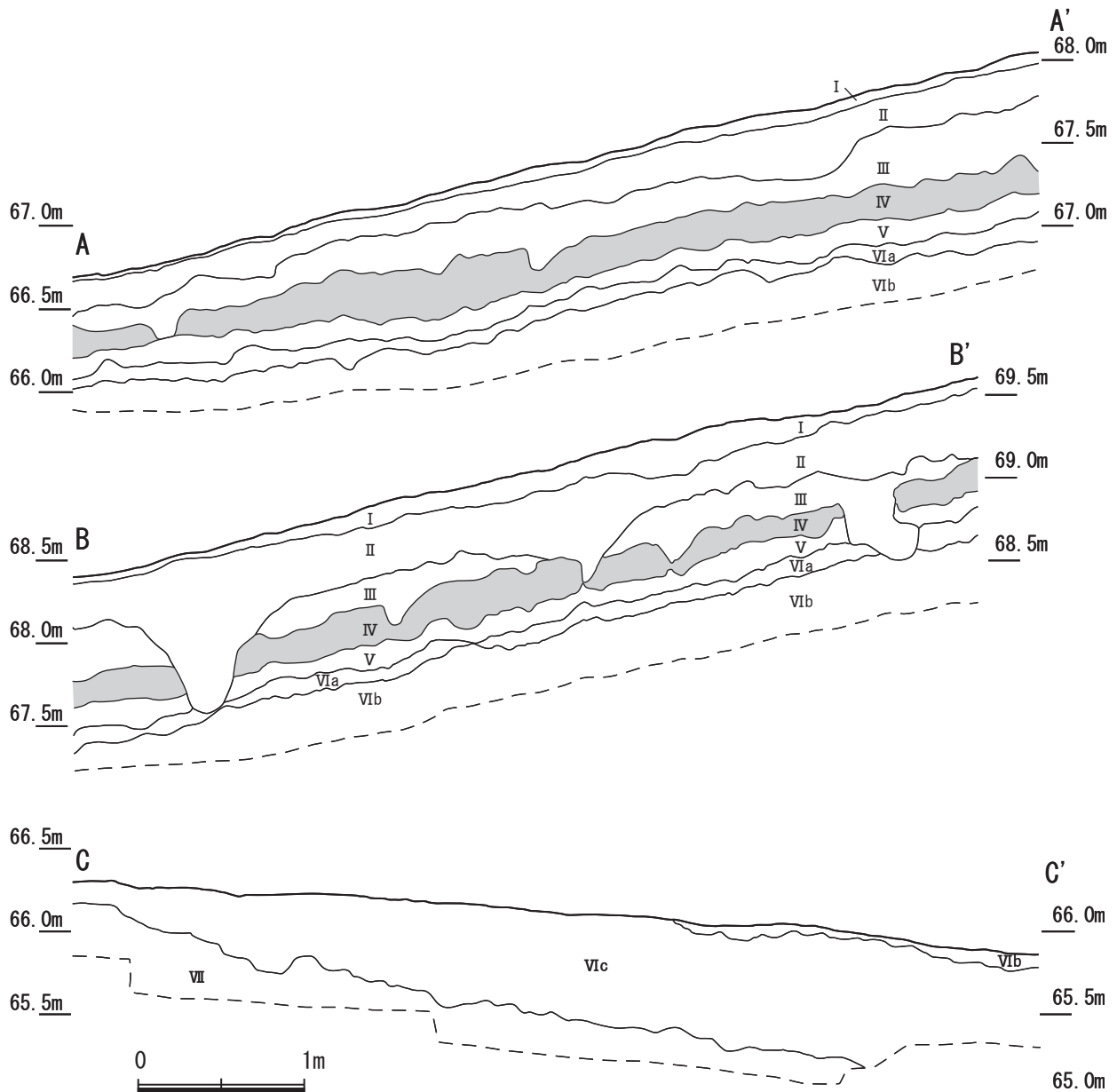
第4図 十郎ヶ尾遺跡周辺地形図 (S=1/5000)

第Ⅲ章 調査の概要

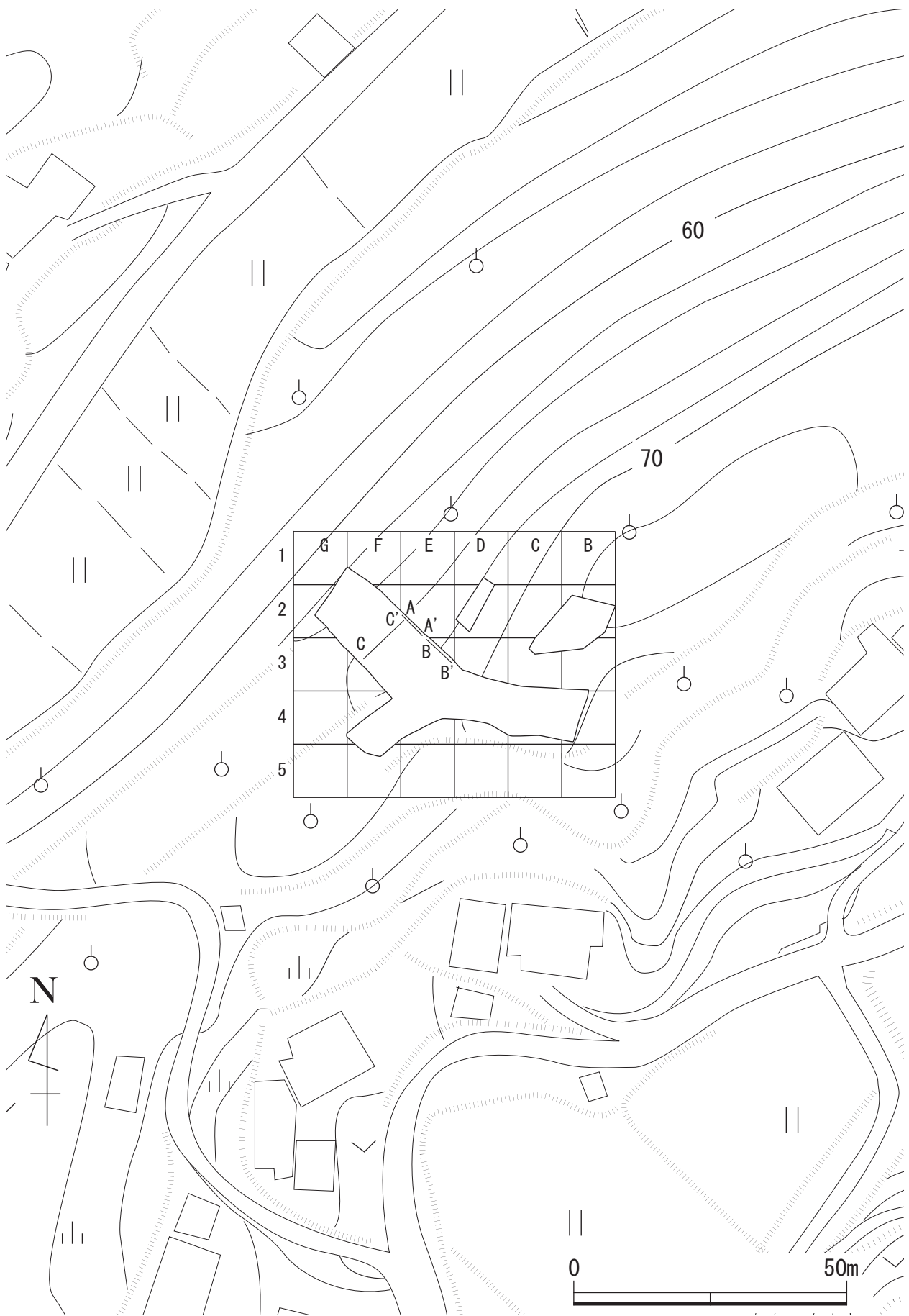
第1節 基本層序

本遺跡の堆積土壌は阿蘇火砕流堆積物を基盤にロームや植生に由来する土壌が堆積していると考えられる。傾斜地を圃場整備や土取りのために削平しており、堆積の状況は良くない。以下、層毎に堆積状況について記述する。(第5図)

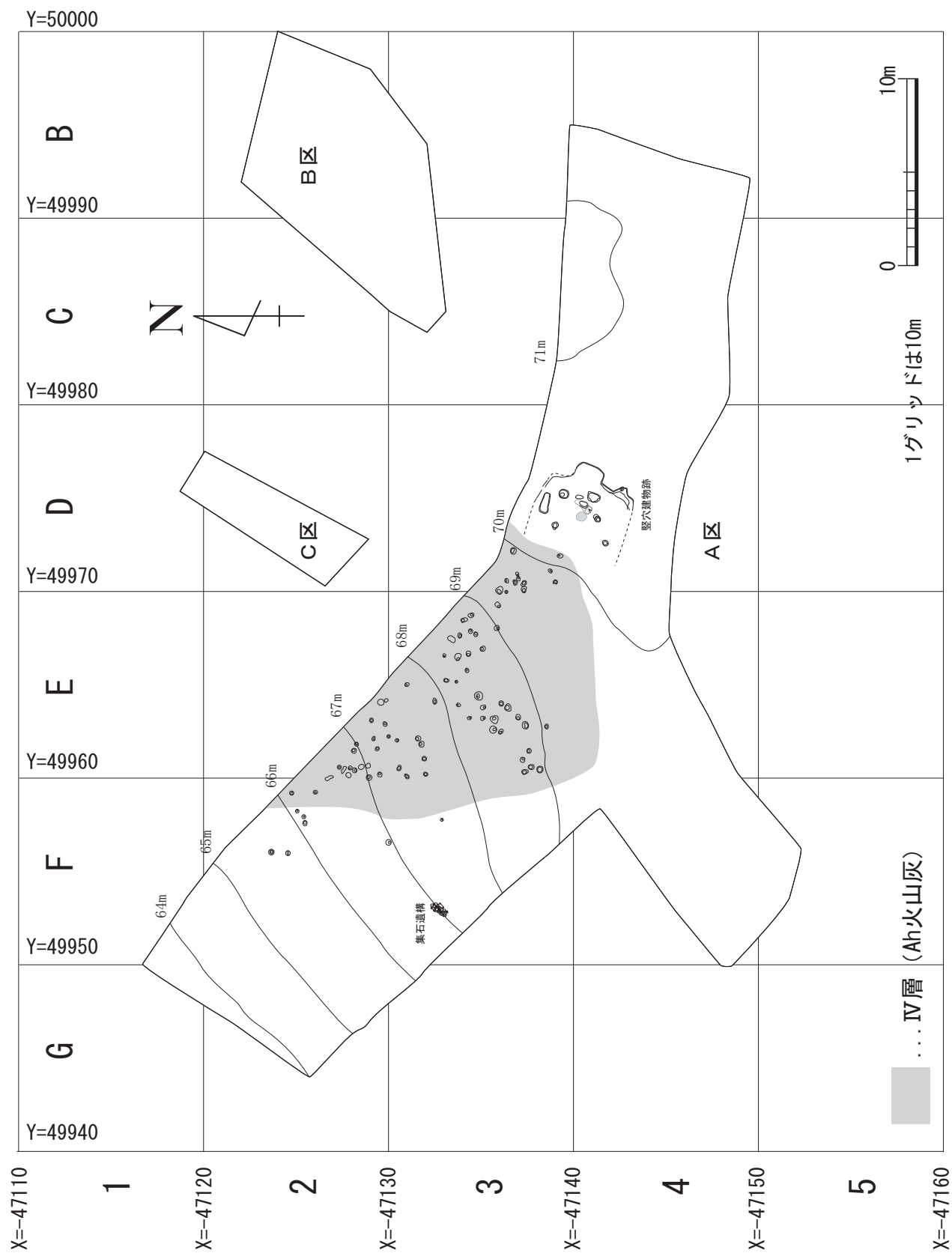
- 第Ⅰ層 表土もしくは耕作土
- 第Ⅱ層 にぶい黄褐色土 (Hue10YR4/3) …耕作土、遺物・赤化礫の出土多い。
- 第Ⅲ層 黒色土 (Hue7.5YR2/1) …しまりなし。遺物・赤化礫の出土多い。
- 第Ⅳ層 黄褐色土 (Hue10YR5/6) …アカホヤ火山灰の二次堆積層。しまりなし、ブロック状にⅢ層が混入する。分布は限定的で、A区北側斜面の一部及びC区に堆積する。
- 第Ⅴ層 黒褐色土 (Hue7.5YR2/2) …粘性有り、やや固くしまる。3mm以下の礫を1%含む。遺物・赤化礫の出土多い。
- 第Ⅵa層 暗褐色土 (Hue7.5YR3/4) …粘性強く、固くしまる。5mm以下の礫を1%含む。
- 第Ⅵb層 褐色土 (Hue7.5YR4/4) …粘性大。非常に固くしまる。
- 第Ⅵc層 黒褐色土 (Hue7.5YR3/2) …粘性小。しまりあり。微砂を含む。
- 第Ⅶ層 にぶい黄褐色土 (Hue10YR4/3) …粘性小。しまりあり。1cm以下の灰色粒を1%以下含む。黄褐色、灰色の土をブロック状に1%以下含む。



第5図 土層断面図 (S=1/20)



第6図 グリッド配置図 (S=1/1000)



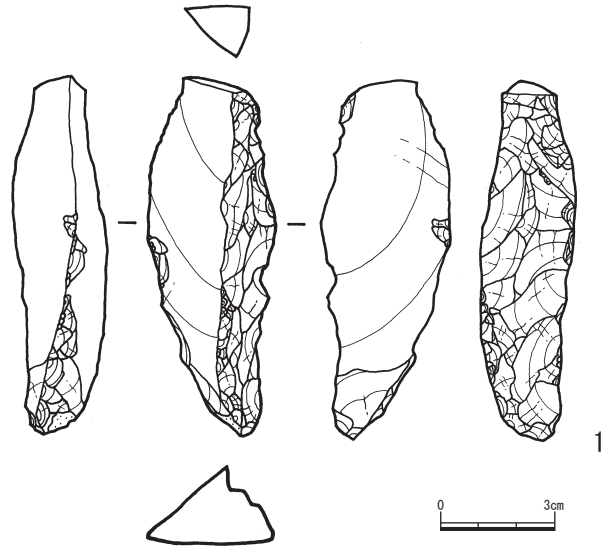
第7図 遺構分布図(S=1/300)

第2節 旧石器時代の調査（第8～9図）

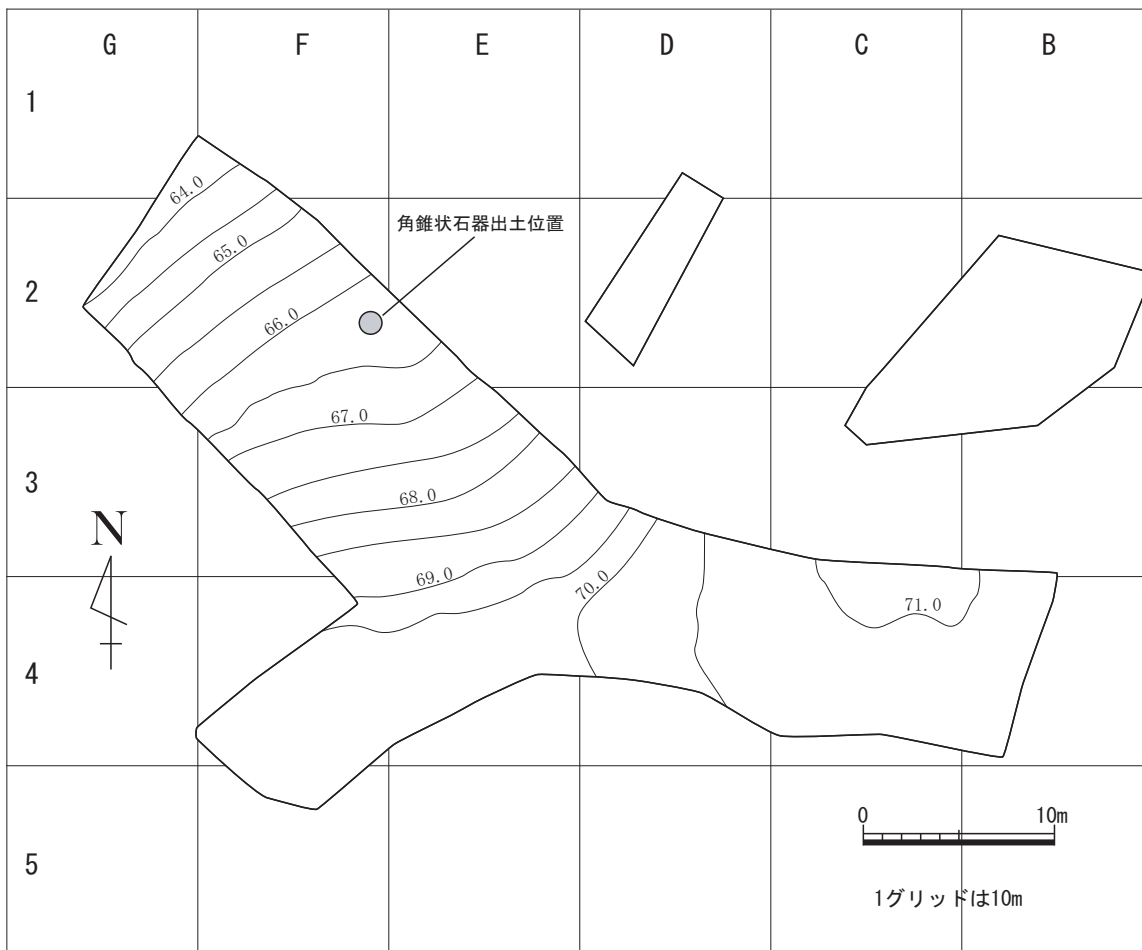
1は角錐状石器である（第8図）。出土位置はF2グリッド、出土層位はⅦ層である。石材は流紋岩で、最大長9.45cm、最大幅3.4cm、最大厚2.05cm、重さ57.58gである。厚みのある断面三角形の剥片を用いて両側縁を加工している。打面は除去されている。先端・基部を尖らせようと意図している。加工は荒く、石核から剥がした剥離面をそのまま残している。

出土地点を中心に掘削範囲を拡大してみたが他に旧石器時代の遺物や礫を検出することはできなかった。出土地点はアカホヤ火山灰が堆積した谷の縁にあたり、流れ込みの可能性がある。

Ⅶ層ではF3グリッドで集石遺構を検出しており、検出面が旧石器時代の文化層ではない可能性もある。縄文時代以降に人為的に削平されたか、浸食作用により削り取られたか、いずれにせよ旧石器時代の文化層が一部を残して失われていると考えられる。



第8図 旧石器時代石器実測図(S=1/2)



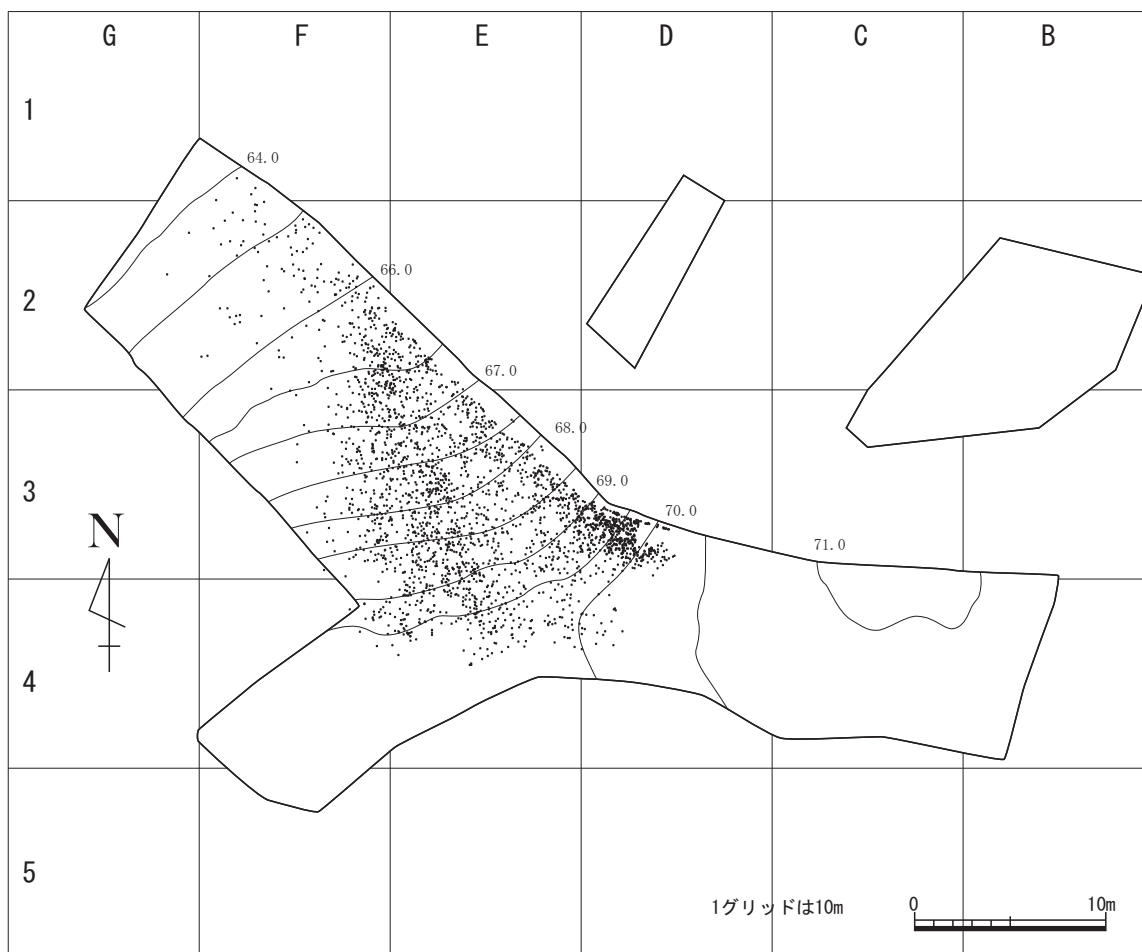
第9図 旧石器時代石器出土位置図(S=1/400)

第3節 縄文時代の調査（第10～17図、第3～4表）

1 遺構

（1）散礫（第10図）

尾根の頂上部から北側の斜面にかけて被熱し赤化した砂岩や風化した熔結凝灰岩がまとまって検出された。特にD3グリッド南西部に密に検出され、付近に集石遺構の存在が期待されたが、今回の調査では縄文時代の集石遺構は確認できなかった。平成22年度に宮崎県が調査した南久保山小堀町遺跡では北面の斜面に縄文時代の集石遺構を6基検出しており、集石遺構の付近には赤化した礫や風化した阿蘇熔結凝灰岩が検出されている。五ヶ瀬川流域の遺跡で検出された集石遺構に阿蘇熔結凝灰岩が配石として用いられている例がみられるが、本遺跡の調査中にも集石遺構の配石を思わせる熔結凝灰岩を検出している。しかし上部の礫を伴わないなど集石遺構と認定するには十分な根拠を得られないものであった。これらの礫が谷地形への流れ込みである可能性が高いことと同様、熔結凝灰岩も流れ込んだものと考えられる。礫の検出された場所を地図上にプロットすると、アカホヤ火山灰の二次堆積層である谷地形に一致する。これらの礫は縄文時代に人為的に持ち込まれ、石器の材料や集石遺構の部材として用いられたもので、F3グリッドの集石遺構に伴うものではないと考えられる。



第10図 縄文時代礫出土位置図（S=1/400）

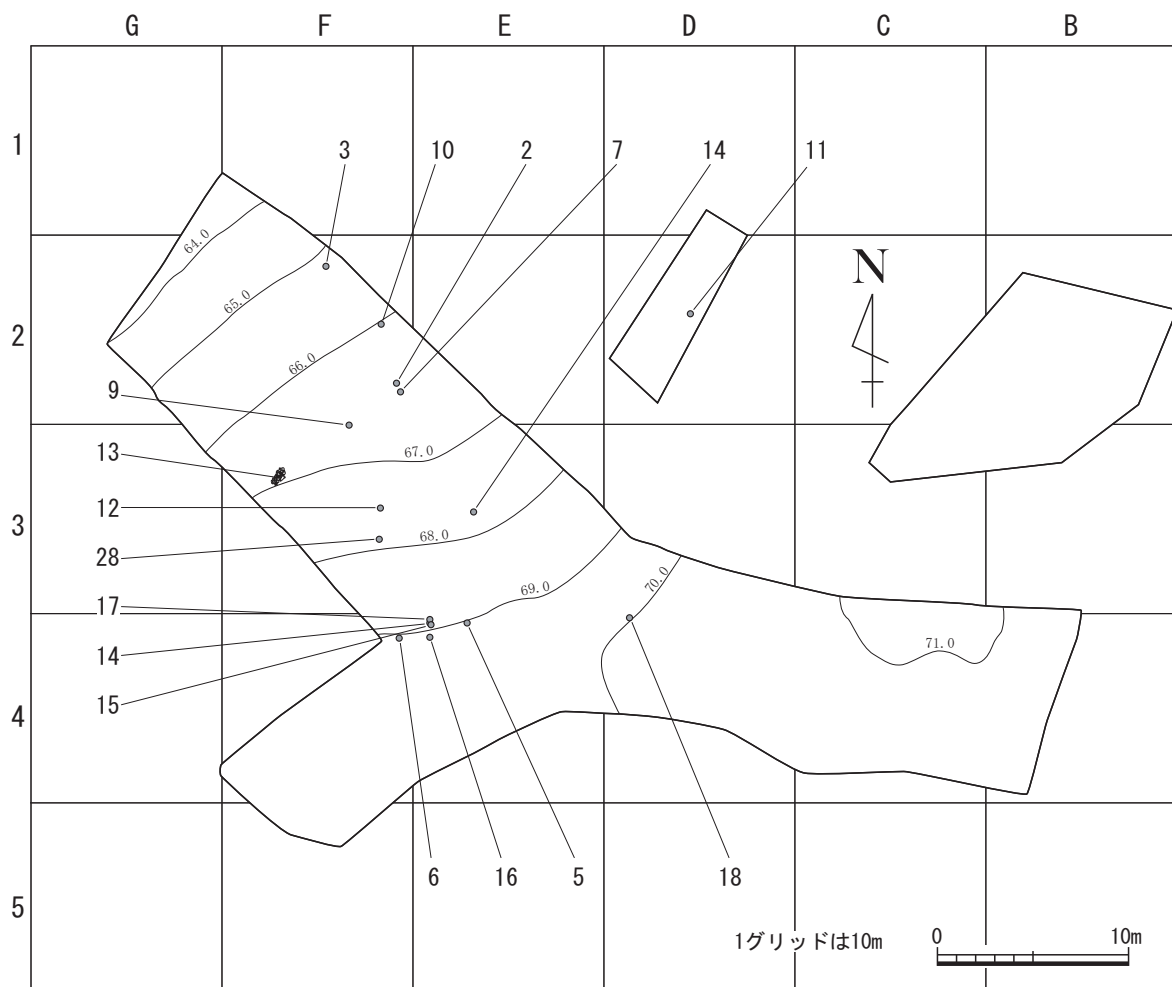
2 縄文時代の遺物

(1) 土器 (第11～12図、第3表)

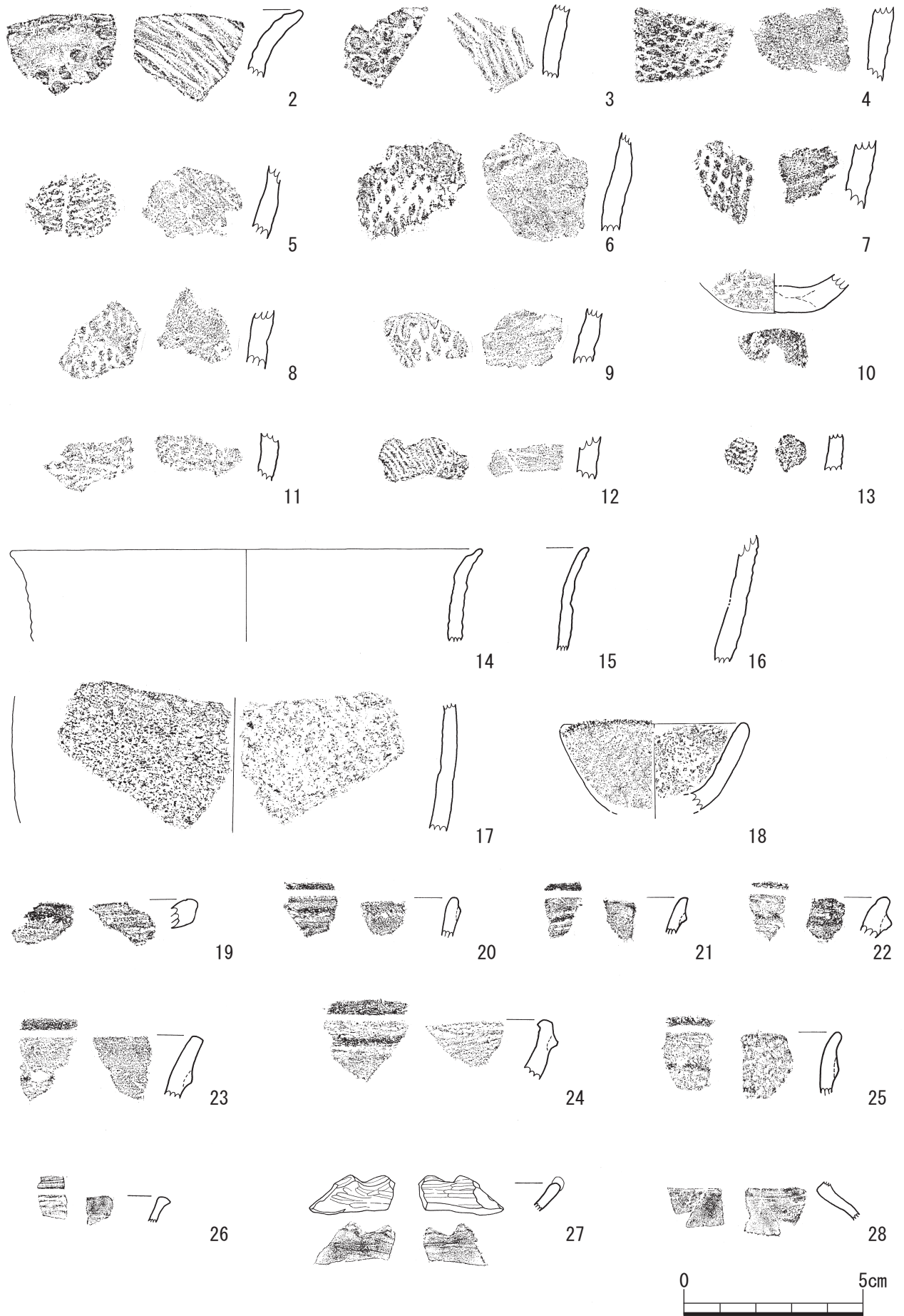
A区及びC区ではV層からVI層にかけて、縄文時代草創期から縄文時代早期に位置づけられる土器が出土した。II層からIII層にかけては縄文時代後～晩期の土器が出土した。ただその数は少なく、いずれも小片であるため、ここでは一括して縄文時代の遺物として報告する。II・III層からは弥生時代以降の遺物も出土しているが、それらについては第4節以降で報告する。

第11図に示したように、縄文土器の分布はFグリッド東半以东、4グリッド北半以北に限られる。これは第7図に示したAh火山灰層の堆積範囲(谷地形)と一致する。ただし、この谷地形の周辺部は削平を受けており、実際の分布範囲はもう少し拡大するものと考えられる。C区からも1点出土しているが、谷地形の範囲内である。今回の調査ではV・VI層からは遺構が検出されておらず、遺物については流れ込みの可能性がある。28のようにV層とII層で出土した小片が接合した例もあり、堆積の不安定なことを考慮すると原位置情報を保つと言いきれない。以下個別に特徴を述べる。

2～18は縄文時代早期の土器である。いずれも小片で風化が著しい。2～10は楕円押型文土器である。施文の方向は一定でなく2～5は横方向、6～9は縦方向である。2、3は同一個体の可能性がある。2は口縁部、3は口縁部に近い胴部である。2はゆるやかに外反する。ともに内面は斜め方向に沈線を施す。4～9は胴部、10は底部である。11～13は撚糸文土器である。



第11図 縄文土器出土位置図 (S=1/400)



第 1 2 図 縄文土器実測図 (S=2/3)

報告書 掲載番号	器種	部位 (形状)	出土遺構 ・層位	口縁残存率 (底部残存率)	大きさ (cm)			色調 (外面/内面)	調整		胎土	備考
					口径	器高	底径		外面	内面		
2	深鉢	口縁	Vla	1/11	-	-	-	明褐(7.5YR5/6)、明赤褐(5YR5/6)／ 明褐(7.5YR5/6)	楕円押型 文	斜め方向 の原体条 痕	1mm以下の黒色光沢、透明光沢粒を多く含む。1mm以下の灰白 の粒子を多く含む。微細な暗赤褐色の粒子を少し含む。	
3	深鉢	口縁付近	V下	1/10	-	-	-	明褐(7.5YR5/6)、明赤褐(5YR5/6)／ 明褐(7.5YR5/6)、明赤褐(5YR5/6)	楕円押型 文	斜め方向 の原体条 痕	微細な黒色光沢粒、灰白の粒子を多く含む、1mm程度の黒色光 沢粒をわずかに含む、2mm程度の灰白色、褐色の粒子を各1個 含む。	
4	深鉢	胴部	V	1/12	-	-	-	橙(5YR6/6)／橙(7.5YR6/6)	楕円押型 文	ナデ	1mm以下の針状黒色光沢粒を多く含む、1mm以下の灰白色の粒 子を多く含む、微細な透明光沢粒を少し含む、2mm程度、4mm程 度の灰白色の粒子を各1個含む。	
5	深鉢	胴部	V下	1/11	-	-	-	橙(7.5YR6/6)／にぶい黄褐(10YR5/4)	-	ナデ	1mm以下の透明、灰白、褐色の粒を含む。	
6	深鉢	胴部	V下	1/10	-	-	-	赤褐(5YR4/6)／赤褐(5YR4/6)	楕円押型 文	ナデ	2mm以下の灰白の粒子を少し含む、微細な透明光沢粒を少し含 む、1mm以下の黒褐色の粒子を少し含む。	
7	深鉢	胴部	V	1/10	-	-	-	橙(5YR6/6)／にぶい黄(7.5YR6/4)	楕円押型 文	ナデ	1mm以下の褐灰色、灰白色の粒子を多く含む、1mm以下の赤褐 色、黒色の粒子を少し含む、3mm大の赤褐色の粒子を1個含む。	
8	深鉢	胴部	V下	-	-	-	-	橙(7.5YR5/5)／橙(7.5YR5/5)	楕円押型 文	ナデ	1mm以下の黒や透明の光沢の粒を含む。3mm以下の石英を含 む。	
9	深鉢	胴部	V下	1/15	-	-	-	明赤褐(5YR4/6)／ 明赤褐(5YR4/6)、にぶい黄褐(10YR5/4)	楕円押型 文	ナデ	1mm以下の針状黒色光沢粒を多く含む、微細な透明光沢粒、灰 白の粒子を多く含む、1mm程度の灰白の粒子をわずかに含む、 2mm大の針状黒色光沢粒、褐灰の粒子各1個を含む。	
10	深鉢	底部	V下	1/4	-	-	5.2	浅黄(2.5YR6/4)／にぶい黄(2.5YR6/3)	ナデ、楕円 押型文	ナデ	2mm以下の黒、白灰、透明の光沢のある粒を含む。1mm以下の 乳灰白の粒を含む。4mmの黒色を粒を含む。	
11	深鉢	胴部	Vla	1/14	-	-	-	にぶい褐(7.5YR5/4)／ にぶい黄褐(10YR5/4)	撚糸文	-	0.5mm以下の黒や透明の光沢のある粒と1～3mmの浅黄橙、灰 白、褐灰の粒を含む。	
12	深鉢	胴部	Vla	1/20	-	-	-	にぶい黄褐(10YR5/4)／ にぶい黄橙(10YR6/4)	撚糸文	ナデ	0.5mm以下の黒や透明の光沢のある粒と2mm以下の灰白、褐の 粒を含む。	
13	深鉢	胴部	集石遺構	-	-	-	-	にぶい橙(5YR6/4)／にぶい黄(5YR6/4)	撚糸文	ナデ	0.5mm以下の黒や透明の光沢のある粒と黄淡、褐灰の粒を含 む。	
14	深鉢	口縁	Vla	1/8	25.9	-	-	にぶい褐(7.5YR5/4)／ にぶい褐(7.5YR5/4)	-	-	微細な透明光沢粒、灰白色の粒子を多く含む。1mm以下の灰 白、褐色、褐灰色の粒子を少し含む。3mmの灰白の粒子を少し含 む。8mm大、5mm大の灰白、褐色の粒子各1ヶ含む。	
15	深鉢	口縁	Vla	1/14	-	-	-	にぶい褐(7.5YR5/4)／ にぶい褐(7.5YR5/3)	-	-	1mm以下の灰白の粒子を多く含む。微細な透明光沢粒、黒色光 沢粒を少し含む。1mm以下の赤褐色の粒子をわずかに含む。 2mm大の針状黒色光沢粒を1つ含む。	
16	深鉢	胴部	V下	1/13	-	-	-	にぶい褐(7.5YR5/4)／ にぶい褐(7.5YR5/4)	楕円押型 文	-	1.5mm以下の黒の光沢のある粒と浅黄橙、灰白、淡黄、灰褐の 粒を含む。	
17	深鉢	胴部	Vla	1/8	-	-	-	褐(7.5YR4/4)／褐(7.5YR4/3)	-	-	2mm以下の黒の光沢のある粒と微細～4mmの淡黄橙、浅黄、灰 白、灰褐の粒を含む。	
18	小型土器	口縁～底部	V	1/6	10.0	-	-	橙(7.5YR6/6)／にぶい黄褐(10YR5/4)	-	-	1mm以下の黒の光沢のある粒と微細～3mmの灰白、淡黄橙、灰 褐の粒を含む。	
19	-	口縁	II	-	-	-	-	にぶい黄褐(10YR5/4)／橙(5YR6/6)	ナデ	ナデ	1mm以下の赤褐色、乳白色、透明の光沢のある粒を少し含む。	
20	深鉢	口縁	-	-	-	-	-	にぶい黄褐(10YR5/4)／ にぶい黄褐(10YR5/4)	ナデ	ナデ	1mm以下の黒、透明の光沢のある粒を多く含む。	貼付突帯
21	深鉢	口縁	II	-	-	-	-	にぶい黄褐(10YR5/4)／ にぶい黄褐(10YR5/4)	ナデ	ナデ	2mm以下の黒の光沢のある粒を少し含む、1mm以下の透明の光 沢の粒を少し含む、1mm以下の乳白色の粒を少し含む。	貼付突帯
22	深鉢	口縁	II	-	-	-	-	にぶい黄褐(10YR5/4)／ にぶい黄褐(10YR5/4)	ナデ	ナデ	1mm以下の黒、透明の光沢のある粒を多く含む、1mm以下の乳 白色、浅黄橙の粒を少し含む。	貼付突帯
23	深鉢	口縁	II、III	-	-	-	-	にぶい黄橙(10YR6/3)／ にぶい黄褐(10YR5/4)	ナデ	ナデ	1mm以下の黒と透明の光沢のある粒と灰白、浅黄の粒を含む。	貼付突帯
24	深鉢	口縁～胴部	II	1/16	-	-	-	にぶい黄(7.5YR6/4)／ にぶい黄(7.5YR6/4)	ナデ	ナデ	2mm以下の黒の光沢のある粒と灰白、褐灰、浅黄の粒を含む。	貼付突帯
25	深鉢	口縁	II	1/7	-	-	-	にぶい黄橙(10YR6/4)／ にぶい黄橙(10YR6/4)	ナデ	-	1mm以下の黒、透明の光沢のある粒を多く含む。1mm以下の乳 白色の粒を少し含む。	貼付突帯
26	浅鉢	口縁	II	-	-	-	-	暗褐(10YR3/3)／黒褐(10YR3/2)	ミガキ	ナデ	微細な灰白色の粒子を多く含む	
27	浅鉢	口縁	II	1/17	-	-	-	黒褐(5YR3/1)／黒褐(5YR3/1)	ミガキ	ミガキ	微細な灰白の粒子、黒色光沢粒をわずかに含む	
28	浅鉢	頸部	II・V	-	-	-	-	黒褐(10YR3/2)／黒褐(10YR3/2)	ナデ・ミ ガキ	ミガキ	微細な灰白色の粒子を少し含む、微細な透明光沢粒をわずかに 含む	

第3表 縄文土器観察表

13 は集石遺構から出土している。14～18 は無文の土器片である。14、15 は口縁部である。双方ともに器厚が薄く粗雑な印象である。どちらも直行したあと緩やかに外反する。16、17 は胴部である。16 は風化と損傷のために器面調整の観察が難しく判読が困難なため無文とした。18 は小型の無文土器である。口縁は直行し口縁端部は丸く仕上げられている。器厚が厚い。

19～28 は縄文時代後期から晩期の土器である。28 を除き全て口縁部である。19 は他の土器に比して器厚が厚い。西平式の可能性もあるが小片のため断定できない。外器面はミガキ、口縁端部と内器面は横ナデで口縁端部は平らに仕上げられている。20～25 は貼付突帯を持つ口縁部である。20 は直行し口縁端部は丸く仕上げられている。21 はわずかに外反し口縁端部は丸いが外側に明瞭な稜を持つ。器面は内外ともにミガキ調整である。突帯は貼り付けてつまみ出したように細いながらも稜が明確である。22 は器厚が厚めで、ゆるやかに外反する。口縁端部は丸く仕上げられている。突帯は太めで口縁からL字型に突き出し、胴部へのカーブは緩やかである。胎土は粗い。23 は緩やかに外反するが口縁端部は平らに仕上げられている。突帯は20～22、24 が口縁端部直下にあるのに対し、23 はやや下の方にある。突帯の厚みは薄い。24 は緩やかに内湾し口縁端部に向かって器厚が薄くなる。突帯は太目で稜は鈍い。口縁端部は丸く仕上げられている。25 は緩やかに外反し、器厚は薄めで口縁端部に向かいやや薄くなる。口縁端部は丸く仕上げられている。突帯は薄く幅広である。外器面は横方向のナデ調整が施されている。

26～28 は晩期の精製の土器である。いずれも内器面、外器面ともに丁寧に磨かれ黒褐色で光沢を放つ。26 は口縁部である。ほぼ直行し、口縁端部がやや外反する。口唇部は明瞭な稜を持ち、口縁端部は丸みを持たせつつ平坦に仕上げられている。27 は浅鉢の口縁部である。波状を呈する突起を持つ。28 は頸部である。胴部から口縁部にかけてはL字状に屈曲し、内面に明確な稜を持つ。

(2) 石器 (第13～17図、第4表)

V・VI層において出土した石器についてはチャート製の剥片が多いことが特徴としてあげられる。器種は石鏃と、石鏃製作の際に生じたと考えられる剥片、石核が主である。他には極少量の黒曜石、砂岩製の石錘等もみられる。出土地点はIV層のアカホヤ火山灰の堆積した範囲と重なる谷地形の部分を中心に丘陵の頂上部縁辺にも分布している。

石鏃 (第14図-29～43)

29～43 はいずれも打製石鏃であり、磨製および局部磨製石鏃は確認されない。大半がチャートを用い、黒曜石をほとんど用いない。V・VI層において検出し、全て薄手で42を除き凹基式である。他にII・III層から出土した石鏃もあるが(第28図-194～195)、これらも同様の特色を持ち、縄文時代のものと考えられる。29～33は縄文時代早期の鋏形鏃である。34～43は形状から時代を特定できないが出土層位から縄文時代早期のものと考えられる。43は黒曜石製の鋏形鏃の脚部と推定される。

石核 (第14図-44～48)

44は砂岩製、45は流紋岩製、46、47はチャート製、48は頁岩製である。チャート製のものは石鏃製作の際に生じたものであろう。

石錘 (第14図-49)

砂岩製の石錘である。A区中央部、丘陵頂上部の北側斜面の縁で検出された。挟りの部分は劣化し薄く剥離するように欠損している。

礫 (第14図-50)

綠色岩製で、上下が欠損しているが扁平な四角柱状の形態が考えられる。磨跡はなく砥石ではない。VI層F2グリッドで検出している。

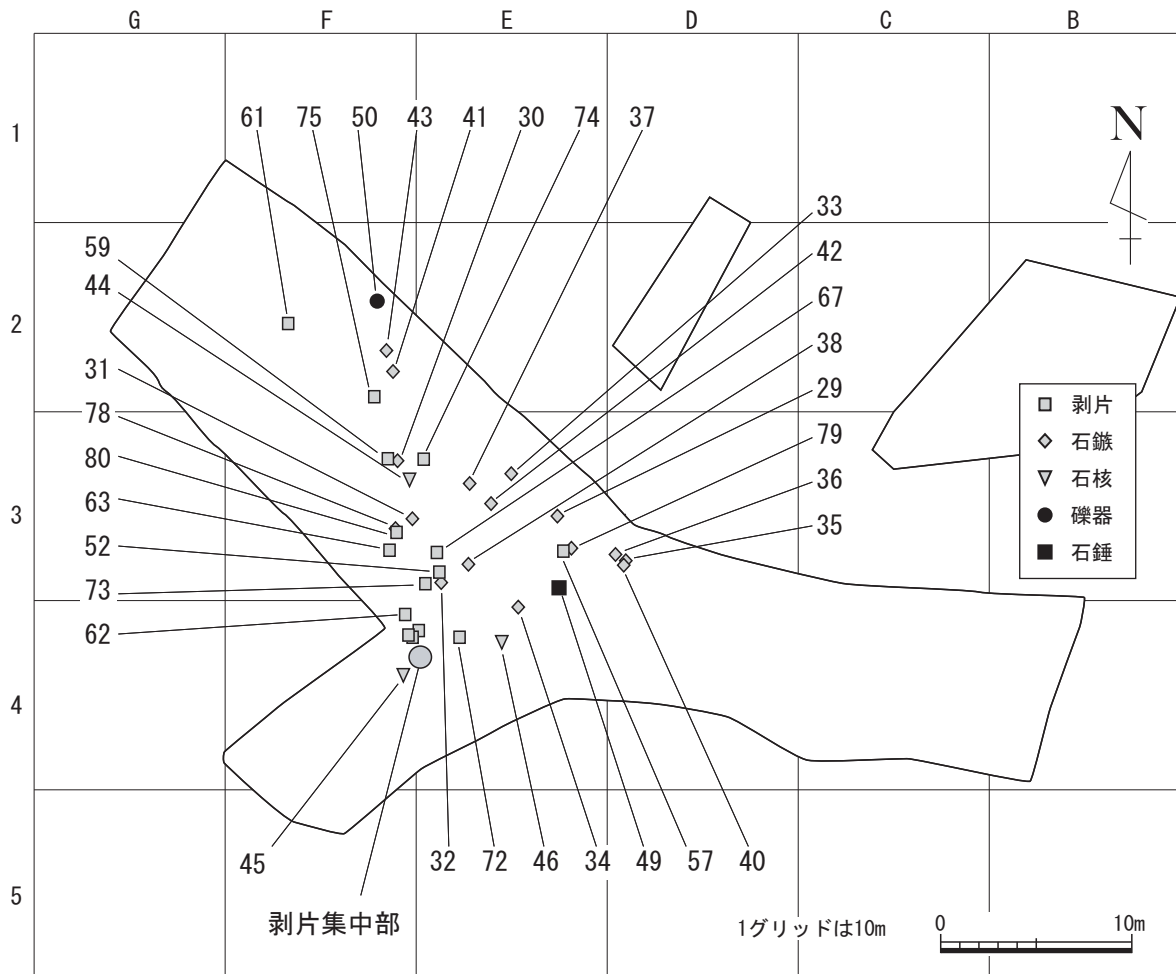
剥片 (第15図-51~80)

大きめのもの、加工痕、使用痕のあるものを抜き出して図化した。また、外部との交易あるいは当時の人々の移動について考察するのに役立つと考えて、黒曜石の剥片は図化できるものは図化し、それ以外は写真にて報告することとした。

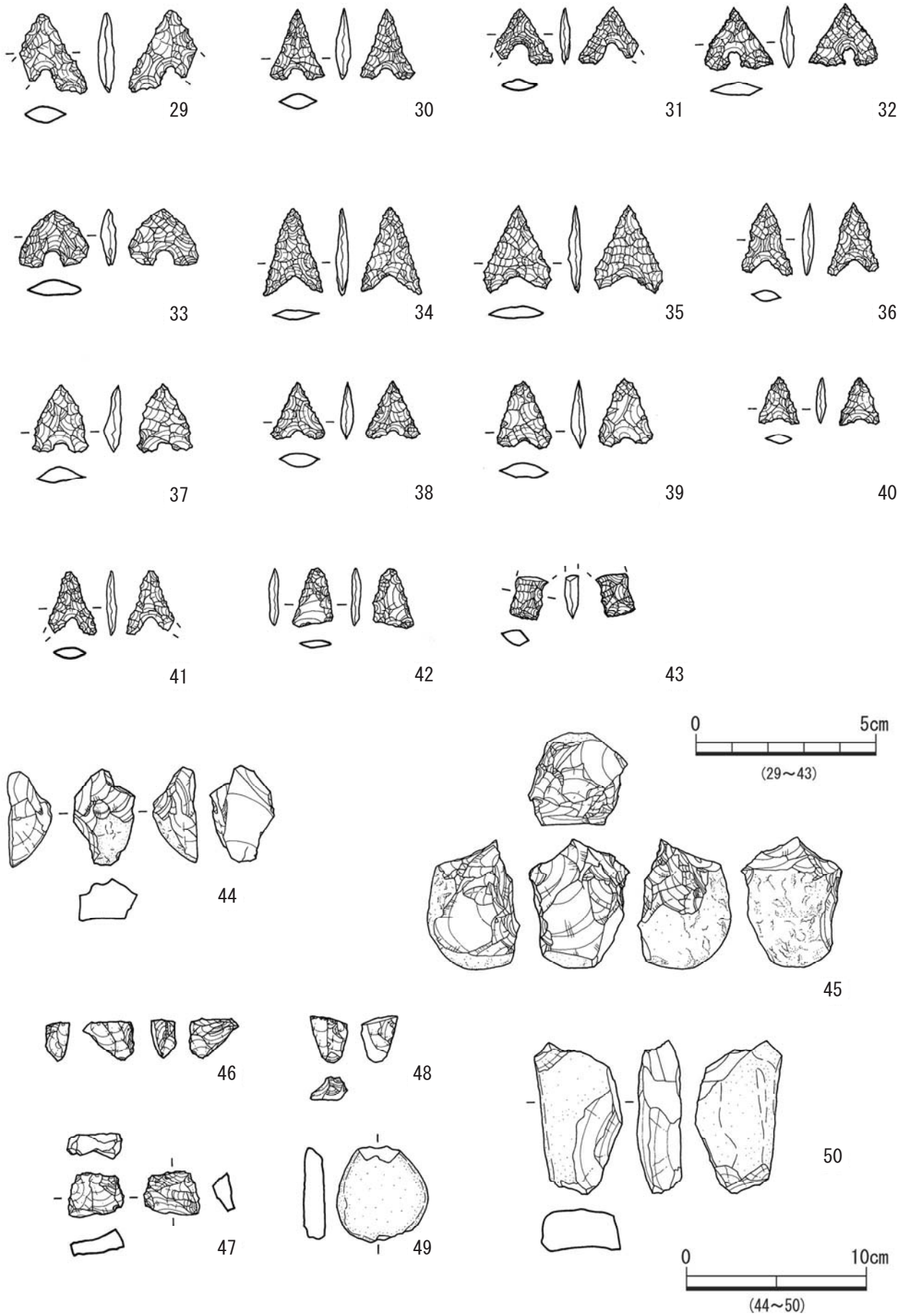
51~77はチャート製の剥片である。いずれも小型で定型的器種に認定できない。使用痕を有するもの、二次加工を有するものを一括している。石鏃の製作途上品ないし失敗品、またスクレーパーとして使用した可能性も指摘できる。全体的に貝殻状の横長の剥片を剥離する剥片剥離技術がみられる。石鏃製作の際に生じたものであろう。72、73のみ縦長の剥片を剥離している。特にE4グリッド杭の南側に集中して出土しており(第13図剥片集中部)、接合しているものがある(第16・17図)。

78~80は剥片としたが石鏃の未製品もしくは失敗品の可能性もある。78はチャート製、79、80は黒曜石製である。チャート製以外の剥片は極少数で、他には竪穴建物跡からホルンフェルスの剥片が1点出土している(第21図-112)。

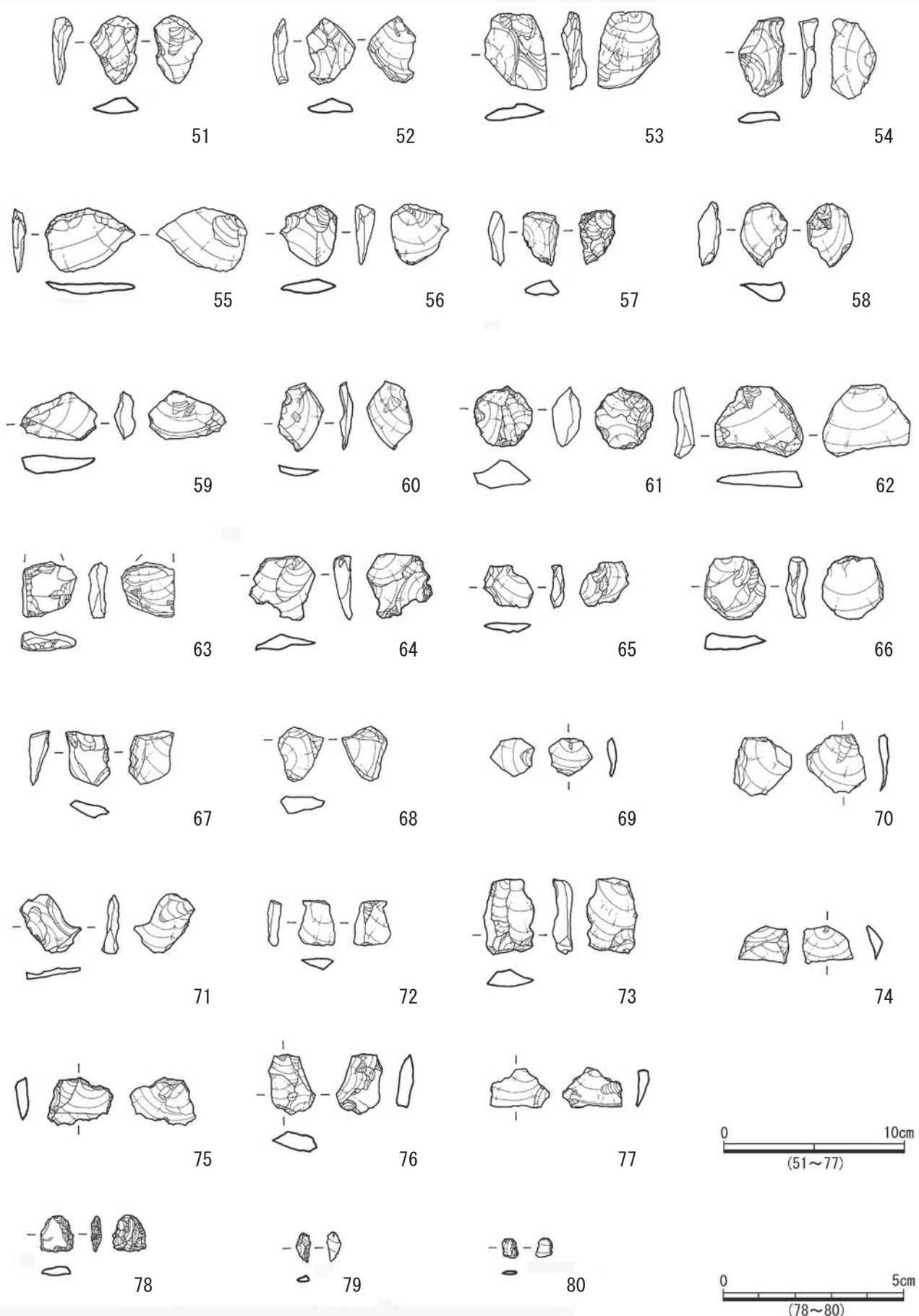
分布については、剥片はE~Fグリッドにまたがり、集中部から北へ直線的に、谷地形の左縁辺部に添ってみられるのに対し、石鏃は谷地形全体に分布し横方向への広がりがみられるという特徴がある。



第13図 縄文時代石器出土位置図 (S=1/400)



第 1 4 図 縄文時代石器実測図 1 (S=2/3、1/3)

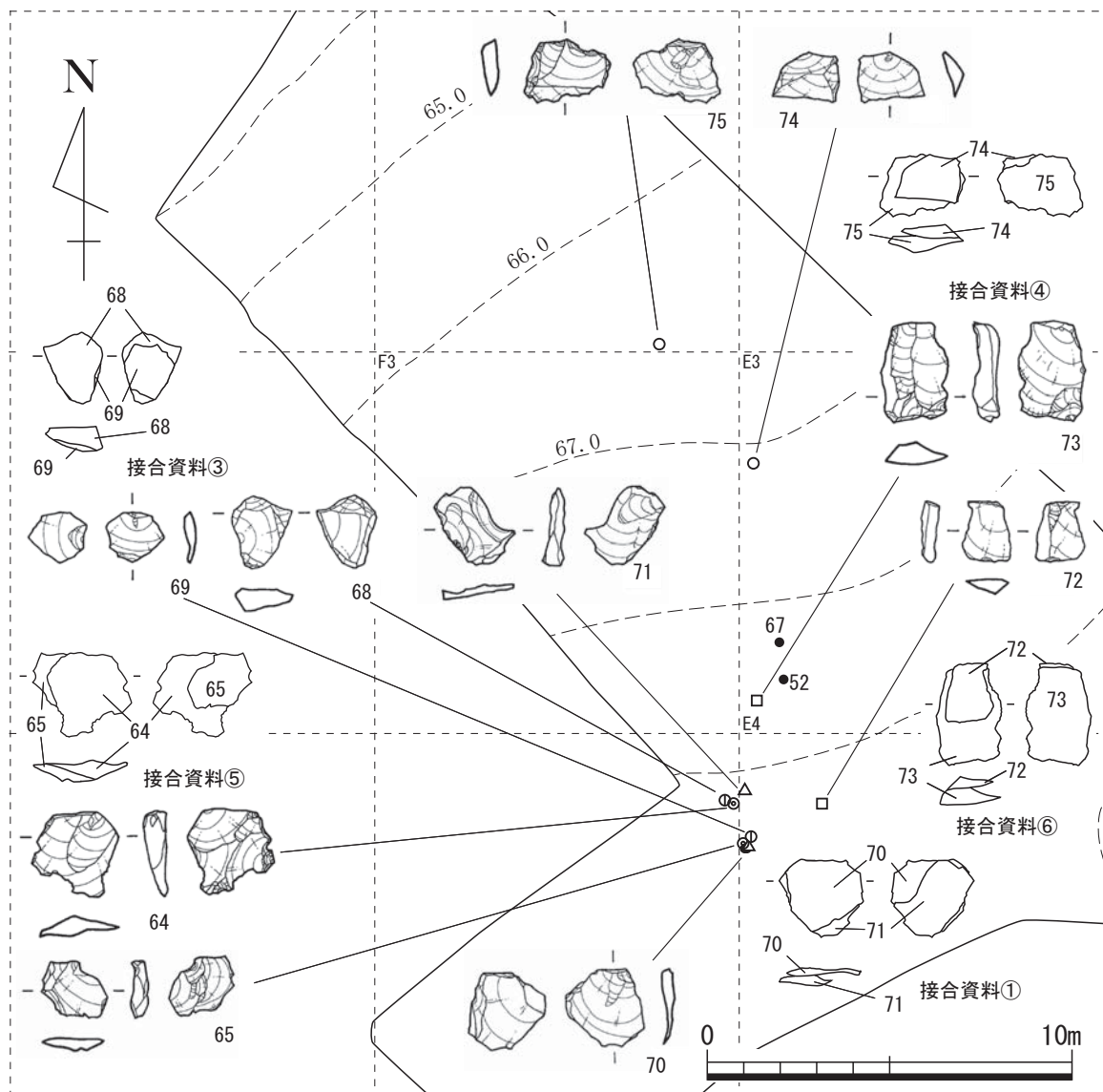


第 15 図 縄文時代石器実測図 2 (S=1/3、2/3)

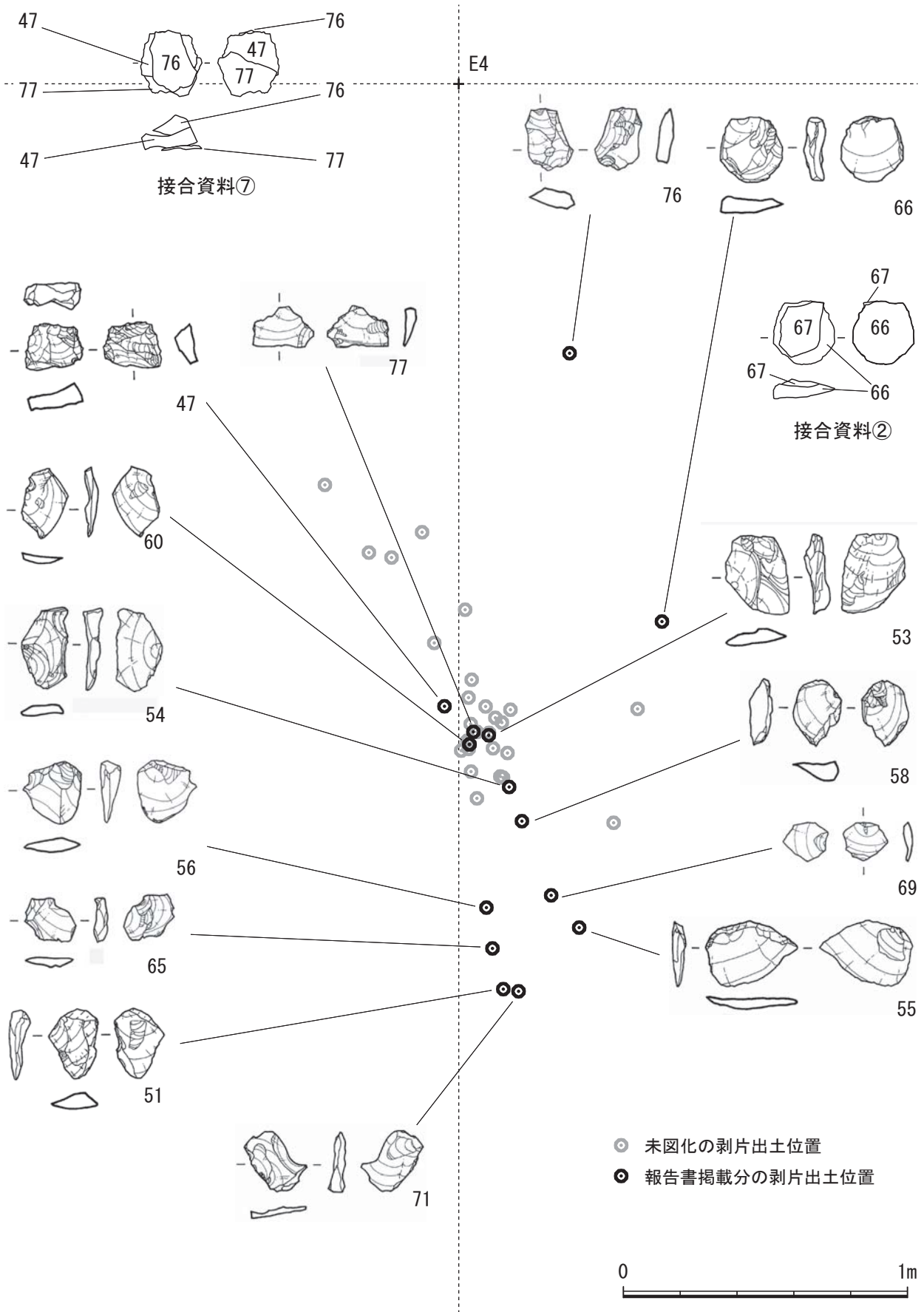
<接合資料>

本遺跡ではチャート製の石鏃が十数点出土しており、今回の調査で出土した小型のチャート製の剥片はいずれもこれら石鏃製作に伴うものと考えられる。接合作業を試みた結果、接合資料は12例確認され、そのうち7例の図化を行った。石材は全てチャート製で、2～3点が接合する状況である。大きさは長さが2～4cm、厚みが0.5～1.5mm程である。

資料①～⑥は2点、資料⑦は3点が接合した。①～⑤、⑦は全体的に貝殻状の、長幅比が1：1に近い不定形の剥片を剥離しようとする剥片剥離技術が伺える。資料⑥のみ縦長剥片を指向する剥片剥離技術が伺え、少なくとも4回の縦方向の剥離が行われている。接合資料はE4杭の周辺に集中して分布する。他にチャート製のチップが30点出土しており、E4杭付近で石鏃が製作されたと推定できる。周囲に掘削範囲を広げてみたが出土範囲は広がらなかった。資料④のみA区北側斜面の谷地形から出土しており、谷を埋める土砂とともに移動したものと考えられる。3点が接合した資料⑦は、節理が多く質の良くないチャートの原石から剥片を剥離している。



第16図 縄文時代 接合資料出土位置図 (S=1/200)



第17図 剥片集中部拡大図 (S=1/20) ※遺物の縮尺は1/3

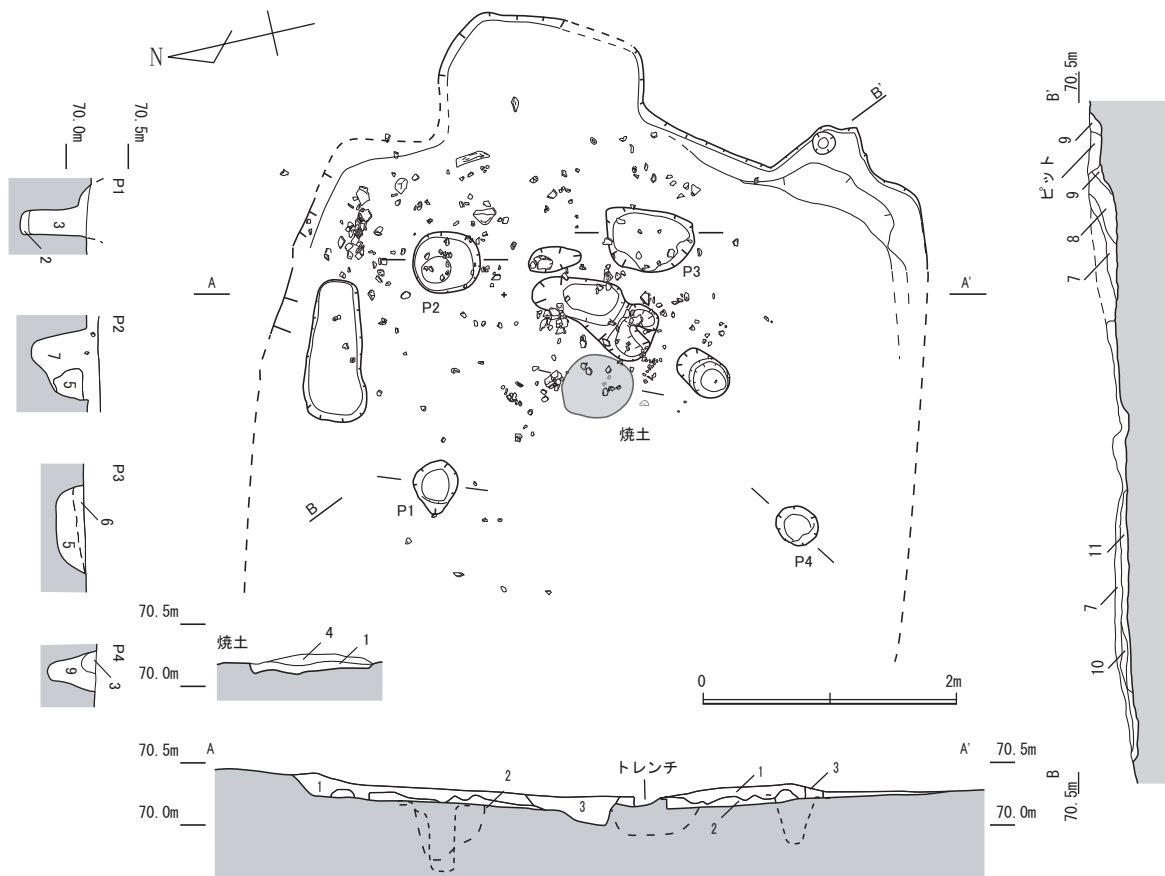
報告書 掲載番号	器種	注記	石材	X	Y	Z	グリッド	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
29	石鏃	V下-808	チャート	-47135.546	49967.41	68.624	E 3	2.25	1.9	0.45	1.18	早期
30	石鏃	V-633	チャート	-47132.615	49959.04	67.186	F 3	2.0	1.55	0.4	0.69	早期
31	石鏃	VIa-939	チャート	-47135.691	49959.816	67.909	F 3	1.5	1.6	0.3	0.46	早期
32	石鏃	V-616	チャート	-47139.066	49961.318	68.798	E 3	1.7	1.85	0.35	0.68	早期
33	石鏃	V-622	チャート	-47133.312	49964.987	67.723	E 3	1.55	1.95	0.4	0.9	早期
34	石鏃	VIa-878	チャート	-47140.363	49965.347	69.206	E 4	2.4	1.65	0.3	0.7	
35	石鏃	V-428	チャート	-47137.896	49970.986	69.687	D 3	2.4	1.85	0.35	1.0	
36	石鏃	V-429	チャート	-47137.58	49970.443	69.521	D 3	2.0	1.4	0.3	0.51	
37	石鏃	V-430	チャート	-47133.826	49962.801	67.784	E 3	1.9	1.55	0.45	0.92	
38	石鏃	V-617	チャート	-47138.092	49962.742	68.583	E 3	1.6	1.5	0.35	0.56	
39	石鏃	E4b V	チャート	-	-	-	E 4	1.9	1.45	0.4	0.75	
40	石鏃	V-608	チャート	-47138.131	49970.883	69.505	D 3	1.3	1.1	0.25	0.27	
41	石鏃	V-476	チャート	-47127.896	49958.797	66.566	F 2	1.75	1.3	0.3	0.44	
42	石鏃	V-471	チャート	-47134.892	49963.927	68.175	E 3	1.6	1.1	0.25	0.41	
43	石鏃	VIa-952	黒曜石	-47126.791	49958.454	66.126	F 2	1.2	1.05	0.4	0.47	
44	石核	VIa-951	砂岩	-47133.727	49959.664	67.512	F 3	5.3	3.5	2.4	39.2	
45	石核	VIa-876	流紋岩	-47144.062	49959.334	69.616	F 4	7.2	5.6	5.2	234.7	
46	石核	V下-798	チャート	-47142.321	49964.494	69.66	E 4	3.15	2.8	1.3	6.65	
47	石核	EF4-7	チャート	-	-	-	F 3	2.4	3.05	1.45	9.32	接合7
48	石核	Tr3E I	頁岩	-	-	-	-	2.55	2.0	1.0	6.17	
49	石錘	VIa-879	砂岩	-47139.393	49967.549	69.292	E 3	5.4	5.1	1.25	45.8	
50	礫	VIa-921	緑色岩	-47124.27	49958.025	65.608	F 2	8.45	4.7	2.3	134.7	
51	剥片	866	チャート	-47143.187	49960.158	69.534	E 4	3.7	2.6	1.1	7.6	
52	剥片	VIa-947	チャート	-47138.505	49961.226	68.723	E 3	3.6	2.6	0.8	5.22	
53	剥片	EF4-24	チャート	-	-	-	E 4	3.35	4.2	1.35	11.71	
54	剥片	EF4-16	チャート	-	-	-	E 4	4.4	2.4	1.0	6.53	
55	剥片	872	チャート	-47142.971	49960.426	69.542	E 4	3.45	4.95	0.7	8.59	
56	二次加工剥片	861	チャート	-47142.9	49960.099	69.45	E 4	3.3	3.1	1.1	8.22	
57	剥片	V-507	チャート	-47137.409	49967.724	69.123	E 3	2.95	1.95	0.85	4.41	
58	剥片	EF4-17	チャート	-	-	-	E 4	3.5	2.5	1.2	8.58	
59	剥片	V下-702	チャート	-47132.524	49958.549	67.31	F 3	2.6	4.0	1.1	9.91	
60	剥片	EF4-30	チャート	-	-	-	E 4	3.7	2.45	0.7	4.41	
61	剥片	V下-733	チャート	-47125.379	49953.333	65.518	F 2	3.3	3.15	1.5	13.99	
62	剥片	845	チャート	-47140.745	49959.457	69.11	F 4	3.9	4.75	1.1	18.48	
63	二次加工剥片	V下-792	チャート	-47137.364	49958.629	68.52	F 3	3.0	2.9	1.0	9.29	
64	剥片	850	チャート	-47141.949	49959.844	69.32	F 4	3.5	3.55	0.8	6.25	接合5
65	剥片	864	チャート	-47143.046	49960.119	69.511	E 4	2.3	2.7	0.5	2.95	接合5
66	剥片	EF4-4	チャート	-	-	-	E 4	3.4	3.3	0.9	11.43	接合2
67	剥片	VIa下-1000	チャート	-47137.478	49961.106	68.402	E 3	3.0	2.4	0.95	4.21	接合2
68	剥片	849	チャート	-47141.847	49959.619	69.427	F 4	3.0	2.45	0.9	6.54	接合3
69	剥片	873	チャート	-47142.859	49960.327	69.471	E 4	2.3	2.1	0.35	2.02	接合3
70	剥片	852	チャート	-47141.604	49960.165	69.328	E 4	3.05	3.3	0.5	4.35	接合1
71	剥片	867	チャート	-47143.194	49960.212	69.567	E 4	3.2	3.3	0.6	4.73	接合1
72	剥片	V-667	チャート	-47141.96	49962.283	69.504	E 4	2.45	2.05	0.6	3.37	接合6
73	剥片	VIa下-1002	チャート	-47139.117	49960.496	68.71	E 3	4.1	2.75	9.5	11.99	接合6
74	剥片	V-536	チャート	-47132.551	49960.417	67.349	E 3	1.95	2.75	0.9	2.89	接合4
75	剥片	VIa-991	チャート	-47129.239	49957.821	66.533	F 2	2.6	3.55	0.7	5.32	接合4
76	剥片	EF4-19	チャート	-	-	-	E 4	3.3	2.55	1.1	8.36	接合7
77	剥片	EF4-10	チャート	-	-	-	E 4	2.4	3.2	0.5	3.65	接合7
78	剥片	VIa下998	チャート	-47136.195	49958.919	67.949	F 3	1.95	1.75	0.5	2.06	
79	剥片	V下-812	黒曜石	-47137.244	49968.129	69.055	E 3	1.6	0.75	0.3	0.25	
80	剥片	V下-689	黒曜石	-47136.415	49958.991	68.298	F 3	1.0	0.85	0.1	0.1	

第4表 縄文時代石器計測表

第4節 弥生時代・古墳時代の調査（第18～21図、第5～6表）

D3グリッド北側の土層を観察するとA区北側斜面から次第に薄くなりながらもアカホヤ火山灰層の堆積が上の方へと続いていることがわかる。そして丘陵の頂上部ではIV層までの層は削平され、縄文時代早期の層の上を造成土が覆う。造成土を除去したところ弥生時代のものと推定される石庖丁（第28図-190）が検出されたため弥生時代の遺構の存在が予想された。

丘陵の頂上部でIV層上面よりV層にかけて掘り込んだと思われる竪穴建物跡を検出している。弥生時代後期から古墳時代にかけてのものと推定される。住居跡はわずかに床面を残して上部は削平され、造成土がその上を覆っていた。掲載している遺物は遺構堆積土の下位～床面のものである。竪穴建物跡の検出は1軒のみであるため、記号や番号は用いず「竪穴建物跡」と報告する。その他、A区北側斜面においてはアカホヤ火山灰二次堆積層（IV層）上面にピット状の穴を多数検出したが、掘立柱建物跡に結びつくものはなかった。また、F2グリッドで土師器の甕の小片をともなう集石遺構を1基検出しているが、基本層序でいうVII層からの検出であり、時代を特定することが困難であるためここでは扱わず、第5節でその他の遺構として報告する。



1. 褐色土 (Hue10YR4/4) ... 硬くしまる。粘性小ささら。明褐色土 (Hue7.5YR5/6) をブロック状に含む。
2. 黄褐色土 (Hue10YR5/6) ... 硬く閉まる。粘性小、灰白色の礫φ3mmを少量含む。
3. 黒褐色土 (Hue7.5YR3/2) ... わずかにしまる。さらさら。黒色土 (Hue7.5YR1.7/1) に明褐色土 (Hue7.5YR5/6) を10%含む。
4. 灰黄褐色土 (Hue10YR4/2) ... 硬くしまっているが粘りはなくさらさらである。炭化物1～2mm程度が混じる。橙色の粒3～10mm大もわずかにみられる。
5. 褐色土 (Hue10YR4/6) ... 粘性小、しまりあり。灰白色土をブロック状に含む。
6. 暗褐色土 (Hue10YR3/3) ... 粘性小、しまりあり。
7. 暗褐色土 (Hue10YR3/4) ... ブロック状に褐色土が入る。硬くしまっている。粘性はそれほど強くない。
8. 暗褐色土 (Hue7.5YR3/4) ... 硬くしまっている。粘性は7よりやや粘りがある。シルト質。
9. 褐色土 (Hue7.5YR4/4) ... 7、8同様硬くしまっている。粘りは8より強い。シルト質。
10. 黒褐色土 (Hue10YR2/3) ... 7よりしまりは弱くもろい。粘りも弱い。樹根の可能性もあり。
11. 暗褐色土 (Hue7.5YR3/4) ... VI層のものと考えられる。硬くしまり、粘りもある。シルト質。
12. 明褐色土 (Hue7.5YR5/8) ... 粘性小、しまり小。微砂。

第18図 竪穴建物跡実測図 (S=1/60)

1 遺構

(1) 竪穴建物跡 (第18図)

A区、丘陵の頂上部のD3-D4区において検出した。検出面はV層からVI層にかけてである。現在は削平されて堆積を確認できないが、IV層上面から掘り込んだものであろう。建物跡の西辺はA区北側斜面の縁にあたり、西半部は一部床面を除き検出することができなかったが、長軸は東西方向で5.00m(推定)、短軸は南北方向で4.80m(推定)、推定床面積は24.00㎡規模の、東側に張出を持つ方形プランと推測できる。上位層は耕地開削と耕作によって削平を受けたものと推察され、検出面からの深さは平均15cmと浅く、最深で60cmである。張り床は施されておらず、掘り底をそのまま利用したと考えられる。主柱と考えられる柱穴は4箇所(深さ0.35m~0.60m)検出された。柱穴の深さは最も深いもので床面から60cmを計測する。距離は東側の南北1.80m、西側の南北2.80m、北側の東西1.80m、南側の東西2.70mの不等辺四角形の配置である。床面状に数基のピットや土坑が検出されているが、住居に伴うものか判然としない。建物跡の中央部、東側の主柱穴の中間部付近に14cm×14cm×4cmの台石が据置されており、その下部には80cm×40cmの楕円形状の浅い窪みが検出された。窪みのすぐ西隣、建物跡のほぼ中央部には焼土部を検出した。焼土本体は60cm×60cmのほぼ円形に広がる。遺物は、小岩礫とともに土器の細片が床面の残存率の高い住居内東半部から検出されている。特に焼土部の東~北東に多く検出された。建物遺構は調査区内検出遺構の全時代を通じてこの竪穴建物跡が唯一の検出例であり、北側斜面及びC区からも検出がないことから、建物跡群は地形的にみてさらに北東へ延びる舌状丘陵の先端部に位置するものと推測している。

2 遺物

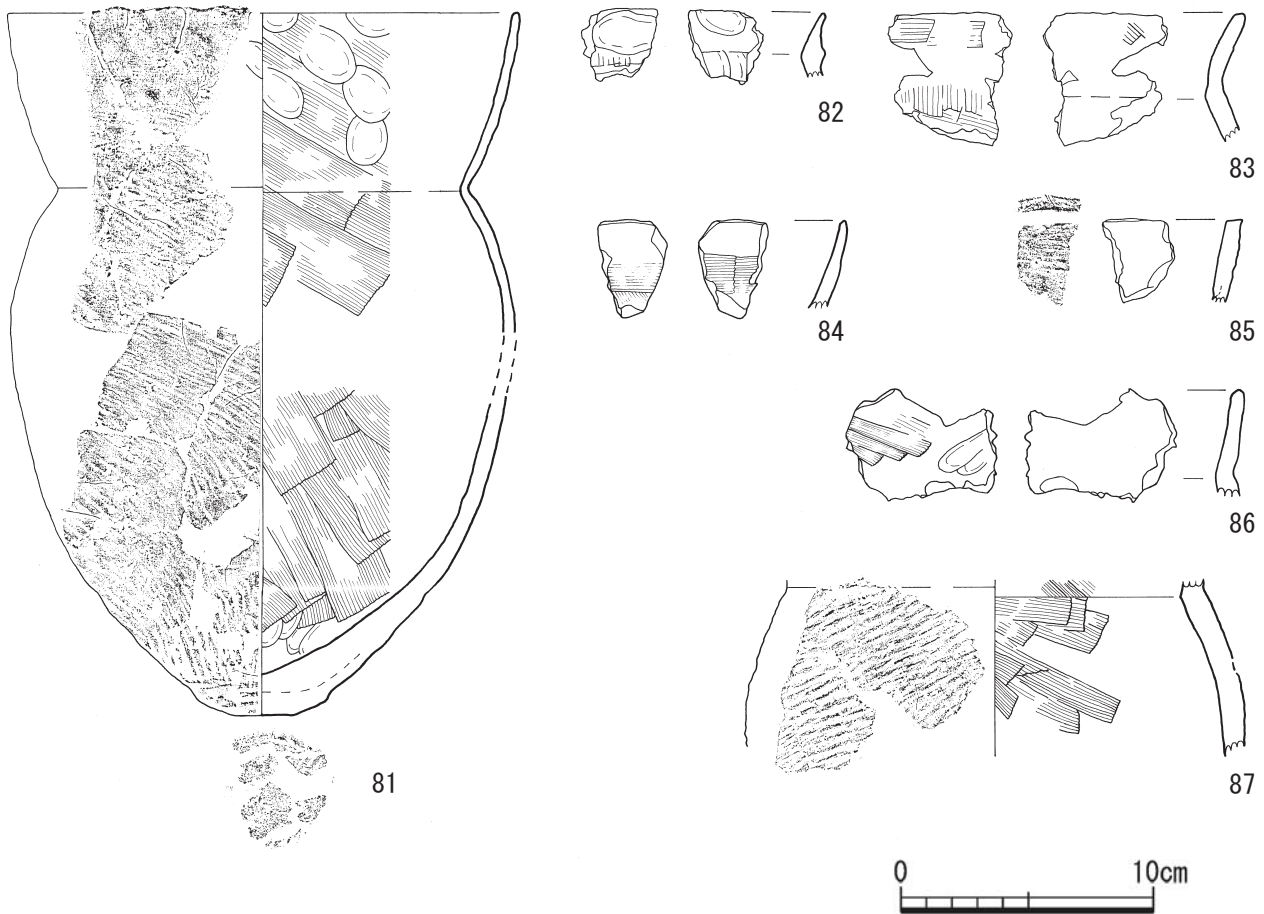
竪穴建物跡から出土した遺物には土器と石器がある。土器の器種には、甕、鉢、小型土器があり、石器では砥石、台石及び石錘がある。削平によって上層が破壊されていたため細片が多かったが接合作業によって復元できたもの、および図面上で復元可能であったもの、口縁部、底部その他特徴的部位について19~21図に記載する。なお、法量その他のデータを表5、6に記載する。

(1) 土器 (第19~20図、第5表)

81~100は甕である。81は大型の甕である。形状は胴長で口縁部が長い。「く」の字状の口縁であるが、直線的に開いている。口縁は薄くところどころ欠けている。底部は厚みのある平底である。外器面にタタキ調整を行った後にナデ調整を施しており、口縁部から頸部にかけてはタタキ目が不明瞭だが、胴部から底部に欠けては明瞭である。内器面はハケ目調整の後ナデ調整を施している。外器面の一部に煤の付着が認められる。頸部の稜は曖昧でタタキ目の跡が残る。胎土に4~5mmの礫粒を含み、粗雑な印象を与える。竪穴建物跡出土の土器で完形近くまで復元できた唯一のものであった。

その他小片については、82~86は甕の口縁部及び口縁部~頸部、87~90は頸部~胴部、91~94は胴部、95~100は胴部~底部および底部である。

82~86は調整は内外ともに横方向のナデが施されている。胎土は5mm程度の礫粒が混入するなど粗雑な印象である。器厚では頸部から口縁端部にかけて器厚が薄くなるもの(82、84)、一定のもの(83、85、86)に分類できる。形態では外反するもの(82、83)、直行するもの(85、86)、内湾するもの(84)、頸部の稜が明瞭なもの(82、83)、あいまいなもの(84~86)、口唇部の仕上げが丸いもの(82、84、86)、



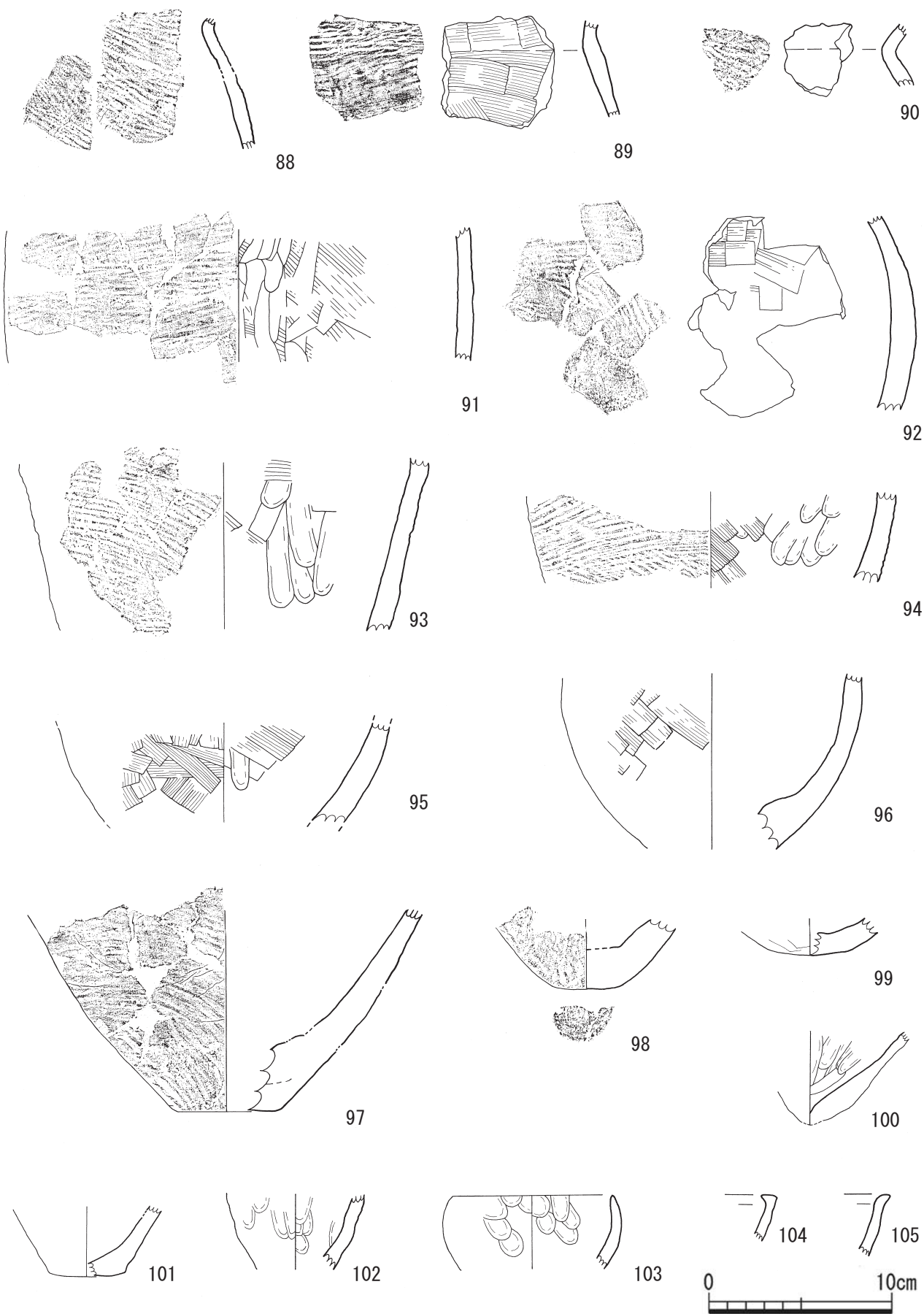
第 19 図 竪穴建物跡出土土器実測図 1 (S=1/3)

平たいもの (83、85) に分けられる。82 は他の甕に比して口縁が短い。外器面の指頭痕は焼成の際に剥落した可能性もある。83 は胴部から頸部にかけて縦方向の工具ナデが施されている。87～94 については、外器面に横もしくは斜め方向のタタキ目が施してある。92 の下半部は使用によるものか、タタキ目が摩滅している。94 は底部付近と胴部では異なる方向からタタキ調整が行われている。内器面は横ないし斜め方向の工具ナデのあとナデ調整を施している。88、89、91、93 には一部に煤の付着がみられる。

95、96 は底部に近い胴部である。95 は内外器面ともに丁寧な工具ナデが施されている。一部煤が付着する。96 は外器面に工具ナデが施されている。97、98 は厚めの平底である。外器面は底部下端までタタキ目が明瞭である。一部煤が付着する。内器面は丁寧にナデ調整されている。底の部分は欠損している。99 は薄手のやや平らな丸底である。外器面はタタキ調整、内器面は工具ナデが施されている。100 は外器面の損傷が著しく調整・形状ともに判読不能である。内器面は粗いナデが施されている。

101～103 は小型土器である。いずれも胎土に 4～5 mm の礫粒が混入し調整が粗く粗雑な印象である。101 は平底である。102 は張出部から出土している。103 は口縁～胴部である。

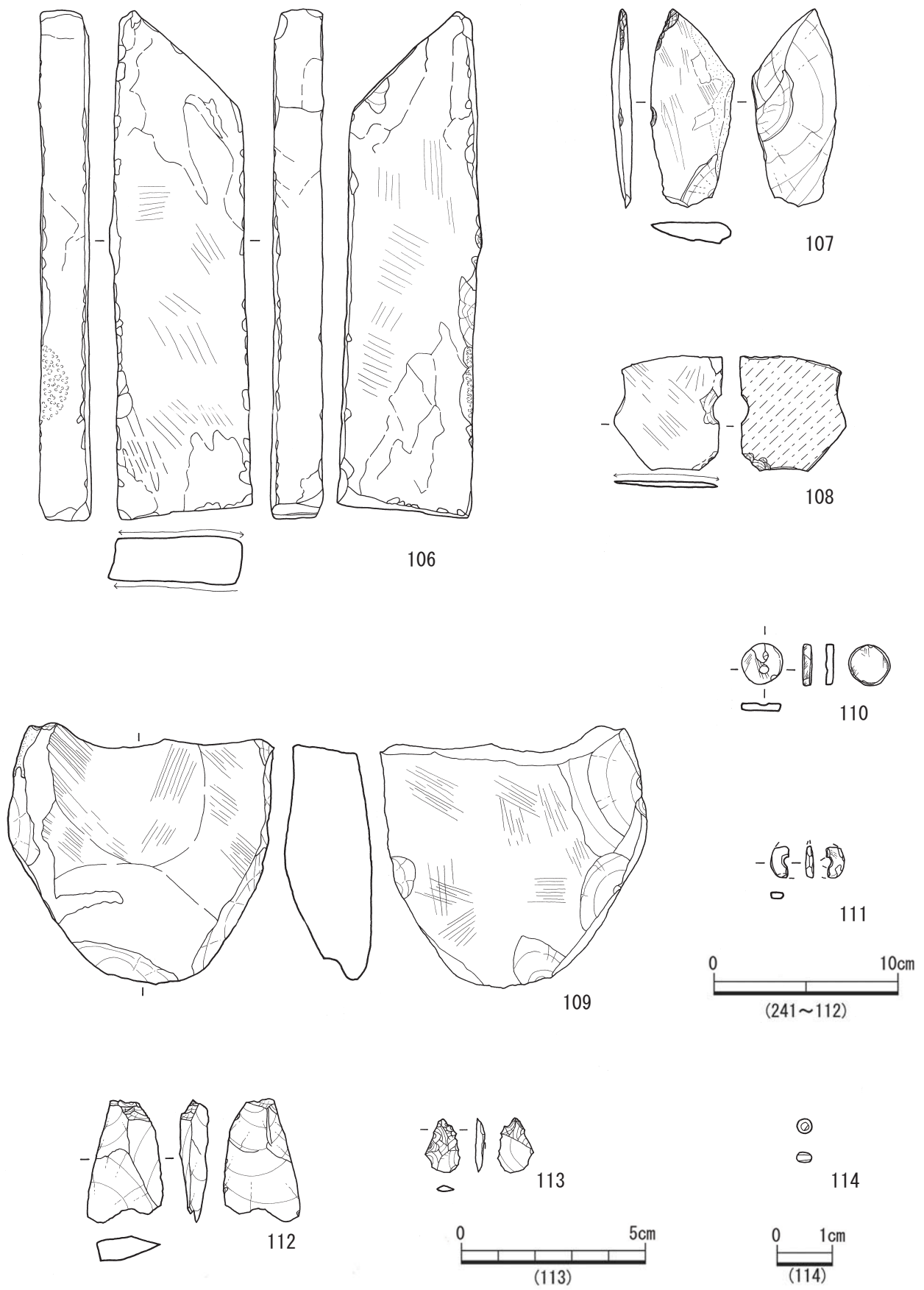
104、105 は鉢の口縁部である。104 は「L」字状に内側に屈曲する。部分的に外側への張出もみられ、「T」字状の可能性もある。105 は外側につまみ出している。どちらも口縁端部は平らに仕上げられている。調整は風化のために判読不能であるが、104 は口縁端部の仕上げや内器面の屈曲部の加工痕から工具ナデと思われる。胎土は 2 mm 程度の礫粒が混入し、調整や整形が粗雑な印象である。



第 20 图 竖穴建物跡出土土器実測图 2 (S=1/3)

報告書 掲載番号	器種	部位	口縁残存率 (底部残存率)	大きさ(cm)			色調 (外面/内面)	調整		胎土	備考
				口径	器高	底径		外面	内面		
81	甕	口縁～胴部	1/2	22.0	-	-	にぶい黄橙(10YR7/3)/ 浅黄橙(10YR8/3)	タキ→ナデ	ハケ・指頭 痕	4mm～5mm大のにぶい赤褐、褐灰の粒子を多く含む、3mm大のにぶい赤褐、褐灰の粒子を多く含む、1mm以下の褐灰、褐色の粒子を多く含む、7mm大のにぶい赤褐の粒子を少し含む。	
81	甕	胴部～底部	1/2	-	-	5.1	にぶい黄橙(10YR6/3)/ にぶい黄橙(10YR7/3)	タキ	ハケ	4mm～5mm大のにぶい赤褐、褐灰の粒子を多く含む、3mm大の褐灰、灰褐、灰白の粒子を少し含む。1mm以下のにぶい赤褐、褐灰の粒子をわずかに含む。	
82	甕	口縁～頸部	1/14	-	-	-	にぶい黄橙(7.5YR6/4)/ にぶい黄橙(7.5YR6/4)	ナデ・指頭 痕	ナデ・指頭 痕・ハケ	0.5mm以下の褐灰、褐の粒と1～4mmのにぶい赤褐、灰白、褐の粒を含む。	
83	甕	口縁～頸部	1/14	-	-	-	にぶい橙(5YR7/4)/ にぶい橙(5YR7/4)	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	0.5～6mmの灰白、褐灰、黒褐、褐の粒を含む。	
84	甕	口縁	1/11	-	-	-	にぶい橙(7.5YR7/3)/ にぶい橙(10YR7/3)	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	微細な褐灰の粒子を少し含む、2mm大、4mm大のにぶい黄橙の粒子を各1個含む。2mm大の黒褐色の粒子を1個含む。	
85	甕	口縁	1/16	-	-	-	にぶい橙(7.5YR7/4)/ にぶい橙(7.5YR7/3)	タキ	ナデ	1mm以下の赤褐色の粒子をわずかに含む。1mm以下の黒褐色の粒子と微細な黒色光沢粒を含む。	
86	甕	口縁～頸部	-	-	-	-	にぶい黄橙(10YR7/2)/ にぶい黄橙(10YR7/3)	ハケ・ナデ	ナデ	4mm以下のにぶい褐の粒を少し含む。2mm以下の褐灰の粒を少し含む。微細なにぶい黄橙、透明な光沢のある粒を多く含む。	
87	甕	頸部	1/7	-	-	-	にぶい黄橙(10YR7/4)/ にぶい黄橙(10YR7/4)	タキ	ハケ	微細な黒褐の粒を多く含む、微細な透明な光沢の粒を多く含む、2mm以下の赤褐色の粒をわずかに含む、4mm以下の暗褐の粒をわずかに含む。	
88	甕	頸部	1/9	-	-	-	にぶい黄橙(10YR7/3)/ にぶい黄橙(10YR7/4)	タキ	ナデ	5mm以下の褐灰の粒を少し含む、4mm以下の灰褐の粒を少し含む、2mm以下の橙の粒を少し含む、3mm以下の乳白色の粒を少し含む、微細な黒褐、褐灰、橙の粒を少し含む。	
89	甕	頸部～胴部	1/12	-	-	-	にぶい橙(5YR7/6)/ にぶい橙(5YR7/6)	タキ	ハケ	2mm程度の褐灰、にぶい赤褐色の粒子を少し含む、微細な赤褐色、黒褐色の粒子を多く含む。	煤付着
90	甕	頸部	-	-	-	-	浅黄橙(10YR8/4)/ 浅黄橙(10YR8/4)	タキ	ナデ	4mm以下の黒の粒を少し含む。4mm以下のにぶい橙の粒を少し含む。2mm以下の乳白色の粒を少し含む、1mm以下の灰色の粒を少し含む、微細な灰白色の粒を多く含む。	
91	甕	胴部	1/7	-	-	-	にぶい橙(7.5YR7/4)/ にぶい橙(7.5YR7/4)	タキ	ハケ・ナデ	微細～3mmの灰褐、褐灰、にぶい橙の粒と軟質の赤褐の粒を含む。	煤付着
92	甕	胴部	1/8	-	-	-	橙(5YR7/6)/ にぶい橙(7.5YR7/4)	タキ・ナデ	ハケ・ナデ	0.5～3mmの乳白色、灰白、灰褐、褐灰、黒褐の粒と5～7mmのにぶい橙と明褐灰、乳白色の粒を含む。	
93	甕	胴部	1/9	-	-	-	にぶい橙(7.5YR7/4)/ 橙(5YR6/6)	タキ	ハケ・ナデ	0.5～5mmの灰白、灰褐、褐灰の粒を含む。	煤付着
94	甕	胴部	1/6	-	-	-	にぶい黄橙(10YR7/4)/ にぶい黄橙(10YR7/4)	タキ	ハケ	5mm以下の褐灰の粒を少し含む、6mm以下の灰褐の粒を少し含む、2mm以下の乳白色の粒を少し含む、1mm以下の褐色の粒を多く含む。	
95	甕	胴下部	1/5	-	-	-	にぶい黄橙(7.5YR6/4)/ にぶい黄橙(7.5YR7/4)	ハケ・ナデ	ハケ	1～5mmの灰白、灰褐、褐灰、にぶい褐、黒褐の粒を含む。	煤付着
96	甕	胴部～底部付近	1/4	-	-	-	橙(5YR7/6)、浅黄橙(7.5YR8/4) / 橙(5YR7/6)	ハケ・ナデ	ナデ	1～4mmの灰白、灰褐、褐灰、黒褐の粒を含む。	内器面に 黒斑
97	甕	胴部～底部	1/4	-	-	5.0	にぶい黄橙(7.5YR7/3)/ にぶい黄橙(7.5YR7/4)	タキ	ナデ	3mm以下の明赤褐の粒を多く含む、4mm以下の褐灰の粒を少し含む、1mm以下の乳白色の粒を少し含む。	
98	甕	底部	1/2	-	-	3.8	にぶい黄橙(10YR7/2)/ にぶい黄橙(10YR7/3)	タキ	-	1mm以下の黒の光沢のある粒と0.5mm～4mmの灰白、灰褐、褐灰、褐、黒褐の粒を含む。	
99	甕	底部	1/2	-	-	4.0	にぶい黄橙(10YR7/3)/ にぶい黄橙(10YR7/3)	ナデ・ナデケ シ	ナデ	4mm以下の褐灰の粒をわずかに含む。5mmのにぶい橙の粒を1個含む。2mm以下の黒の光沢のある粒をわずかに含む。微細な黒、褐灰の粒を多く含む。	
100	甕	底部	-	-	-	-	にぶい黄橙(10YR7/4)(剥離面) / 黄灰(2.5YR4/1)、浅黄 (2.5YR7/3)	-	ナデ	3mm大の浅黄橙の粒子を多く含む。1mm以下の褐灰、灰白の粒子を少し含む。	
101	小型 土器	胴部～底部	1/3	-	-	4.1	浅黄橙(10YR8/3)/ 浅黄橙(10YR8/3)	-	-	1～2mm大の橙、灰、にぶい褐色の粒子を多く含む。1mm以下の褐灰、にぶい黄褐色の粒子を多く含む。	
102	小型 土器	胴部～底部付近	1/2	-	-	-	にぶい黄橙(10YR7/3)/ 灰白(5YR7/1)	ナデ	ナデ	3mmのにぶい橙の粒を少し含む。1mm以下の黒の粒をわずかに含む。	
103	小型 土器	口縁～胴部	1/6	8.6	-	-	にぶい橙(7.5YR7/4)/ 浅黄橙(10YR8/3)	指頭痕	指頭痕	5mmのにぶい橙の粒を1個、褐の粒を1個、4mmのにぶい褐の粒を1個、2mmの黒の粒を1個、2mmの褐灰の粒を1個含む。2mm～4mmのにぶい赤褐の粒を少し含む、1mm以下の黒、褐灰、赤褐の粒を多く含む。	
104	鉢	口縁	1/20	-	-	-	にぶい橙(7.5YR7/4)/ にぶい橙(7.5YR7/4)	ナデ	ナデ	1～2mm大の褐灰、灰褐の粒子を多く含む。微細な褐灰、黒色、にぶい赤褐色、灰白の粒子を少し含む。	
105	鉢	口縁	-	-	-	-	橙(5YR7/6)/ 橙(7.5YR7/6)	ナデ	ナデ	1mm以下の黒色、褐灰色の粒子をわずかに含む。微細な赤褐色の粒子をわずかに含む。	

第5表 竪穴建物跡出土土器観察表



第 2 1 图 竖穴建物跡出土石器実測图 (S=1/3、2/3、1/1)

(2) 石器 (第21図、第6表)

106は砂岩製の、107と108は頁岩製の砥石である。ともに擦痕が残り、106と107には砥面に鉄分の付着がみられる。107は張出部からの出土である。108には抉りがみられ、石庖丁としての二次利用が想起される。109は砂岩製の台石である。竪穴建物跡の中央付近に据え置かれていた。両面に磨り痕が残る。110と111は有孔円盤である。110は製作途中で放棄されたのか、孔は貫通していない。2箇所穿孔しようとしている。石材は細粒砂岩を用いており、研磨し光沢を持たせることを意図したと考えられる。一部外周部に黒色の付着物がみられる。111は中央部に1箇所穿孔のある有孔円盤で半分が欠損している。石材は頁岩である。研磨され光沢を放つ。112は流紋岩起源のホルンフェルスの剥片である。用途は不明である。先端は欠損している。右側縁や基部は使用された可能性がある。スクレイパーなどの用途が想起される。113はチャート製の石鏃の未製品あるいは失敗品と考えられる。右側縁を鋸歯状に加工している。114はガラス小玉である。南東側柱穴の埋土から1点出土している。最大厚0.2cm、最大長0.3cm、最大幅0.3cm、重量は0.1g未満であった。

※ガラス小玉の重量計測には0.1gまで計測できる新光電子株式会社の測器「DJ-6100」を用いた。

第5節 その他の遺構と遺物 (第22～28図、第7～9表)

(1) 時代不明の遺構 (第22図)

今回の調査ではF3グリッドにおいて、集石遺構1基が検出された。検出面はⅦ層で長軸102cm、短軸60cmの長楕円形である。掘り込みの平面形は長軸105cm、短軸83cmの楕円形、掘り込みの深さは38cmである。礫は斜面に平行する方向に横長に配置される。構成礫を計測した結果は次のとおりである。砂岩212点(82%)、軽石26点(10%)、溶岩4点(1.5%)、他は熔結凝灰岩、泥岩、礫岩等である。総礫数は257点だった。砂岩はほとんどが被熱、赤化し、破碎していた。軽石は阿蘇山に由来するもので、4点は人の頭ほどの大きなものだった。これらは本遺跡周辺で採取されるものではなく、遠方より人為的に持ち込まれたものと考えられる。板状の熔結凝灰岩は用いられておらず、五ヶ瀬河流域の縄文時代遺跡にみられる集石遺構とは様子が異なる。礫の配置の特徴として中央部が疎なことがあげられ、配石炉の可能性も考えられる。

報告書 掲載番号	器種	注記	石材	出土遺構	最大厚(cm)	最大長(cm)	最大幅(cm)	重量(g)
106	砥石	SA2b-18	砂岩	SA2	27.35	7.6	2.6	1015.3
107	砥石	SC3a-1	頁岩	SC3	10.7	4.5	1.15	48.11
108	砥石	SA2-237	頁岩(シルト起源)	SA2	6.15	5.7	0.3	18.2
109	台石	SA2d-54	砂岩	SA2	14.15	14.35	4.65	1225.5
110	有孔円盤	SA2-242	細粒砂岩	SA2	2.2	2.25	0.45	3.43
111	有孔円盤	SA2-242	頁岩	SA2	1.65	1.0	0.4	0.78
112	剥片	SA2-192	ホルンフェルス(流紋岩)	SA2	6.6	4.1	1.55	30.2
113	石鏃	SA2b-46	チャート	SA2	1.45	0.95	0.25	0.28

第6表 竪穴建物跡出土石器、石製品計測表

礫の重量は、合計で約 35kg、最も重量の大きいものが 2.5kg、1 個あたりの平均重量は 130g である。掘り込みの下部中央からは縄文時代の鉢の小片（第 12 図-13）と土師器片（第 24 図-130）が出土している。また、集石に用いられている石材の中に石斧 2 点が含まれていた（第 27 図-173、174）。石斧はともに砂岩製であり、173 は長さ 11.1cm、幅 5.6cm、厚さ 1.8cm、重量 126.1g、174 は長さ 12.0cm、幅 5.25cm、厚さ 1.55cm、重量 117.6g である。

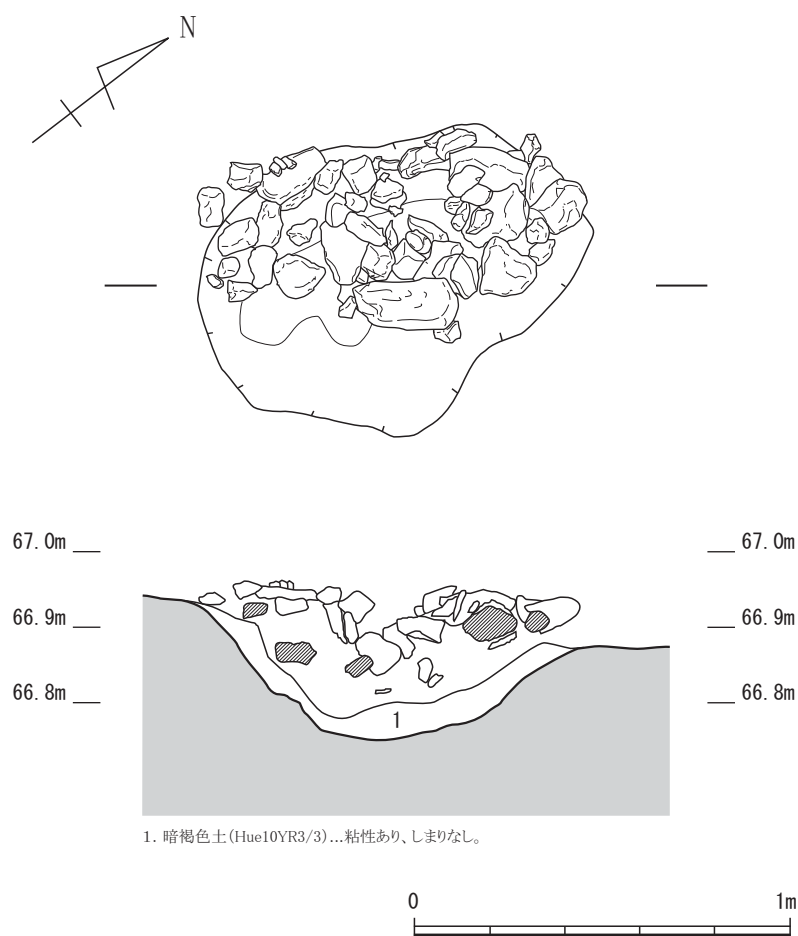
遺構の時期としては、周辺遺跡の状況から縄文時代の集石遺構の可能性が強いが、土師器の出土や確認面が角錐状石器が出土したⅦ層である点など特定が難しいことから、時代不明の遺構として報告した。

(2) 包含層出土の遺物（第 23～28 図、第 7～9 表）

A 区北側斜面の E3 グリッドを中心にⅡ・Ⅲ層から大量の遺物が検出された。Ⅱ層は耕作の影響を受けており、Ⅲ層は谷地形への流れ込みの可能性が高いこと、Ⅳ層上面で多数の柱穴を検出したが掘立柱など遺構に結びつくものはなかったことから、Ⅱ・Ⅲ層出土遺物は原位置情報を保つとはいえないと考え、一括して包含層出土遺物として報告する。

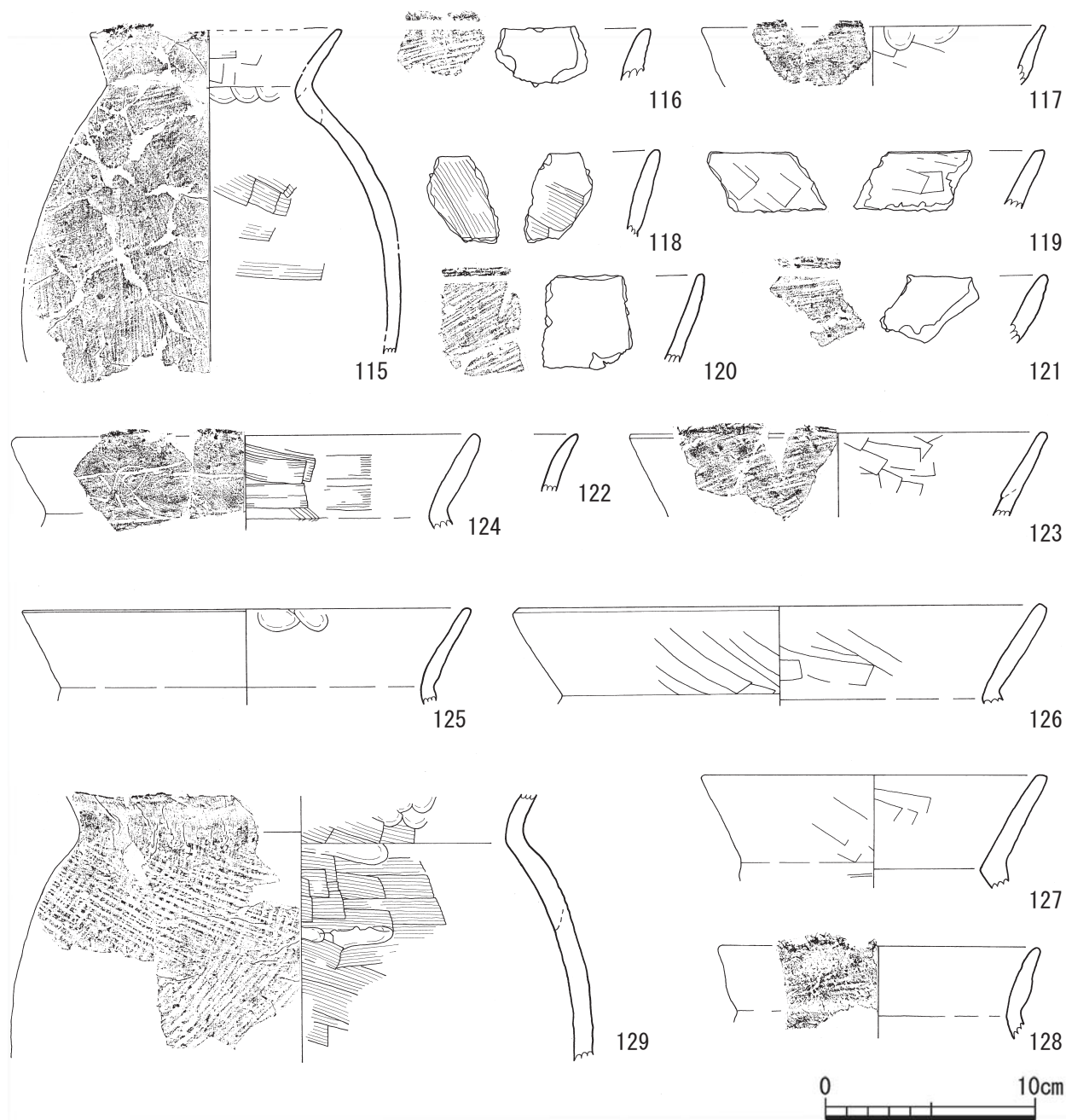
土器（第 23～25 図、第 7～8 表）

出土遺物は土師器の甕が最も多く、他には壺や鉢が出土している。115～145 は甕である。115 は最も多くの破片が接合した。復元口縁部の直径は 11.8cm を測る。胴部の最大径が口縁部径を凌駕する。外器面はタタキのあとナデ調整、内器面は工具ナデのあとナデ調整が施される。

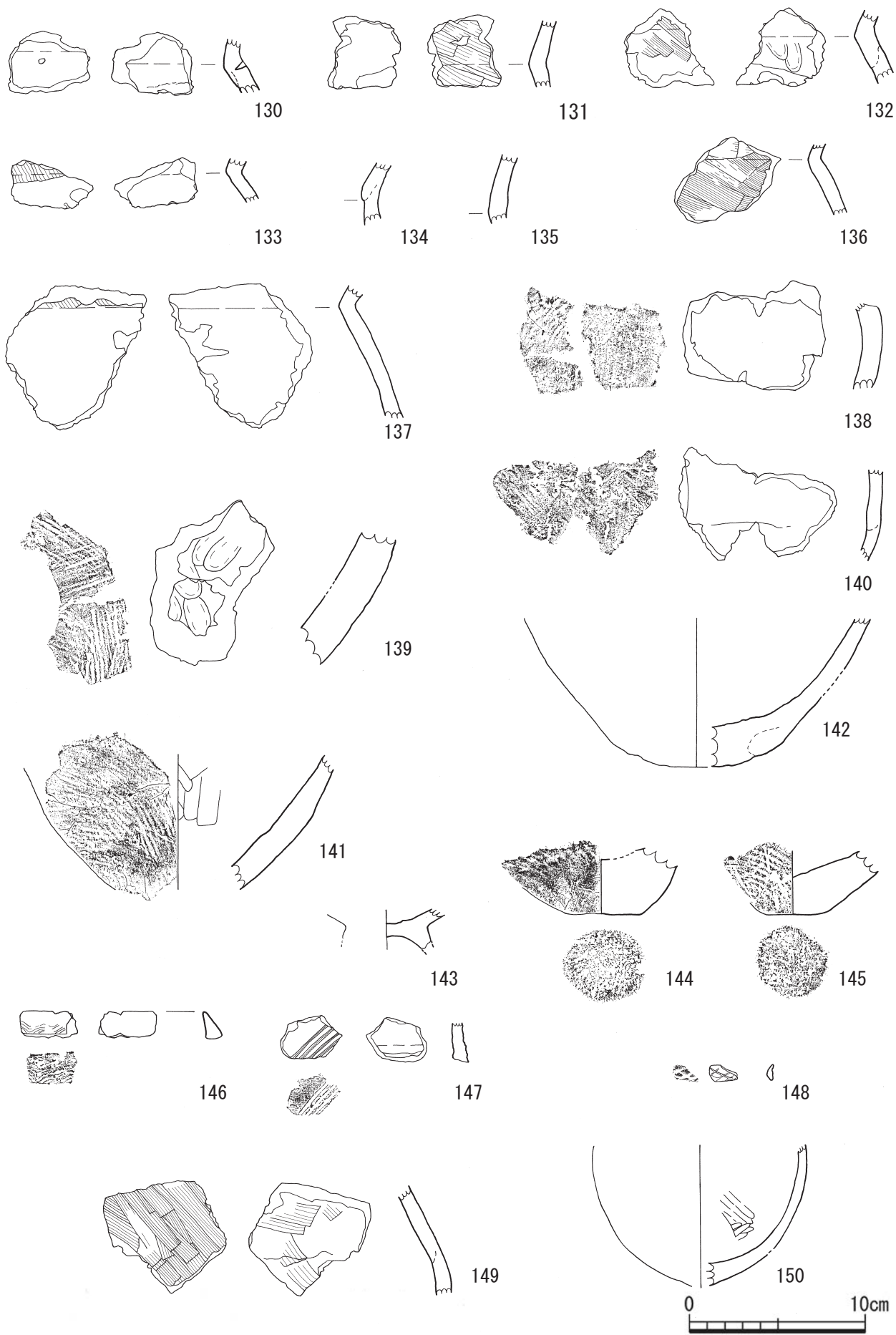


第 22 図 集石遺構実測図 (S=1/20)

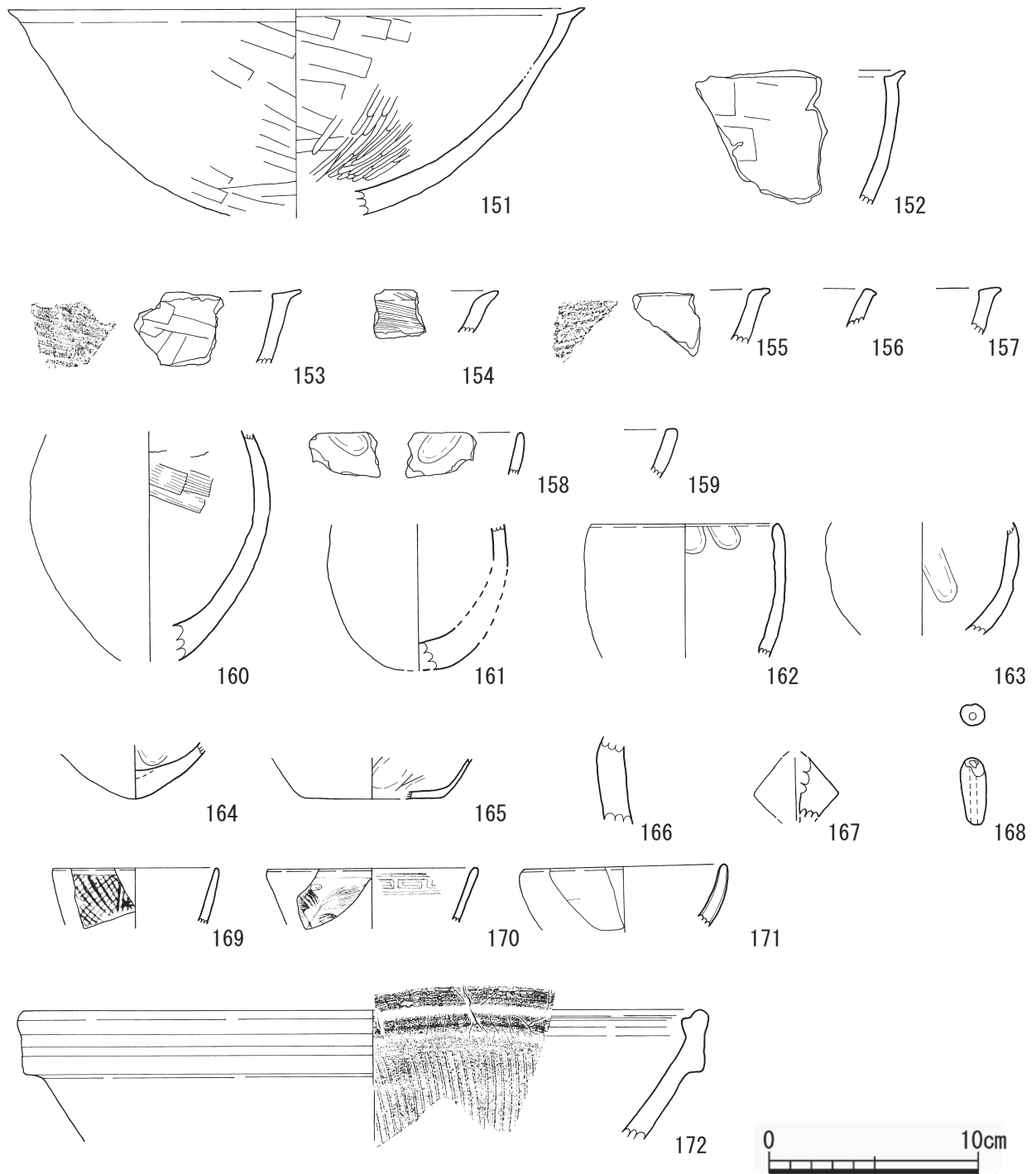
116～128 は口縁部、口縁～頸部である。直行するもの（118～120、123、125～127）、やや外反するもの（116、117、122、128）、わずかに内湾するもの（120）がある。器厚は117、122が先端にかけて薄くなる。他は頸部から口縁端部まで一定の厚みを持つ。口縁端部は119、120、126、127が平らに仕上げられ、他は丸く仕上げられている。129～141は頸部～胴部である。133と137の頸部は「く」の字状に屈曲する。129は頸部直下から胴部上半部に交差するように2方向のタタキ目が施されている。139は最大器厚が2.1cmと厚く、3方向からのタタキが施されている。胎土は5mmを超える礫粒を含む。130は集石遺構から出土している。刺突がみられる。142～145は底部である。142はやや平たい丸底、143は上げ底、144、145は平底である。146～150は壺である。146、147は二重口縁壺の口縁部である。146は櫛描波状文、147はへら描の文様がみられる。148は壺の頸部の突帯で格子目状の文様を持つ。149は胴部、150は胴部から口縁付近である。



第23図 包含層出土土器実測図1 (S=1/3)



第24图 包含層出土土器实测图2 (S=1/3)



第25図 包含層出土土器実測図3 (S=1/3)

151～157 は鉢である。151 と 154 は緩やかに外傾し他は直行する。全て口唇部をつまみだす。158～165 は小型土器である。口縁端部は丸く仕上げられているもの（158、162）と平らに仕上げられているもの（159）がある。165 は胎土に金色の光沢のある鉱物が多く含まれる。内面には指押さえの痕や粘土だまが残る。166 は高坏の脚部である。本遺跡出土唯一の高坏である。167 は土製紡錘車あるいは土錘であろうか。そろばんの玉状で中心部に軸棒を通したと思われる孔が穿たれている。168 は管状土錘である。169～171 は 18～19 世紀の肥前系の染付である。いずれも日常的に用いられた器と思われるが、小片の

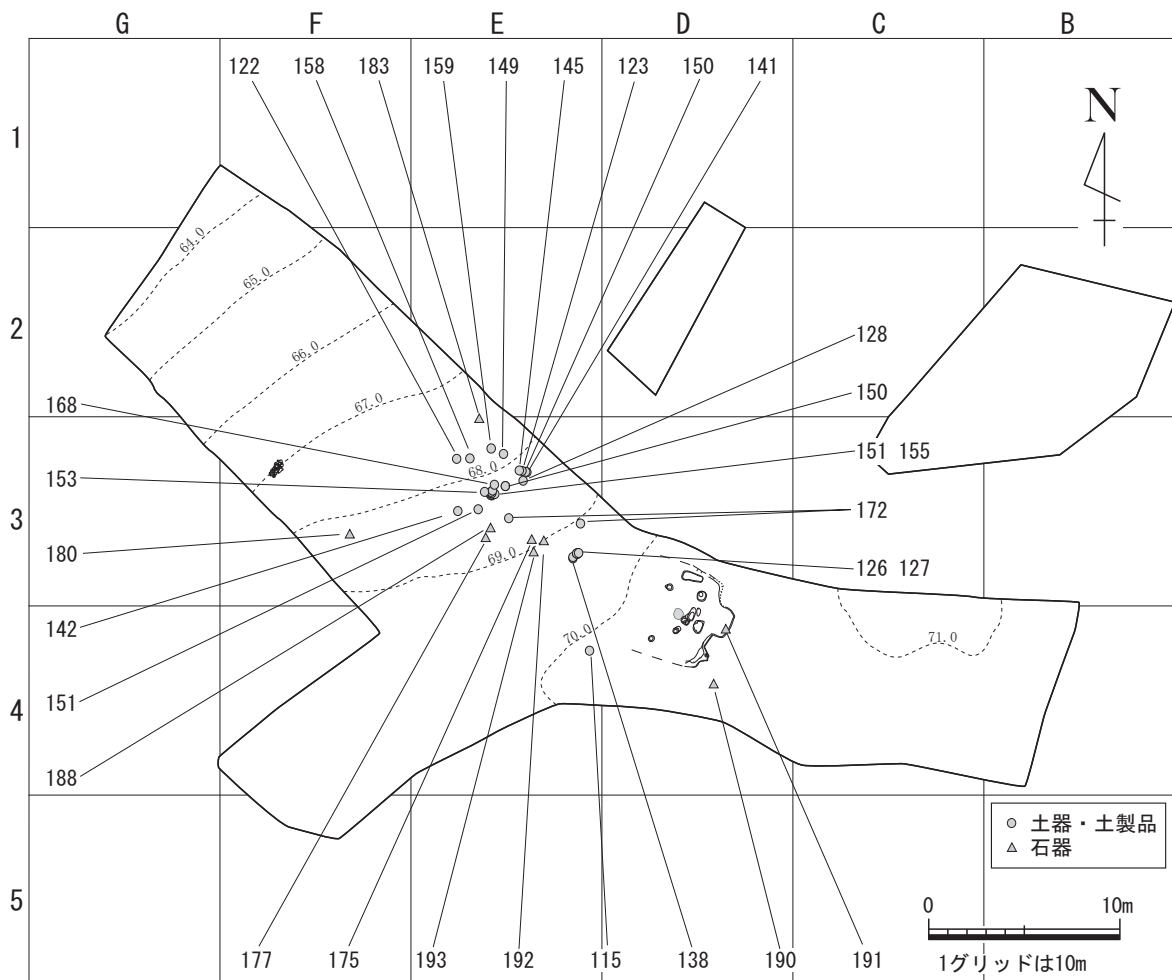
ため器種は判然としない。169は湯飲みであろうか、表面の照りが強い。170は碗と思われる。表面には草花が素描され、内面には雷文が描かれる。171は18世紀後半のくらわんか碗と思われる。浅い碗で、粗雑な印象である。172は近世の播り鉢である。Ⅱ～Ⅲ層から出土したものが接合した。

石器・石製品（第27～28図、第9表）

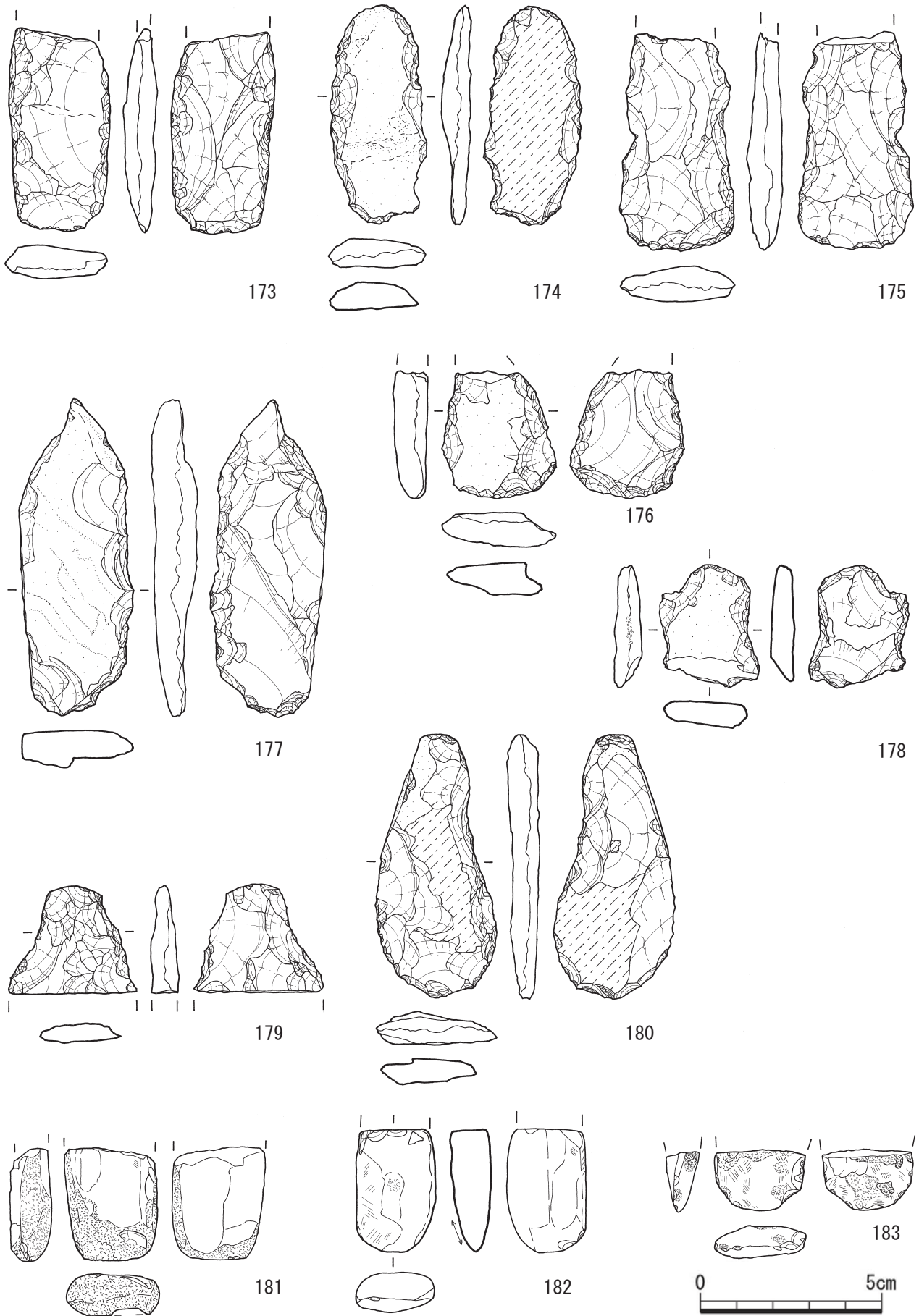
173～180は打製石斧である。石器縁辺部等に細かな整形がなされている。176～180は基部に袢りを持つ。173・174は集石遺構から出土した。181～183は磨製石斧である。いずれも基部は欠損している。181・183の刃部は蛤刃状を呈する。184～188は石錘である。186は頁岩製、他は砂岩製である。186は長軸の両端を打ち欠いている。187は短軸の両端に幅広の袢りがある。189はスクレイパーか。190は石庖丁である。191は砥石である。両面に磨痕が残る。192・193は棒状石製品である。敲打痕はない。194・195はチャート製の石鏃である。縄文時代早期のものと考えられる。196は柱状の黒曜石で石錐としての用途が想起される。

その他の遺物

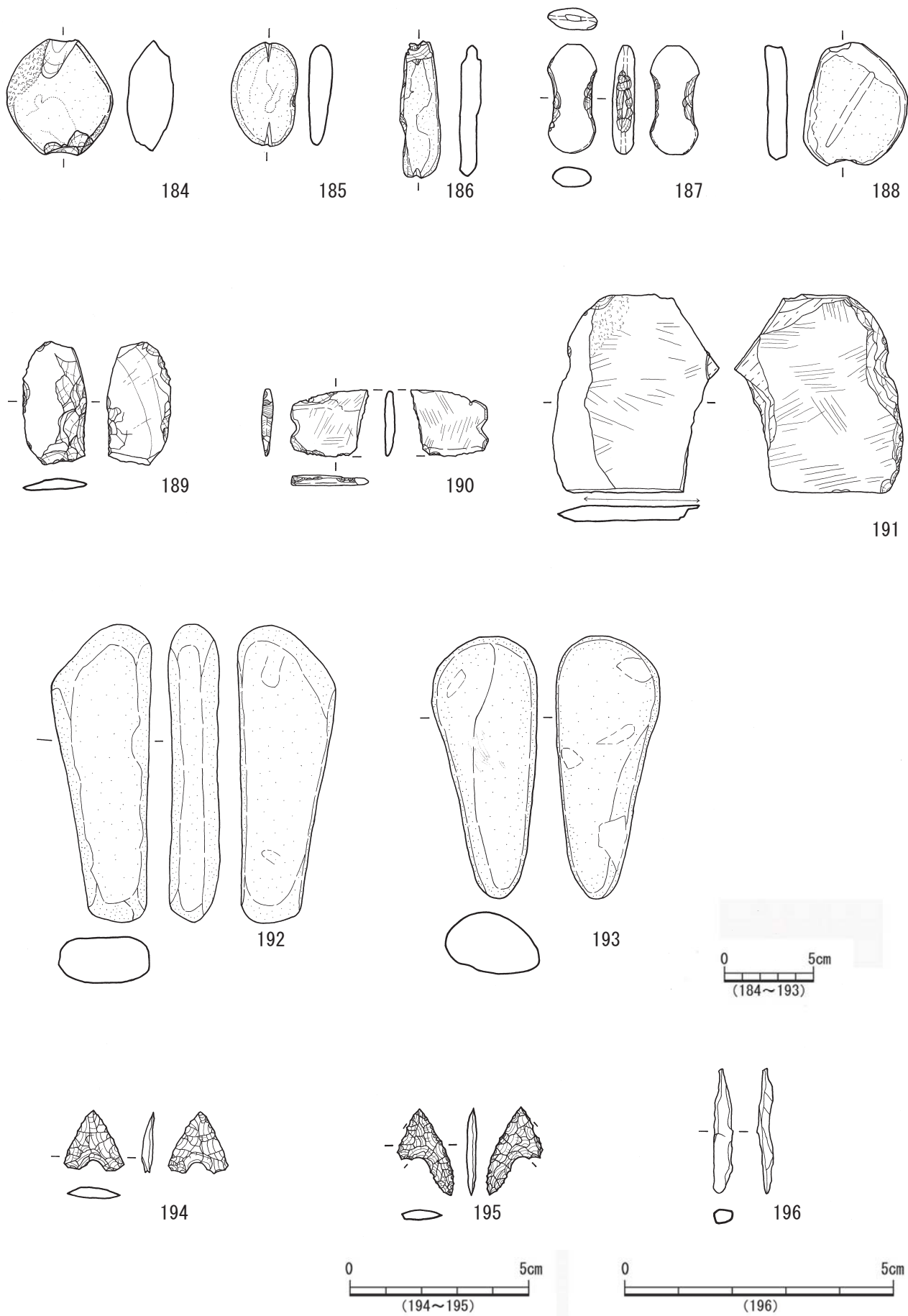
Ⅰ～Ⅱ層から仏飯器の破片が2点、煙管が1点、硬貨が2点、鉛玉が2点出土している。仏飯器はいずれも小片で文様も不明であり、時期や器形を特定できない。どちらもC区で出土している。煙管は雁首部のみが1点出土している。脂返しの湾曲も肩付きもなく断面は円形である。硬貨は大正七年の一銭と大正五年の十銭である。これらは未図化であるが図版13に写真を掲載した。



第26図 包含層出土遺物出土位置図 (S=1/400)



第 2 7 图 包含層出土石器实测图 1 (S=1/3)



第28图 包含層出土石器实测图2 (S=1/3、2/3、1/1)

報告書 掲載番号	器種	部位	出土遺構 ・層位	口縁残存率 (底部残存率)	大きさ(cm)			色調 (外面/内面)	調整		胎土	備考
					口径	器高	底径		外面	内面		
115	甕	口縁～ 胴部	II・V	2/3	11.8	-	-	にぶい黄橙(10YR7/4)、にぶい橙 (7.5YR7/4)/にぶい黄橙 (10YR7/3)	タキ・ナ デ	ハケ・タ キ・ナデ	0.5mm～5mmの灰褐、褐灰、黒褐、にぶい褐、明褐の粒と、6～7mmの粒 を少し含む。	
116	甕	口縁	C区	1/11	-	-	-	橙(5YR7/6)/にぶい黄橙 (10YR7/4)	タキ・ナ デ	ナデ	5mmのにぶい褐の粒を2個含む、4mmの黒の粒を1個含む、3mm以下の 赤褐の粒をわずかに含む、3mm以下の乳白色の粒をわずかに含む。	
117	甕	口縁	II	1/10	16.2	-	-	にぶい黄橙(10YR7/3)/ にぶい黄橙(10YR7/3)	タキ・ナ デ	ナデ・指 頭痕	3mm大の灰色の粒子を少し含む、微細な灰色、にぶい褐色の粒子を少し 含む。	
118	甕	口縁～ 頸部	カラン	-	-	-	-	浅黄橙(7.5YR8/4)/浅黄橙 (10YR8/3)	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	2mm以下の針状黒色光沢粒を多く含む、2～4mm大の褐灰、褐色の粒子 を少し含む。	外器面に 黒斑
119	甕	口縁	III	1/13	-	-	-	橙(2.5YR6/6)/ 橙(2.5YR6/6)、にぶい黄橙 (10YR6/4)	ナデ	ナデ	1mm大のにぶい赤褐、褐灰、灰白色の粒子を少し含む、3mm大のにぶい 赤褐、褐灰色の粒子をわずかに含む、1mm大の黒色光沢粒を1個含む。	
120	甕	口縁	II	1/10	-	-	-	橙(5YR7/6)/にぶい黄橙 (10YR7/3)	タキ	ナデ	3mmの黒の粒1個含む、1mm以下の赤褐の粒を少し含む、1mm以下の褐 灰の粒を多く含む。	
121	甕	口縁	II	1/10	-	-	-	にぶい黄橙(10YR6/3)/ にぶい黄橙(10YR6/3)	タキ	ナデ	3mm以下の褐灰の粒を多く含む、微細な透明の光沢のある粒を多く含 む、3mm以下の明赤褐の粒を少し含む。	
122	甕	口縁	II	1/14	-	-	-	にぶい黄橙(10YR7/4)/ にぶい黄橙(10YR7/4)	ナデ	ナデ	微細～1mmの黒や透明の光沢のある粒と、2mm以下の灰白、にぶい褐、 黒褐の粒を含む。	
123	甕	口縁	II、III	1/8	19.7	-	-	にぶい黄橙(10YR6/3)/ にぶい黄橙(10YR6/3)	タキ	ナデ	1～3mmの灰白、褐灰、黒褐、にぶい褐の粒を含む。	
124	甕	口縁～ 頸部	II	1/10	21.8	-	-	にぶい黄橙(10YR7/3)/ にぶい黄橙(10YR7/4)	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	微細な黒褐色の粒子を多く含む、1～3mm大の褐灰、黒褐色、灰白、褐色 の粒子を少し含む。	沈線
125	甕	口縁～ 頸部	II	1/8	20.9	-	-	にぶい黄橙(10YR7/3)/ にぶい黄橙(10YR6/3)	ナデ・ナデ ケシ	指頭痕・ ナデ	0.5mm～4mmの灰白、褐灰、にぶい褐の粒を含む。	煤付着
126	甕	口縁～ 頸部	III	1/9	24.8	-	-	にぶい橙(7.5YR6/4)/橙 (2.5YR6/6)	ナデ	ナデ	1mm以下の黒褐、褐灰、赤褐色の粒子を少し含む。3～5mm大の褐灰、 灰黄色の粒子をわずかに含む。	
127	甕	口縁～ 頸部	III	1/10	16.0	-	-	橙(2.5YR6/6)、にぶい橙 (7.5YR6/4)/ にぶい黄橙(10YR7/4)	ナデ	ナデ	1mm以下の褐灰、灰白の粒子を多く含む。3～5mm大の黒褐、褐、褐灰の 粒子を少し含む。	
128	甕	口縁～ 頸部	III	1/8	15.1	-	-	にぶい黄橙(7.5YR7/4)/ にぶい黄橙(10YR7/4)	タキ・ナ デ	ナデ	3～4mm大の褐灰、にぶい黄褐色の粒子をわずかに含む、1mm大の褐灰 色の粒子、微細な赤褐色の粒子をわずかに含む。	煤付着
129	甕	頸部～ 胴部	III	1/5	-	-	-	にぶい橙(5YR6/4)、にぶい橙 (7.5YR6/4)/にぶい黄橙(5YR6/4)	ハケ・タ キ・ナデ	ハケ・ナデ	1～4mmの灰白、灰褐、褐灰、褐、黒褐の粒を含む。	外器面に 黒斑
130	甕	頸部	集石遺構	1/11	-	-	-	にぶい黄橙(10YR7/3)/ にぶい黄橙(10YR7/3)	ナデ	ナデ	4mm以下のにぶい橙の粒を少し含む。3mm以下の褐灰の粒をわずかに 含む、2mm以下の黒の光沢のある粒をわずかに含む。	刺突
131	甕	頸部	II	1/10	-	-	-	灰黄褐(10YR6/2)/にぶい橙 (7.5YR6/4)	ナデ	ハケ	3mmの黒の光沢の粒、褐灰の粒を各1個、4mm以下のにぶい赤褐の粒を 少し含む。	
132	甕	頸部	III	1/16	-	-	-	浅黄(2.5YR7/4)/浅黄(2.5YR7/4)	ハケ	ナデ	3mm以下の灰褐の粒を少し含む、2mm以下の明褐の粒を少し含む、微細 な透明の光沢のある粒を多く含む。	
133	甕	頸部	II	-	-	-	-	橙(5YR6/6)/橙(5YR6/6)	ハケ	ナデ	4mmのにぶい褐の粒を1個、3mmの乳白色の粒を1個、3mmの灰褐の粒を 少し含む、微細な透明の光沢の粒、褐灰の粒を多く含む。	
134	甕	頸部	II	-	-	-	-	灰黄褐(10YR5/2)/ にぶい黄橙(10YR6/3)	ナデ	ナデ	黒の光沢のある粒を1個、1mm以下の褐灰の粒を多く含む。	
135	甕	頸部	II	1/15	-	-	-	にぶい橙(7.5YR7/4)/ にぶい黄橙(10YR7/3)	ナデ	ナデ	4mm大の褐灰、にぶい褐色の粒子をわずかに含む、1mm以下の褐灰の 粒子を多く含む、1mm以下の赤褐色の粒子をわずかに含む。	
136	甕	頸部～ 胴部	II	1/12	-	-	-	橙(5YR6/6)/にぶい黄橙 (10YR6/4)	ナデ	ハケ	1mm以下の灰白、褐灰、褐色の粒子を含む。	
137	甕	頸部～ 胴部	II	1/12	-	-	-	にぶい橙(7.5YR6/4)/ にぶい黄橙(10YR7/4)	ハケ・ナデ	ナデ	1～5mmの灰褐、灰白、褐灰、黒褐の粒を含む。	
138	甕	胴部	III	1/6	-	-	-	橙(5YR7/6)、浅黄(2.5YR7/3)/ 橙(5YR7/6)	タキ	ナデ	3mmの黒の光沢のある粒を1個、3mm以下の乳白色の粒を少し含む、 2mm以下の褐灰、灰白、黒の粒を多く含む。	
139	甕	底部付 近	-	1/10	-	-	-	にぶい橙(7.5YR7/4)/黄灰 (2.5YR5/1)	タキ	ナデ	3mm大のにぶい赤褐、黒褐の粒子をわずかに含む、1mm以下の灰白、暗 赤褐色の粒子をわずかに含む。	
140	甕	胴部	-	1/10	-	-	-	にぶい橙(7.5YR7/3)/ にぶい黄橙(10YR7/3)	タキ・ナ デ	ナデ	0.5mm～5mmの灰白、灰褐、褐灰、にぶい褐、黒褐の粒を含む。	
141	甕	底部付 近	III	1/5	-	-	-	にぶい黄橙(10YR6/3)/灰黄 (2.5YR6/2)	タキ	ハケ・ナデ	微細～1mmの金色の光沢のある粒と、0.5mm～4mmの灰白、褐灰、褐 の粒を含む。	煤付着
142	甕	胴部～ 底部	II、III	2/5	-	-	7.6	にぶい黄橙(10YR7/2)/ にぶい黄橙(10YR7/3)	ナデ	ナデ	2～3mmの褐灰、にぶい黄橙、にぶい黄褐、褐色の粒子を多く含む、1mm 以下の褐灰、褐、にぶい黄褐色の粒子を多く含む。5mm大の褐灰、黒褐色 の粒子をわずかに含む。	内器面に 黒斑
143	甕	底部	II	1/2	-	-	-	浅黄橙(7.5YR8/4)/浅黄橙 (10YR8/3)	ナデ	-	1～2mm大の明赤褐、黒褐、褐灰の粒子を少し含む、1mm以下の黒褐、 褐色、灰白の粒子を多く含む、4mm大の白色の粒子を1個含む。	上げ底
144	甕	底部	II	4/5	-	-	3.85	にぶい黄橙(10YR7/3)/にぶい橙 (7.5YR7/4)/黒(2.5YR2/1)	タキ	-	1mm大の褐灰、灰白、褐色の粒子を多く含む、3mm大の褐灰、褐色の粒 子をわずかに含む。	
145	甕	底部	III	2/5	-	-	3.65	にぶい橙(7.5YR7/4)/ 黄灰(2.5YR4/1)	タキ	-	2～3mm大の褐灰、明褐灰の粒子を多く含む。	
146	壺	口縁	II	1/22	-	-	-	にぶい橙(7.5YR7/4)/ にぶい黄橙(10YR7/3)	縞描波 状文	ナデ	0.5mm～3mmの灰白、灰褐、褐灰、にぶい赤褐、黒褐の粒と6mmの褐灰 の粒を1個含む。	
147	壺	口縁付 近	C区	1/15	-	-	-	にぶい黄橙(7.5YR7/4)/ にぶい黄橙(7.5YR7/4)	鋸歯状 線文	ナデ	2～3mm大のにぶい赤褐色、黄灰色、黒褐色の粒子をわずかに含む、微 細な透明光沢粒、黄灰色、にぶい赤褐色の粒子を多く含む。	
148	壺	頸部	II	-	-	-	-	浅黄橙(10YR8/4)/浅黄橙 (10YR8/4)	-	-	1mm以下のにぶい赤褐色、赤褐色の粒子をわずかに含む。	刻み目貼 付突帯

第7表 包含層出土土器観察表1

報告書 掲載番号	器種	部位	出土遺構 ・層位	口縁残存率 (底部残存率)	大きさ(cm)			色調 (外面/内面)	調整		胎土	備考
					口径	器高	底径		外面	内面		
149	壺	胴部	II	1/10	-	-	-	にぶい黄橙(10YR7/4)／ にぶい黄橙(10YR7/3)	ハケ	ハケ・ナデ	1～3mmの褐灰、褐、黒褐の粒を含む。	
150	壺	胴部～ 底部	II、III	1/4	-	-	-	にぶい橙(7.5YR7/4)、橙(5YR6/6) ／ 浅黄(2.5YR7/3)	ナデ	ナデ・ミガ キ	2mm以下の赤褐、黒、乳白色、褐灰の粒を多く含む。	外器面に 黒斑
151	鉢	口縁～ 底部付 近	II、III	1/5	27.4	-	-	橙(5YR6/6)／にぶい黄橙 (10YR7/4)	ナデ	ナデ・ミガ キ	1～2mm大の褐灰、透明光沢粒、赤褐色の粒子を多く含む。	内器面に 黒斑
152	鉢	口縁～ 胴部	II	1/18	-	-	-	橙(5YR7/6)／橙(5YR6/6)	ナデ	ナデ	1～2mm大の褐灰、灰褐、黒褐、褐色の粒子を多く含む。	
153	鉢	口縁～ 胴部	II	1/21	-	-	-	浅黄(2.5YR7/3)／ にぶい黄橙(10YR7/4)、灰黄褐 (10YR6/2)	タタ	ナデ	0.5mm～3mmの灰白、灰褐、褐の粒を含む。	
154	鉢	口縁	II	-	-	-	-	にぶい黄橙(10YR6/3)／ にぶい黄橙(10YR7/4)	ナデ	ハケ	0.5mm～2mmの灰白、灰褐、褐灰、黒褐の粒を含む。	
155	鉢	口縁～ 胴部	III	1/15	-	-	-	橙(7.5YR7/6)／橙(7.5YR7/6)	タタ	ナデ	1mm～4mmの灰白、灰褐の粒を含む。	
156	鉢	口縁	II	1/10	-	-	-	にぶい黄橙(10YR7/3)／ にぶい黄橙(10YR7/3)	ナデ	ナデ	微細な透明の光沢のある粒と、0.5～3mmの灰褐、黒褐、褐灰の粒を含 む。	
157	鉢	口縁～ 胴部	II	1/14	-	-	-	にぶい橙(7.5YR7/4)／ にぶい黄橙(10YR7/3)	ナデ	ナデ	0.5mm～2mmの灰白、灰褐、褐灰の粒を含む。	
158	小型 土器	口縁	II	-	-	-	-	にぶい黄橙(10YR7/4)／ にぶい黄橙(10YR6/4)	ナデ・指 頭痕	ナデ・指 頭痕	1mm以下の褐灰、褐色の粒子を少し含む。	
159	小型 土器	口縁	II	1/11	-	-	-	にぶい黄橙(10YR7/3)／ にぶい黄橙(10YR7/4)	ナデ	ナデ	3～4mm大の黒色光沢粒、褐色、褐灰色の粒子をわずかに含む。	外器面に 黒斑
160	小型 土器	頸部付 近～底 部	II	1/3	-	-	-	にぶい黄橙(10YR7/3)／ にぶい黄橙(10YR7/4)	ナデ	ハケ・ナデ	0.5mm～2mmの灰白、灰褐、黒褐の粒と2mmの赤褐の軟質の粒を含む。	外器面に 黒斑
161	小型 土器	胴部～ 底部	カケン	1/3	-	-	-	にぶい黄橙(10YR6/3)／ にぶい黄橙(10YR7/3)	ナデ	ナデ	0.5mm～3mmの灰褐、褐灰、褐の粒と4mm～6mm程の褐灰、灰褐、灰白 の粒を含む。	
162	小型 土器	口縁～ 胴部	II	1/5	8.8	-	-	にぶい橙(7.5YR7/4)、浅黄橙 (10YR8/3)／ 橙(7.5YR7/6)	ナデ	ナデ	5mmぐらいの灰褐、褐灰、灰白の粒を少し含む、2mm～3mmの黒の粒を 少し含む、微細な灰褐、赤褐の粒を少し含む。	
163	小型 土器	口縁～ 胴部	表採	1/5	-	-	-	にぶい橙(10YR6/3)／橙(5YR7/6)	ナデ・ナデ ケシ	ナデ	1mm～3mmの灰白の粒を少し含む、2mmの黒褐、灰褐、橙の粒を少し含 む。	外器面に 黒斑
164	小型 土器	底部	II	1/4	-	-	-	にぶい黄橙(10YR7/3)／ 暗灰黄(2.5YR5/2)	ナデ	ナデ	微細な透明光沢粒を多く含む、1mm以下の褐灰、黒色光沢粒、褐色の粒 子をわずかに含む。	外器面に 黒斑
165	小型 土器	胴部～ 底部	II	1/6	-	-	6.4	橙(7.5YR7/6)／ にぶい橙(7.5YR7/4)	ナデ	指頭痕	微細な褐灰の粒を多く含む、微細な銀の光沢の粒を多く含む。	
166	高坏	脚部	II	1/7	-	-	-	橙(7.5YR7/6)／橙(5YR6/6)	ナデ	ナデ	微細な透明光沢粒、褐灰色の粒子を多く含む、4mm大の黒色粒子を1 個含む、1mm以下の褐灰色の粒子をわずかに含む。	
169	染付碗	口縁～ 胴部	II	1/12	7.85	-	-	灰白(N8/0)／灰白(2.5GY8/1)	施釉	施釉	精良	
170	染付碗	口縁～ 胴部	II	1/12	9.9	-	-	灰白(N8/0)／灰白(N8/0)	施釉	施釉	精良	
171	染付碗	口縁～ 胴部	II	1/10	9.6	-	-	灰白(7.5Y7/1)／灰白(7.5Y7/1)	施釉	施釉	精良	
172	すり鉢	口縁～ 体部	II、III	1/5	31.4	-	-	明赤褐(2.5YR5/6)／明赤褐 (2.5YR5/6)	-	-	0.5mm～3mm程の白色粒を多く含む。	

第8表 包含層出土土器観察表2

報告書掲載番号	出土区・遺構	層	器種	注記番号	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
173	集石遺構	VII	打製石斧	SI4	砂岩	11.1	5.6	1.8	126.1
174	集石遺構	VII	打製石斧	SI4	砂岩	12.0	5.25	1.55	117.6
175	E3	III	打製石斧	III-64	砂岩	11.95	6.25	1.4	158.3
176	E3	II	打製石斧	E3c II	砂岩	7.0	6.2	1.9	95.3
177	E3	III	打製石斧	III-68	砂岩	17.35	6.2	2.5	287.1
178	E3	II	打製石斧	E3d II	砂岩	6.7	5.4	1.5	61.6
179	E3	II	打製石斧	E3c II	砂岩	5.9	7.0	1.5	55.6
180	F3	I	打製石斧	I-24	砂岩	14.5	5.15	1.8	167.8
181	-	II	磨製石斧	Tr5E II	頁岩	6.2	5.05	2.35	115.4
182	E3	II	磨製石斧	E3a II	砂岩	6.8	4.35	2.15	105.6
183	E3	II	磨製石斧	E3a II-257	花崗閃緑岩	3.3	4.95	1.8	33.5
184	D3	II	石錘	D3c II	砂岩	6.45	5.85	2.55	119.0
185	E3	II	石錘	E3b II	砂岩	5.7	2.6	1.3	42.0
186	E2	II	石錘	E2 II	頁岩	7.55	2.2	7.0	30.4
187	E3	II	石錘	E3c II	砂岩	6.0	2.7	1.2	26.67
188	E3	I	石錘	I-34	砂岩	6.75	5.75	1.2	73.0
189	-	-	スクレーパー	カケン4	千枚岩	6.8	3.5	0.6	19.75
190	D4	I	石廂丁	I-14	頁岩	3.7	4.3	0.6	12.77
191	D4	-	砥石	Tr2-36	砂岩	10.95	9.15	0.9	141.3
192	E3	II	礫器	II-59	砂岩	16.5	5.35	2.9	375.6
193	E3	II	礫器	II-62	砂岩	14.55	5.6	3.45	365.4
194	F3	II	石鏃	F3b II	チャート	1.7	1.65	0.3	0.7
195	E3	-	石鏃	54	チャート	2.4	1.55	0.25	0.76
196	F3	II	柱状黒曜石	F3b II	黒曜石	3.4	0.5	0.4	0.61

第9表 包含層出土石器計測表

第IV章 自然科学分析

宮崎県埋蔵文化財センター：十郎ヶ尾遺跡における放射性炭素年代測定

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

放射性炭素年代測定は、光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素（ ^{14}C ）の濃度が放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木や種実などの植物遺体、骨、貝殻、土壌、土器付着炭化物などが測定対象となり、約5万年前までの年代測定が可能である。

2. 試料と方法

次表に、測定試料の詳細と放射性炭素年代測定の前処理・調整法および測定法を示す。

試料 No.	地点・層準	種類	前処理・調整法	測定法
No. 1	SA2, 焼土, 13	炭化材	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸処理	AMS
No. 2	SI14, 埋土, 14	炭化材	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸処理	AMS

AMS : 加速器質量分析法 (Accelerator Mass Spectrometry)

3. 測定結果

加速器質量分析法 (AMS) によって得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行い、放射性炭素 (^{14}C) 年代および暦年代 (較正年代) を算出した。次表にこれらの結果を示し、図 1 に暦年較正結果 (較正曲線) を示す。

試料 No.	測定No. (PED-)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	^{14}C 年代 : 年BP (暦年較正用)	暦年代 (較正年代)	
				1 σ (68.2%確率)	2 σ (95.4%確率)
No. 1	19212	-25.93 ± 0.12	1805 ± 20 (1806 ± 20)	AD 130- 250(68.2%) AD1690-1720(16.2%)	AD 130- 260(93.6%) AD 300- 320(1.8%)
No. 2	19213	-24.95 ± 0.12	80 ± 20 (80 ± 18)	AD1810-1840(12.4%) AD1870-1920(39.6%)	AD1690-1730(25.7%) AD1810-1920(69.7%)

BP : Before Physics (Present), AD : 西暦紀元後

(1) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表す。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を $-25(\text{‰})$ に標準化することで同位体分別効果を補正する。

(2) 放射性炭素 (^{14}C) 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、現在 (AD1950 年基点) から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は 5730 年であるが、国際的慣例により Libby の 5568 年を用いた。統計誤差 (\pm) は 1σ (68.2% 確率) である。 ^{14}C 年代値は下 1 桁を丸めて表記するのが慣例であるが、暦年較正曲線が更新された場合のために下 1 桁を丸めない暦年較正用年代値も併記した。

(3) 暦年代 (Calendar Age)

過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動および ^{14}C の半減期の違いを較正することで、放射性炭素 (^{14}C) 年代をより実際の年代値に近づけることができる。暦年代較正には、年代既知の樹木年輪の詳細な ^{14}C 測定値およびサンゴの U/Th (ウラン/トリウム) 年代と ^{14}C 年代の比較により作成された較正曲線を使用した。較正曲線のデータは IntCal 09、較正プログラムは OxCal 3.1 である。

暦年代 (較正年代) は、 ^{14}C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅で表し、OxCal の確率法により 1σ (68.2% 確率) と 2σ (95.4% 確率) で示した。較正曲線が不安定な年代では、複数の $1\sigma \cdot 2\sigma$ 値が表記される場合もある。() 内の % 表示は、その範囲内に暦年代が入る確率を示す。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

4. 所見

加速器質量分析法 (AMS) による放射性炭素年代測定の結果、No. 1 の炭化材では 1805 ± 20 年 BP (2σ の暦年代で AD 130~260, 300~320 年)、No. 2 の炭化材では 80 ± 20 年 BP (AD1690~1730, 1810~1920 年) の年代値が得られた。

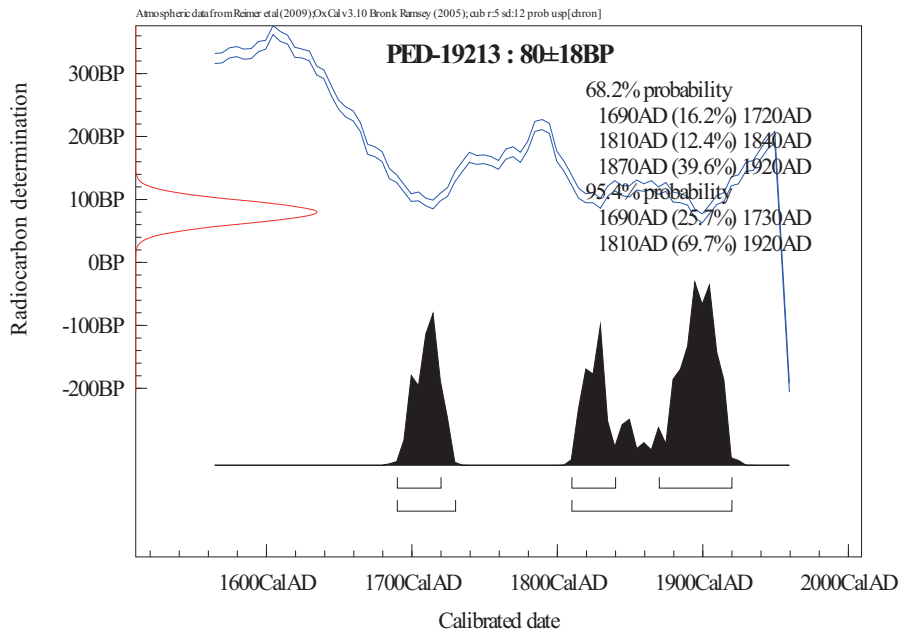
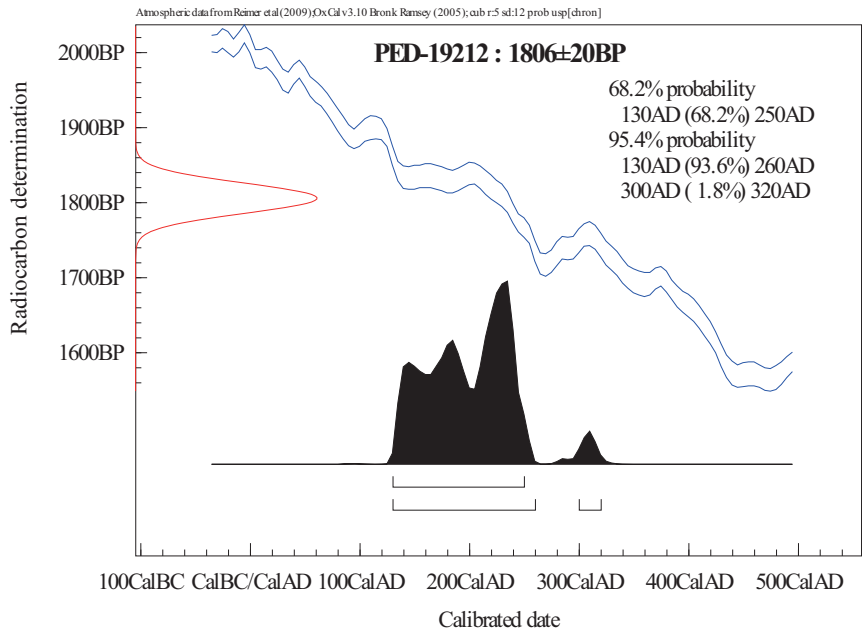
文献

Bronk Ramsey C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy, The OxCal Program, Radiocarbon, 37(2), p.425-430.

Bronk Ramsey C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43, 355-363.

Paula J Reimer et al., (2009) IntCal 09 and Marine 09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 51, p.1111-1150.

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の ^{14}C 年代, p.3-20.



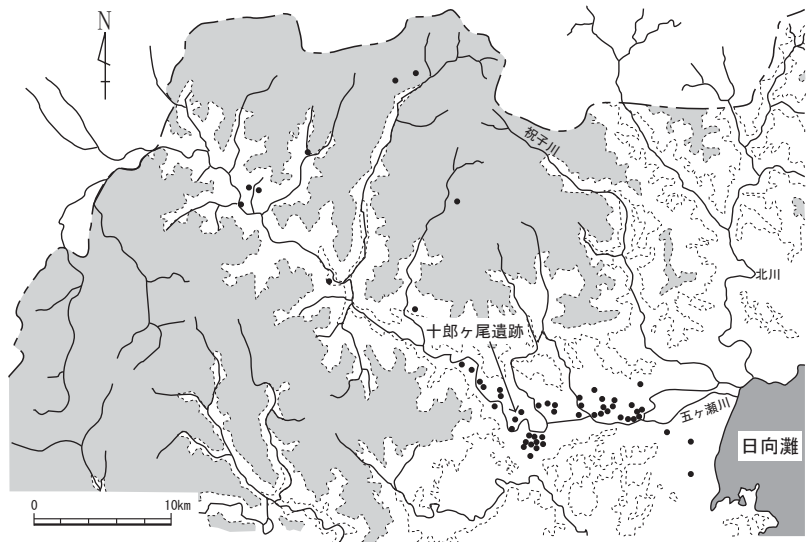
第 2 9 図 曆年較正結果

第V章 総括

今回の調査では旧石器時代、縄文時代の遺物や弥生時代から古墳時代にかけての遺構・遺物が確認された。調査の成果や課題について簡単にまとめ総括とする。

旧石器時代

今回の調査では遺構の検出はなく、角錐状石器1点のみが出土した。五ヶ瀬川流域には非常に多くの旧石器時代遺跡が確認されており、特に延岡市吉野から旧北方町蔵田にかけて流域沿いの丘陵上には40カ所を越す遺跡が分布している。いずれも後期旧石器時代の遺跡で始良Tn火山灰層(AT)の下位の文化層から細石器文化層までの石器群が確認される。遺跡の周辺には剥片尖頭器が出土した南久保山小堀町遺跡や北久保山遺跡、ナイフ形石器や剥片尖頭器が出土した黒仁田遺跡などがあり宮崎10段階編年ではAT上位の第5段階を中心とする時期の遺跡の分布が見られる。角錐状石器も同じ時期の石器で第5段階に出現し、第6段階になると小型化し第7段階には消滅する。周辺遺跡での出土例はなく少し離れた矢野原遺跡や赤木遺跡で報告されている。本遺跡出土の角錐状石器は1点であり時期の確定は難しく第5段階～第6段階の時期に相当するものと思われる。



第30図 五ヶ瀬川流域の旧石器時代遺跡の分布

南久保山小堀町遺跡や北久保山遺跡、ナイフ形石器や剥片尖頭器が出土した黒仁田遺跡などがあり宮崎10段階編年ではAT上位の第5段階を中心とする時期の遺跡の分布が見られる。角錐状石器も同じ時期の石器で第5段階に出現し、第6段階になると小型化し第7段階には消滅する。周辺遺跡での出土例はなく少し離れた矢野原遺跡や赤木遺跡で報告されている。本遺跡出土の角錐状石器は1点であり時期の確定は難しく第5段階～第6段階の時期に相当するものと思われる。

縄文時代

V・VI層で縄文土器及び石器類が出土した。V・VI層は部分的に見分けにくく連続した層とも考えられる。押型文土器をはじめとする縄文時代早期の土器はいずれも風化が著しい。五ヶ瀬川流域の縄文時代遺跡に共通する土器と思われる。晩期の土器の出土数は少ないが、丁寧に磨かれた土器が出土しており、南久保山小堀町遺跡で出土した黒色磨研土器と通ずる時期のものと思われる。

石器では大量のチャート製の剥片と石鏃十数点が出土した。E4杭付近で大量に出土したチャート製の剥片の広がりやむしろ南北に細長く高低差があり、上部からの流れ込みの可能性が強い。黒曜石が数点出土しているが製品は石鏃の脚部と思われるものが1点であった。

集石遺構は検出されなかったが散礫の状況から付近に存在すると予想される。

弥生時代～古墳時代

竪穴建物跡が1軒、舌状に伸びる尾根の頂上部、北側斜面の縁で検出された。旧北方町では斜面頂部に弥生時代終末から古墳時代にかけての住居跡が単独あるいは数機確認される例が早日渡遺跡や上崎遺跡等で見られる。竪穴建物跡から出土した遺物の中には小型土器や有孔円盤など日用品とは区別される土器や石製品が出土している。1点上げ底の甕と報告している143については祭祀土器の可能性も考え

られる。しかし胎土が精良とはいえず、資料数が少ないこともあり、今後の調査で資料が増え、詳細な分析がなされることを期待したい。

竪穴建物跡の柱穴の埋土からガラス小玉が1点出土している。五ヶ瀬川の上流に位置する高千穂町三田井において、平成8年に高千穂町教育委員会が町立病院建設に伴う埋蔵文化財発掘調査（吾平原北第6号横穴墓群）を行った際にガラス小玉が1269点出土している。このうち76点を分析したところ全てアルカリ珪酸塩ガラスであり、うち5mm未満2mm以上の小玉（小）は全てソーダ石灰ガラスであったと報告されている。本遺跡で出土したガラス小玉は詳細な分析を行っていないが、肉眼観察による限りでは同じ組成の可能性が高い。ソーダ石灰ガラスは6世紀後半より出現することから、それによれば本遺跡の竪穴住居跡は6世紀後半以降のものとなる。但し年代測定の結果とは齟齬を来すことになる。今回の調査ではガラス小玉の出土は1点にとどまり、調査範囲を拡大すれば或いは周辺にさらに建物跡や古代の墓が検出されるかもしれない。今後の開発の際には注意が必要である。

竪穴建物跡付近から石庖丁が出土しており、弥生時代以降に麓の谷で農耕を営んだことが想像される。今回の調査では詳細を明らかにすることはできなかったが、高坏の脚部が1点出土していることや、有孔円盤、ガラス小玉が出土していることから、当地に農耕を基盤として各種の精神活動を行った集落が存在したと考えられる。

時代不明の遺構として報告した集石遺構には板状の熔結凝灰岩の配石がみられず、五ヶ瀬川流域に多く見られるものとは異なる傾向を示した。撚糸文土器片・打製石斧を伴う点は上崎地区遺跡アカホヤ層下面で一基検出されたものと通ずるが、土師器片を伴うことから竪穴建物跡と同時代のものとも考えられる。埋土中の炭化物を分析した結果では近世～近代であった。

中世以降の遺物としては播り鉢や仏飯器、染付や煙管、鉛玉などが出土している。

延岡北方道路は平成25年供用開始に向けて急ピッチで開発が進められており、本報告書執筆中の現在も中畑遺跡、坂ノ下遺跡の発掘調査が行われている。それらの遺跡からの出土資料もあわせて、今後さらに詳細な歴史の解明がなされることを期待する。

【参考文献】

- 北方町史編纂委員会 1972「北方町史 第二巻」北方町
- 北方町教育委員会 1990「笠下遺跡」『北方町文化財報告書第1集』
- 北方町教育委員会 1992「南久保山小堀町遺跡」『北方町文化財報告書第5集』
- 北方町教育委員会 2004「町内遺跡詳細分布調査報告書」『北方町文化財報告書第23集』
- 北方町教育委員会 2006「北方町内遺跡6」『北方町文化財報告書第27集』
- 沢皇臣「東臼杵郡北方町出土の弥生土器」『宮崎考古』第1号 宮崎考古学会
- 鈴木重治 1973「宮崎県岩土原遺跡の調査—土器伴出石器文化の一例—」『石器時代』第10号 石器時代文化研究会
- 田中茂 1962『東臼杵郡 北方村の古墳』北方村教育委員会
- 延岡市教育委員会 1978「野田八田遺跡」
- 延岡市教育委員会 1987「延岡市の歴史的環境 赤木遺跡 多々良遺跡」『延岡市文化財調査報告書第3集』
- 延岡市教育委員会 2008「上崎地区遺跡」『延岡市文化財調査報告書第36集』
- 宮崎県教育委員会 1983「宮崎学園都市 埋蔵文化財発掘調査外報（IV）」
- 江戸遺跡研究会編「図説江戸考古学研究事典」2001 柏書房株式会社

图 版



竪穴建物跡 東より



竪穴建物跡 北より

十郎ヶ尾遺跡 図版2



竖穴建物跡 検出状況 南西より



竖穴建物跡 遺物検出状況



竪穴建物跡 土器検出状況



竪穴建物跡 石器検出状況



竪穴建物跡 張出部遺物検出状況



竪穴建物跡 焼土検出状況



竪穴建物跡 北西柱穴

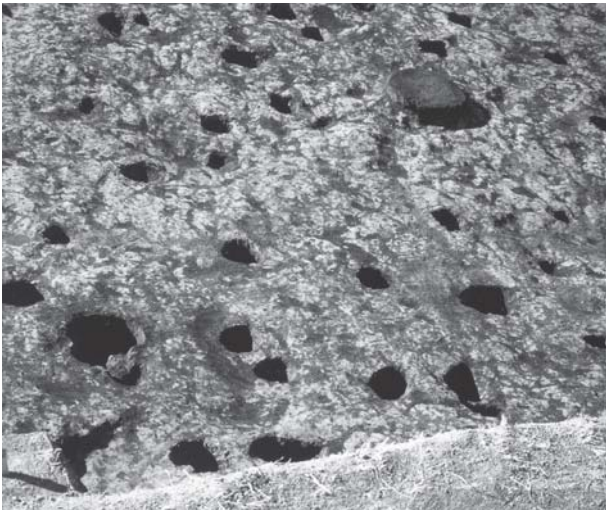
十郎ヶ尾遺跡 図版4



作業風景



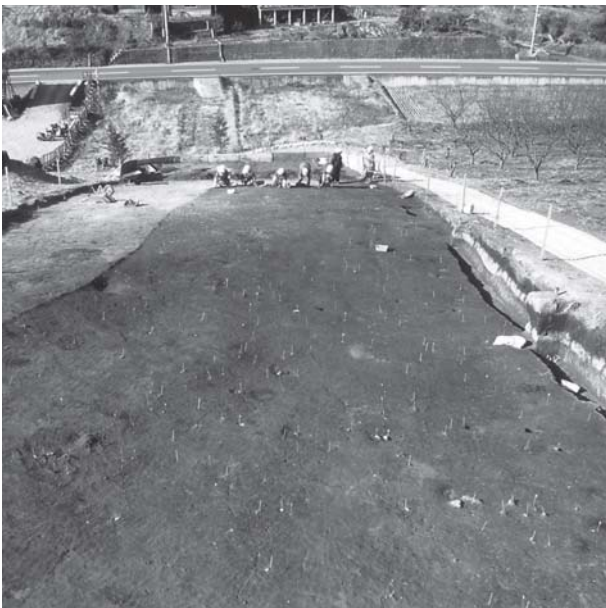
A区 IV層上面 東より



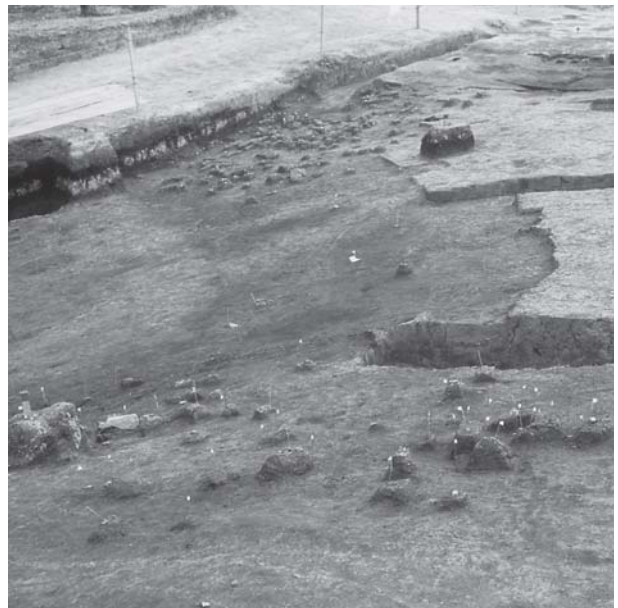
A区 IV層上面ピット検出状況



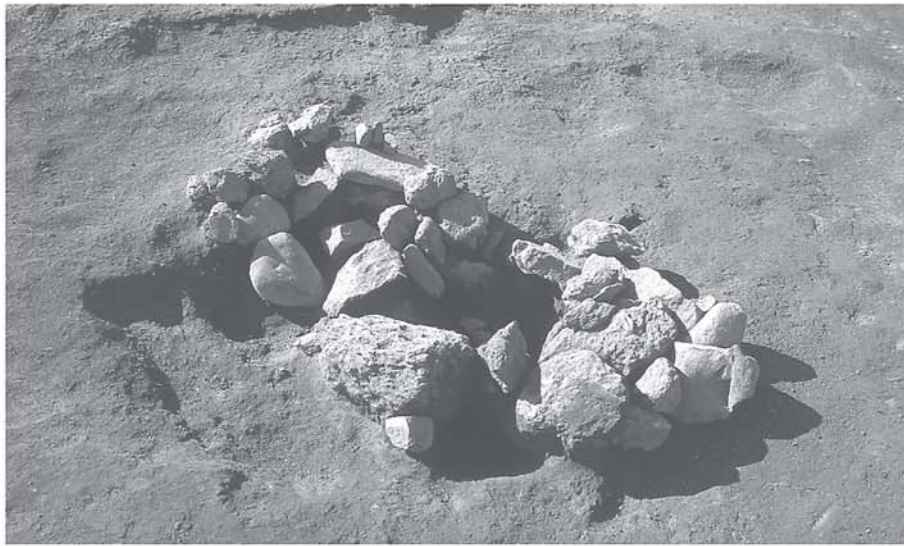
A区 丘陵頂上部 西より



A区 V層上面調査風景



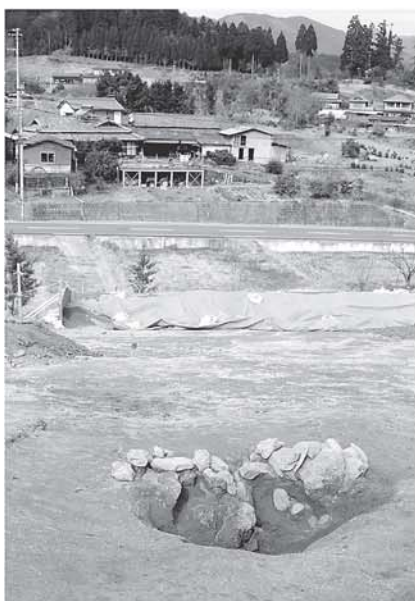
A区 チャート剥片密集部 西より



検出状況



半掘状況

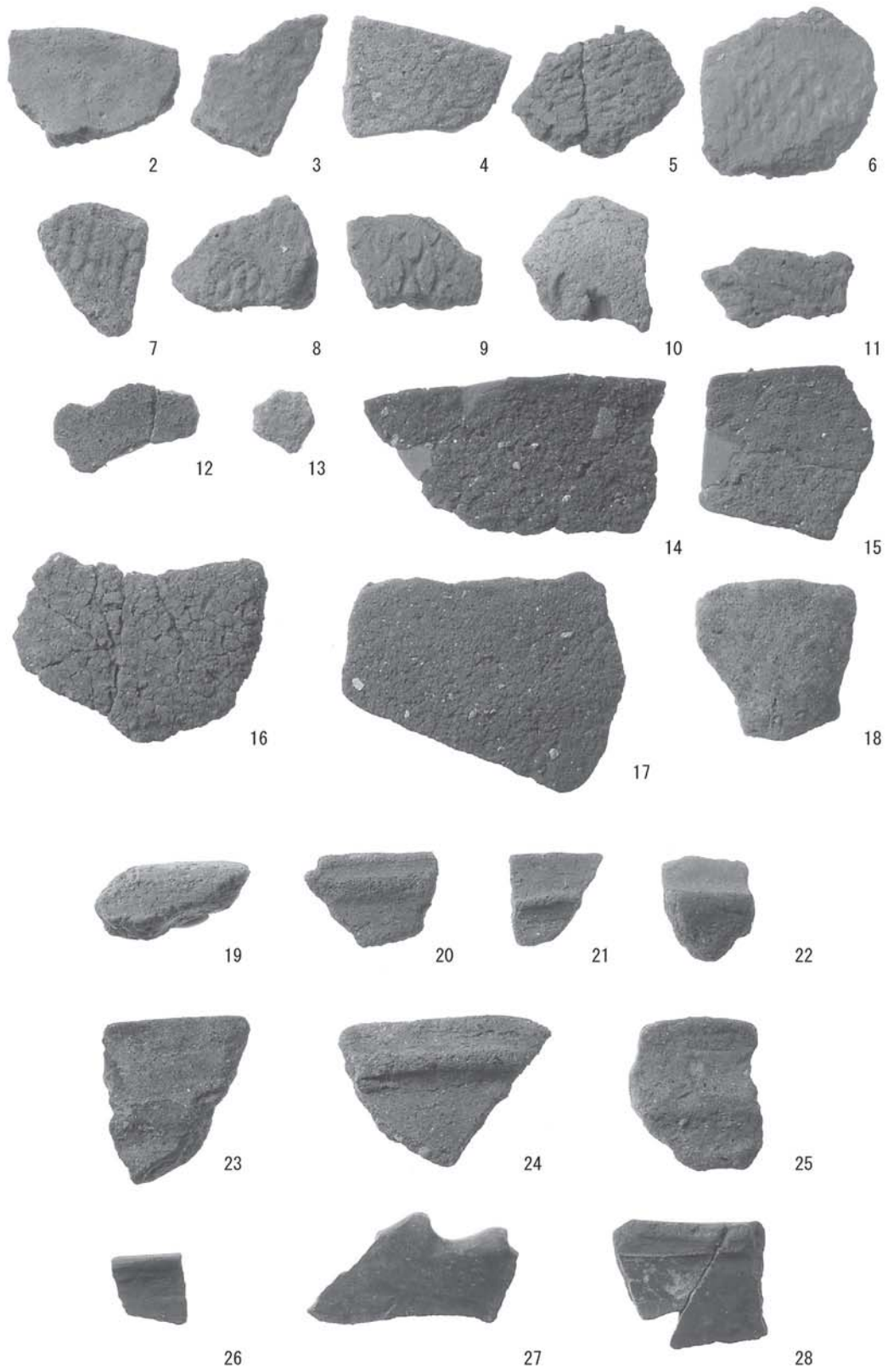


南東より



完掘状況

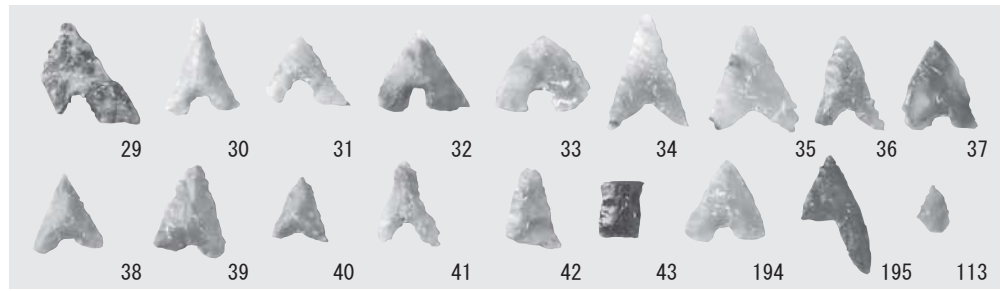
集石遺構



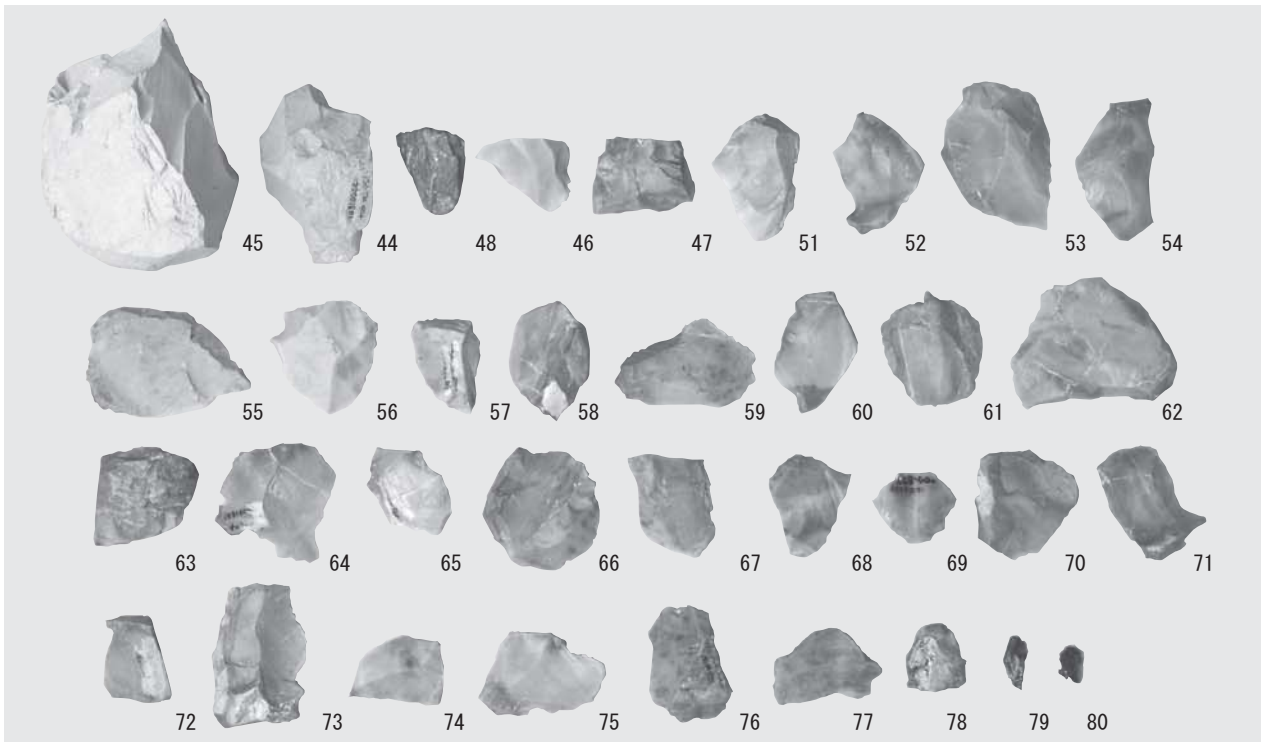
縄文土器



角錐状石器



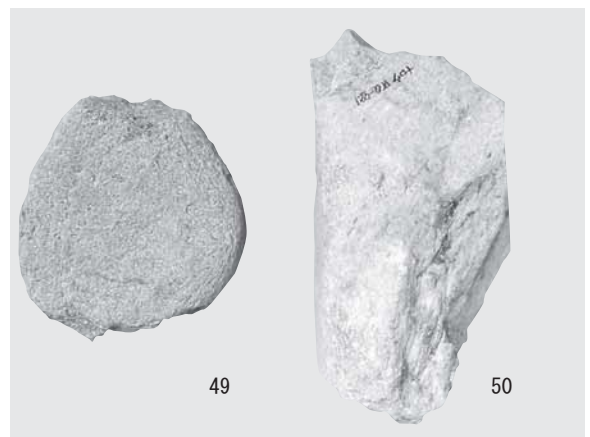
石鏃



石核・剥片（報告書掲載分）



剥片（報告書未掲載分）

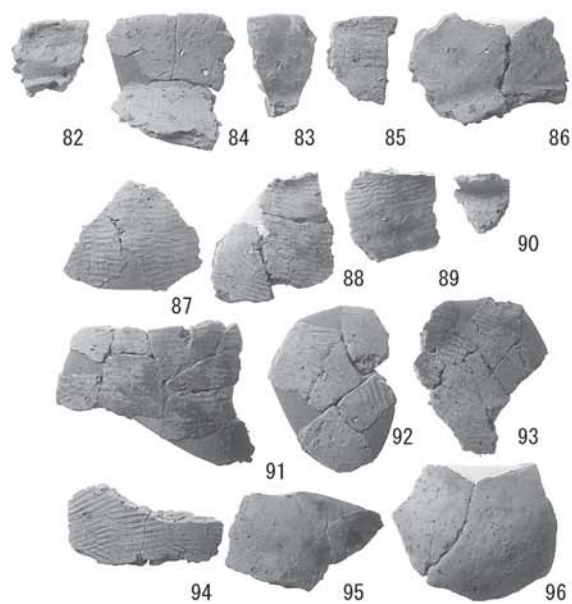


石錘・礫器

旧石器時代、縄文時代石器



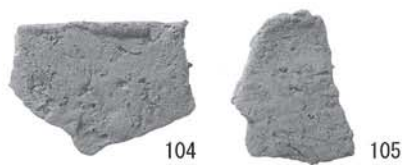
甕



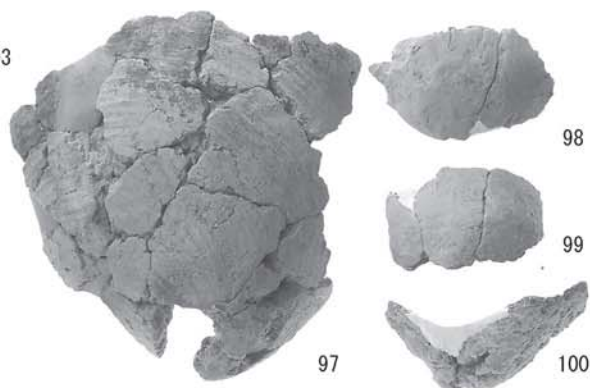
甕 口縁～胴部



小型土器

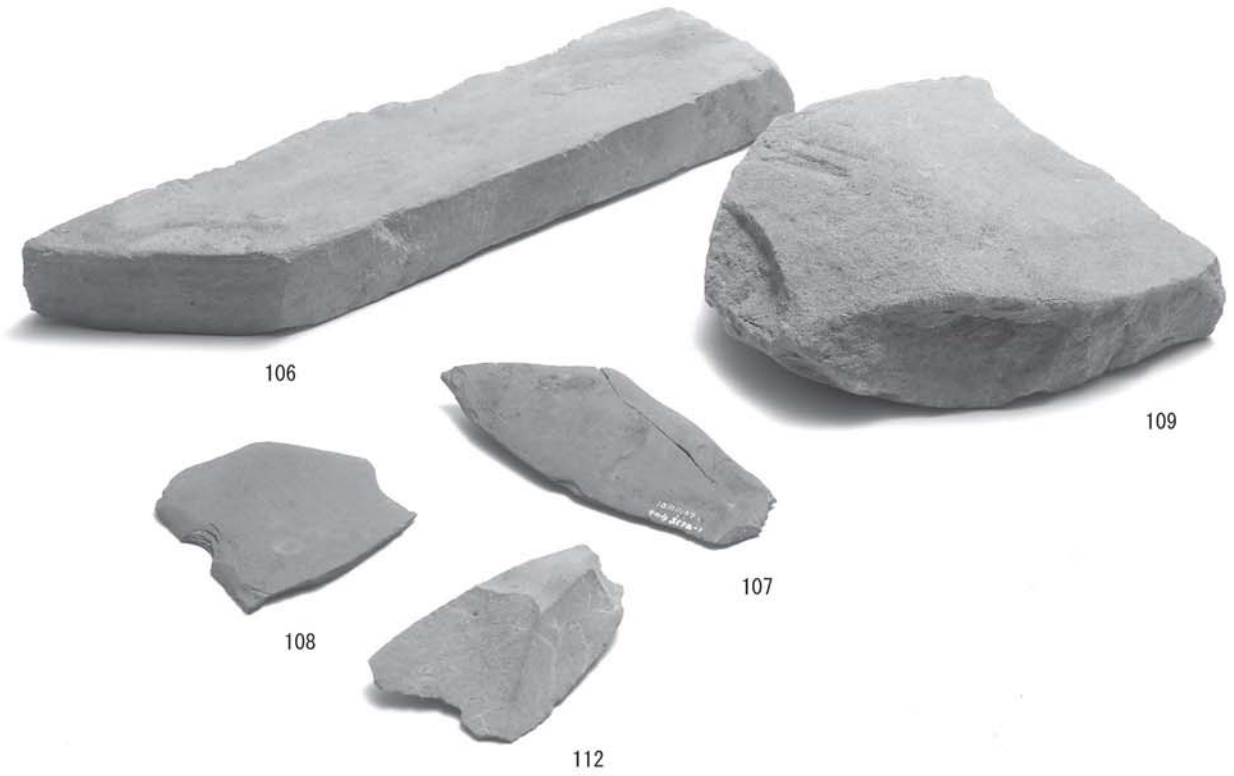


鉢 口縁



甕 底部

竪穴建物跡出土土器



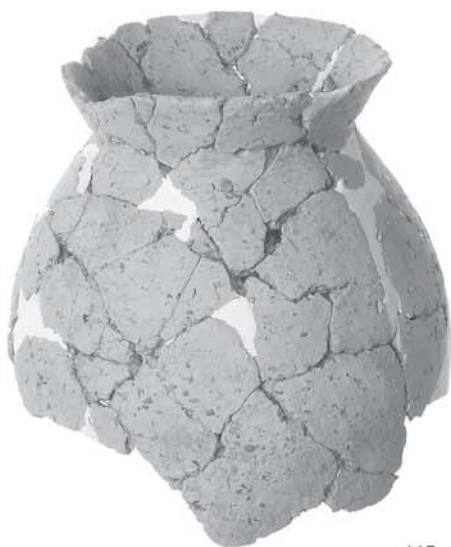
114
ガラス小玉



110
有孔円盤

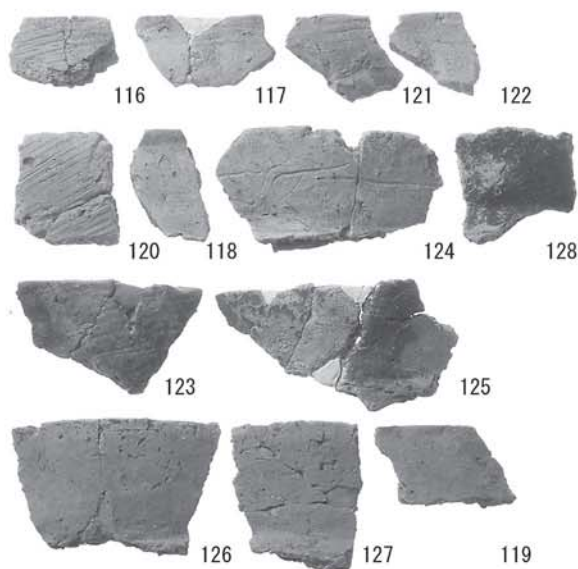
竪穴建物跡出土石器、石製品、ガラス小玉

十郎ヶ尾遺跡 図版 10

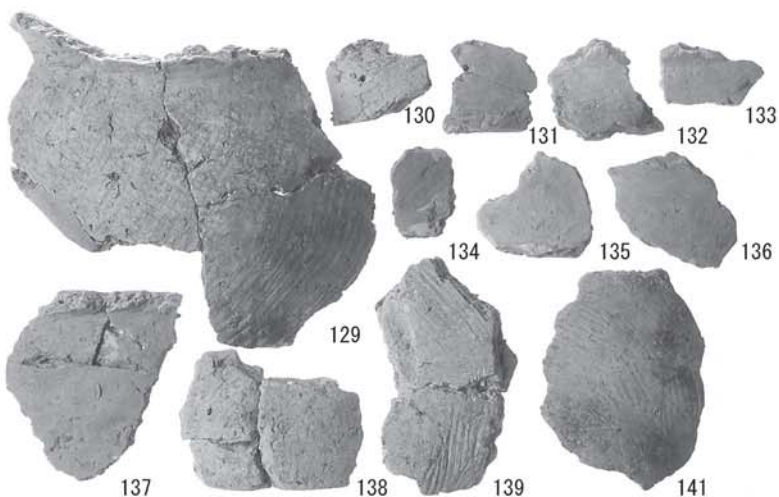


115

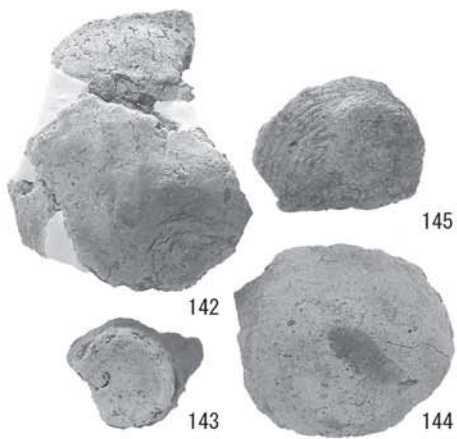
甕



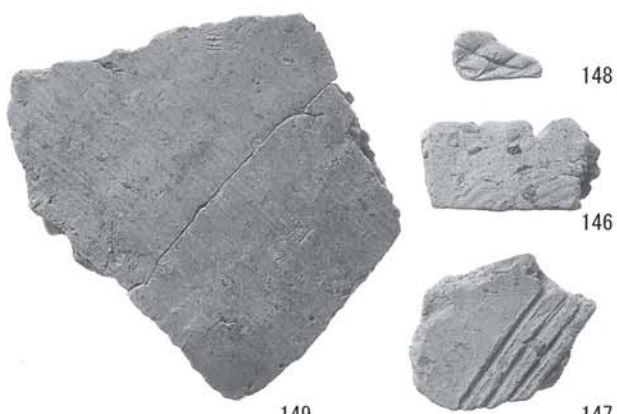
甕 口縁



甕 頸部～胴部



甕 底部

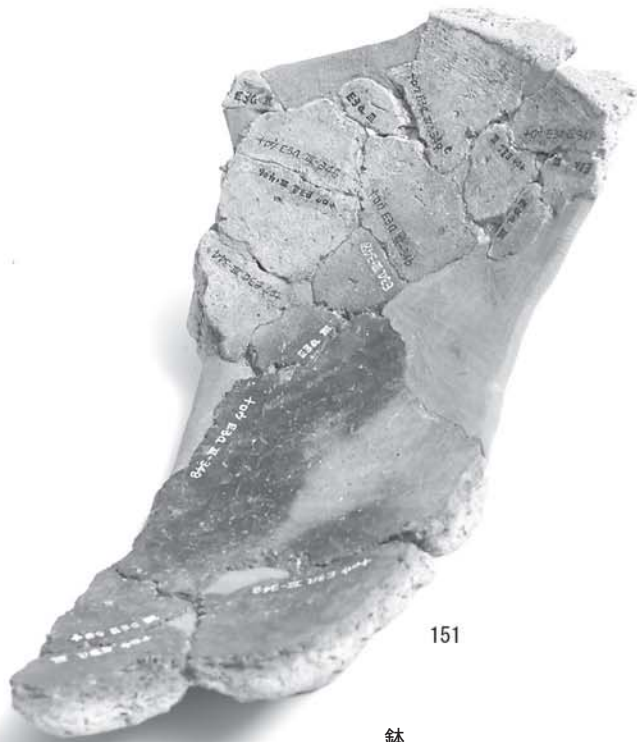


壺 口縁～胴部



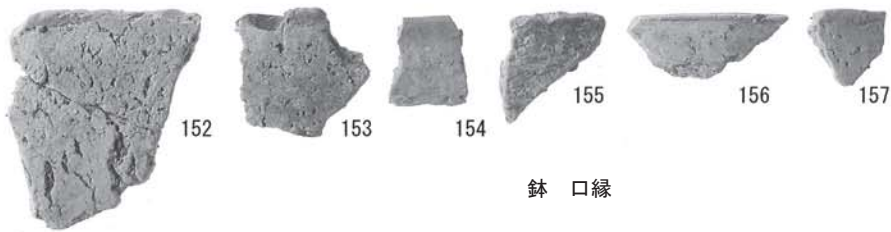
壺 底部

包含層出土土器



151

鉢



152

153

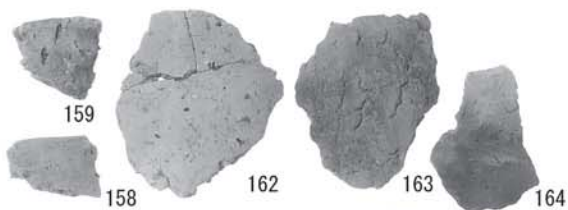
154

155

156

157

鉢 口縁



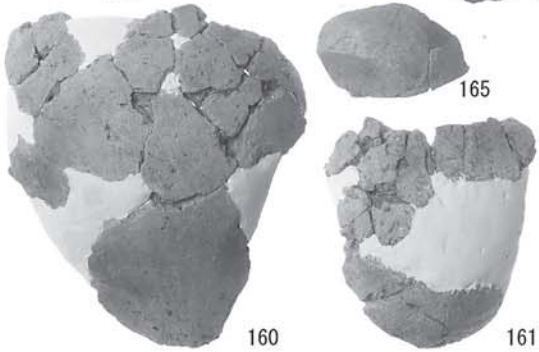
159

158

162

163

164



160

161

小型土器



165



168

土錘



166

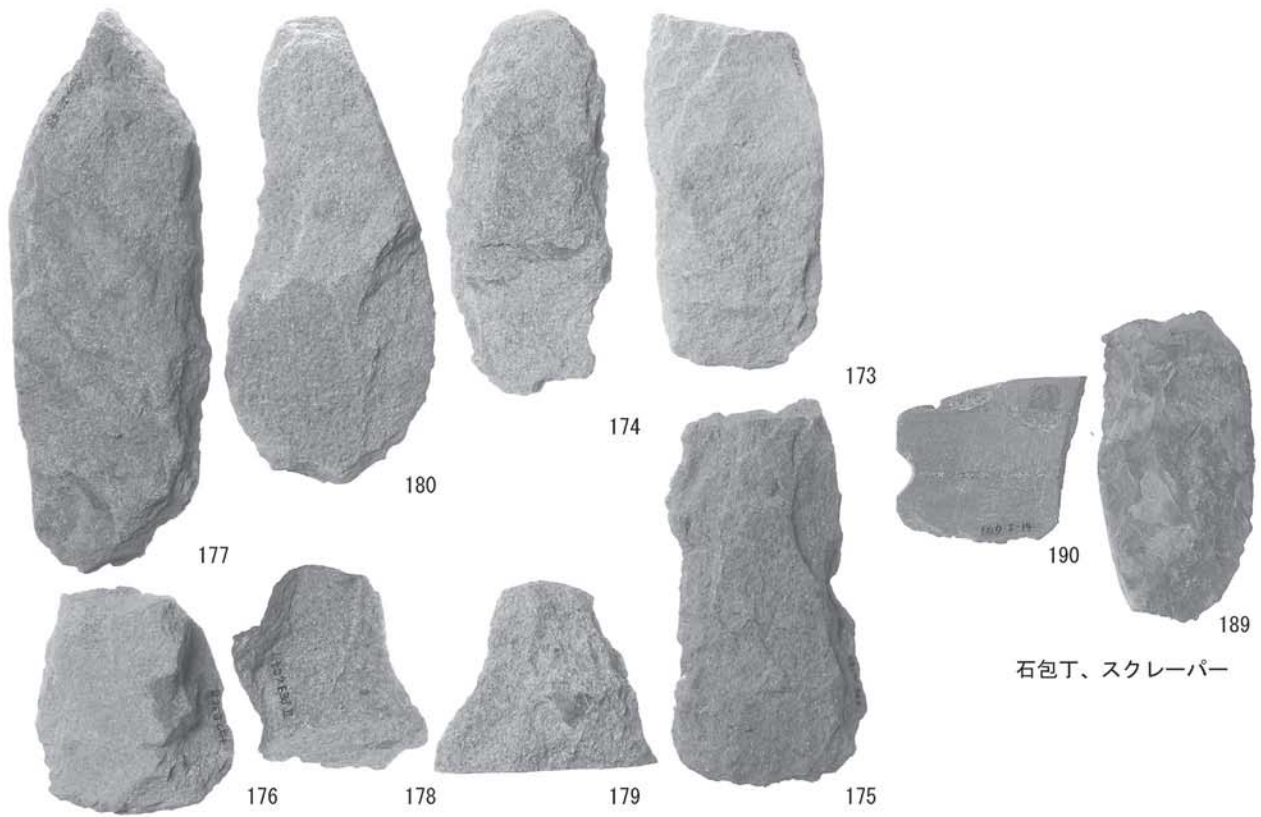
高坏 脚



167

紡錘車

包含層出土土器、土製品



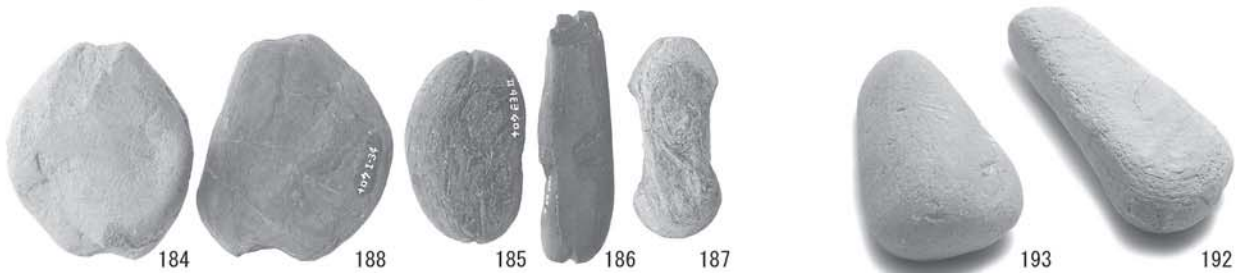
石包丁、スクレーパー

打製石斧



磨製石斧

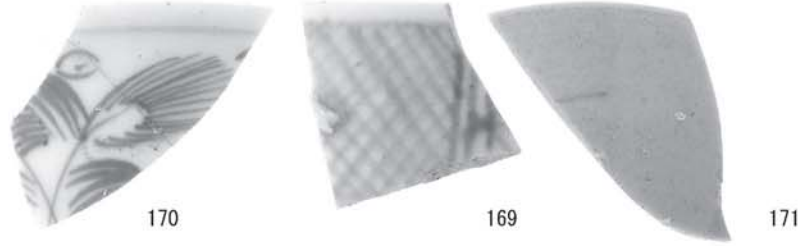
砥石



石錘

礫器

包含層出土石器



陶磁器



播り鉢



仏飯器



黒曜石原石



硬貨



煙管



鉛玉

包含層出土遺物

報告書抄録

ふりがな	じゅうろうがおいせき							
書名	十郎ヶ尾遺跡							
副書名	一般国道218号北方延岡道路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	8							
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第218集							
編著者名	川越 宏之							
発行機関	宮崎県埋蔵文化財センター							
所在地	〒880-0212 宮崎市佐土原町下那珂4019番地 TEL 0985-36-1171							
発行年月日	2012年 3月23日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
じゅうろうがおいせき 十郎ヶ尾遺跡	みやざきけんのべおかし 宮崎県延岡市 きたかたまちね 北方町子 4146	45-203	0039	32度 34分 25秒	131度 31分 54秒	20101101 ～ 20110218	1000 ㎡	記録保存調査 (一般国道218号北方延岡道路 工事)
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
十郎ヶ尾遺跡	集落	旧石器時代、縄文時代、 弥生時代、古墳時代		集石遺構 1基 竪穴建物跡 1基		角錐状石器、 縄文土器、石鏃、 剥片、弥生土器、 土師器		
要約	<p>標高約 60～70mの舌状の尾根の北斜面に立地する旧石器時代～古墳時代の遺跡であり、集石遺構 1基、竪穴建物跡 1基が検出された。</p> <p>出土遺物は、旧石器時代の角錐状石器、縄文時代の押型文土器、石鏃、剥片、弥生時代・古墳時代の土器、石器であり、長期にわたるこの丘陵上での生活の痕跡をとどめている。</p>							

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 218 集

じゅうろうがおいせき

十郎ヶ尾遺跡

一般国道 218 号北方延岡道路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2012 年 3 月 23 日

発 行 宮崎県埋蔵文化財センター

〒 880 - 0212 宮崎県宮崎市佐土原町下那珂 4019 番地

TEL 0985(36)1171 FAX 0985(72)0660

印 刷 株式会社 都城印刷

〒 885 - 0055 宮崎県都城市早鈴町 1618 番地

TEL 0986(22)4392 FAX 0986(22)4891

